だんおん！

はじけこぶし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だんおん！

【Ｎコード】
Ｎ３２８７Ｒ

【作者名】
はじけこぶし

【あらすじ】
『けいおん』の２次創作。
舞台は共学になった桜が丘高校。
平沢唯に恋する地味な主人公藤澤連太郎は悪友富永輝彦の企みにより桜が丘高校に入学を果たす。
そこで繰り広げられる複雑な人間関係の中、連太郎は果たして想いを伝えることができるのか？
新たな友人たちと共に、いざ、男子軽音部始動！
文章力、誤字、脱字がある場合は教えて下さい。すぐに直します。

第1話『れんたろう』

「桜が丘に入学するぅうー？」

日曜日の午後の昼下がり。まったりとパジャマ姿でゲームをしていた藤澤連太郎（ふじさわれんたろう）の前に突然来訪者が現れた。

「ＹＥＳ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｒｉｇｈｔ！（イエス　オン　ザ　ライト！）」

来訪者は普段使いなれていない英語を下手に言うと親指を立ててニッと笑った。

来訪者の名は富永輝彦（とみながてるひこ）。連太郎の友達と呼ぶには微妙な友達である。

連太郎は正直さっさと帰ってくれ、という気持ちでいっぱいであったが、ここはこらえて話を聞いてやる事にした。

「今年から桜が丘が共学になるのは知っているだろう？」

桜ヶ丘高校は連太郎達が住んでいる地域ではとても有名な私立の女子校である。伝統を重んじる昔ながらの姿勢と趣のある校舎は人気があり、連太郎が通っている中学校でも多くの女子生徒が受験するそうだ。

そんな私立桜ヶ丘高校は何故か今年から共学になったのだ。理由は色々あるらしいが連太郎にはそこまで深い理由はわからない。

「だからよう行こうぜ！　桜ヶ丘に！」

「何でだよ？」

連太郎からしたらとても迷惑な話である。高校受験なんて個人個人目的があって自分で決めて自分の通いたい高校に通うのが定説だ。連太郎も受験する高校はもうすでに決めておりいきなり、行こうぜ、と言われても首を横に振るしかないわけだ。

「俺たち友達だろう？」

都合の良い時だけ友達を装ってくるコイツをどうやって追い出そうかと考えている連太郎の目に金属製のバットが目に入る。

（いっそのことあれでヤっちまうか？）

「おい。今物騒な事考えてなかった？　なんかすごい悪寒がしたんだが？」

「そうか」

「否定しないのかよ！」

どうやら連太郎の意図は輝彦に見破られたようだ。警戒されて少し距離を置かれる。はぁ～、とため息をついて連太郎は話を戻す事にした。

「だが何で桜ヶ丘なんだ？」

共学になったと言っても元は女子校。受験する男子の数も少ないと考えられる。受験するだけならまだいいが受かって通い始めてからが大変だ。周りが女性だらけの空間というのはどんな男性から見ても酷である。

が、それに関わらず、行こうぜ、と言いだすとは何か理由があるのか？

「女子がいっぱいで最高だろうがっ！」

「……」

輝彦の性格を充分に理解していた連太郎だったが流石に頭が痛くなった。

「あのな動機が不純すぎるぞ。何よりもそんな理由じゃあ他の受験生に失礼だ」

当然の正論である。

「はぁ、アホか？　受験なんてどこ受けるにしたって理由なんか大概後から決めてるもんだぜ。将来の夢とか就きたい職業の関係でちゃんと決めてる奴もいるがそんなのはごく少数だしな」

続けて

「それに俺は例えくだらない理由でもないよりかマシだと思うぜ」

ニッ、と笑った。

そんな輝彦に連太郎は一言。

「どんなに取り繕ってもその理由は最低だぞ」

所詮は輝彦の勝手な言い分である。

もう話に付き合うのもバカバカしくなってきた連太郎は、

「とにかく俺は絶対行かないぞ」

改めて言うと、

「え～何でだよ？」

「前にも言ったが俺はもう受験する高校は決めてあるんだ。だからどんなに言われようと無理だ」

連太郎はこれで諦めてくれるだろう、と確信を持ったが

「そうかぁ～お前は行かないのか～」

何故か思わせぶりな言葉を返された。

「なんだ？　その思わせぶりな言い方は？」

問いただすと輝彦は不適に笑うと言った。

「いや～確か唯も桜ヶ丘を受験するとか言ってたな～っての思い出してよ」

「なっ！？」

瞬間、連太郎は凍りついたように思考が止まる。

「まぁ～仕方ないよな。無理強いしてもしょうがないし。俺帰るわ」

「ちょっと待てっ！」

「何だよ～？　俺帰って勉強しなきゃいけないんだけど～」

（こっ、この野郎！　勉強なんかした事なんかないくせに）

「しょうがない。聞いてやるよ」

「行く」

「え？」

「だから行く」

「え？　聞こえない」

「俺も桜ヶ丘に行くっつてんだろうがぁあああああああ！」

結局連太郎は上手い具合に丸めこまれたのだった。

第1話『れんたろう』（後書き）

けいおんの2次創作なのに唯を含めけいおんのキャラが一切出てきてない

自分の文章力の無さに幻滅です

次こそは誰か出したいです。

第2話『じょしたち』（前書き）

少し時間が経ちましたが2話目を投稿します。

第2話『じょしたち』

連太郎が『桜が丘を受験する』と宣言した頃。

「てーくんとれんくんも桜が丘を受けるの！？」

平沢唯（ひらさわゆい）は自室で勉強をしていた手を止め驚きの声を上げていた。

「ちょっと驚きすぎじゃない」

彼女の親友である真鍋和（まなべのどか）は逆に落ち着いた様子で唯に目を向けて言った。

（でも桜が丘って女子高じゃなかったっけ？　てーくんとれんくんは男の子で、私は女の子で……あれっ？　女子高は女の子しか入れないんだっけ？　いやいやそれじゃ女子高じゃなくなっちゃうし……でももしかすると）

その時考えを巡らしていた唯にある答えが浮かんだ。

「実は2人は女の子だったんだね！」

「どこからそんな発想が生まれたのかしら？」

小さい頃からの親友で良き理解者である和だが唯の天然発言には今でも少しだけ対応が難しいと感じている。なので今の発言にも理解するにはコンマ3秒ほどかかった。

「桜が丘は今年から共学になったのよ」

「驚……愕」

「多分だけど今唯が考えた『きょうがく』は違うわよ」

「えっ？」

「こう書くのよ」

和は分かっていなさそうな唯の為に勉強していたノートの端に『共学』と書いて見せた。

「へ～これで『きょうがく』って書くんだ～」

「……ついでに聞くけど唯。『共学』の意味は分かるかしら？」

「和ちゃん私だって意味くらいわかるよ！」

意気込んでむっ～と唯は和の書いた『共学』の文字を見つめる。

「うーーーーーーーーん」

「……」

「うーーーーーーーーん」

「……」

「駄目だ。いくら考えてもわかんない」

駄目だった。

ついでに涙目になっていた。

ふー、と息をこぼし和はやっぱりと言うような顔をして言った。

「簡単に言うと男子も桜が丘に入学出来るようになったのよ」

それを聞くとウンウンとさも分かっていたかのように首を縦に振る唯。和は優しいのであえて振れずに話を進めた。

「だからテルも藤澤君も桜が丘に受験できるのよ、わかった」

「うん！」

「なんか無茶苦茶不安だわ」

笑顔で元気よく返事する唯に和は不安を隠しきれなかった。

その頃別の場所では

「お嬢様考えを改めてください！」

「いいえ。私は絶対に桜が丘高校を受験します！　それに斎藤この件についてはあなたも賛成していたではないですか？」

「それは桜が丘高校が女子高であった時の話です！　共学の学校に通わせるなどこの斎藤絶対に許しませんよ！」

ある所のお嬢様である琴吹紬（ことぶきつむぎ）は執事の斎藤（さいとう）と口論の真っ最中であった。

「私は桜が丘高校に行きたいんです。それに私がどの高校を受けようと斎藤が口を出す権利はありません」

「いいえ。私は幼少の頃より旦那様、奥様からお嬢様の身の回りのお世話を任されてまいりました。なれば口を出すのは当然であります」

どっちも譲る気はないらしくお互いがお互いの意見を言い合っているのだがそのどれもが衝突してしまうのだ。

深呼吸し紬は息を整える。

「斎藤、私が幼少より女子校意外の学校に通った事がないのは知っていますね」

声には先ほどまでの荒げた様子はなく落ち着いている。

「当然です」

「ではそんな私が一度くらいは共学の学校に通ってみたいと思うの

は駄目な事ですか？　いけない事ですか？」

「そ、それは……」

斎藤はひるんだ。

「せめてこれくらいのワガママは聞いてください」

自分の気持ちを正直に口にする紬。その姿に斎藤は

「……わかりました」

ついに折れた。

そのまた別の所では、

「なんでだよ～澪？」

「嫌なものは嫌だ！？」

「共学になっただけじゃん」

「だから嫌なんだよ！！」

秋山澪（あきやまみお）はだだをこねる子供のように体育座りで部屋の片隅にいた。
田井中律（たいなかりつ）はそんな澪の姿をため息混じりに見ていた。

（この前まで一緒の学校だね～って話てたのに共学になった途端にこれだよ共学を取り止めてください、なんて学校に言えないし。トホホ、どないせー言うんじゃい）

少し涙が出そうになる律。澪は何故か男子に対し過剰な苦手意識を持っている。その為桜が丘が急に共学になった事に動揺し今のような状態になっているのだ。

（よし。だったら持ってきたコイツらを使うぞ）

意を決して律は持ってきたバッグの中からある物を取り出すと、

「澪ー見てみてー」

「？」

涙目で崩れかけた顔を上げる澪。

「デッカくなっちゃった！」

「それもう古いぞ」

「だったら……コイツだぁ！」

またもバッグの中から律はある物を取り出した。

「りっちゃん、ぺっ！」

「もっと古い！　ていうか何だそのチョビひげは！？」

「ふふ～ん。これは１００円ショップで売ってるお買い得品さっ！
なんとチョビひげもさっきの耳も１００円！」

「１００円ショップなんだから当たり前だろ！」

（いつもの澪に戻ってきたな。もうひと押しだ。次は、）

さらに律はバッグからちょんまげのカツラを取り出し頭に被ると、

「拙者、デカ耳侍じゃあ。デッカくなっちゃった！」

「あっははは、なんだそれ！」

澪は大笑い。くだらなくお笑いのセンスのかけらもないが何故か澪の口角は上がっていく。

（しめた！　今ならいける！）

律は言った。

「じゃあ桜が丘を受けようぜ！」

「え？」

聞くと澪はガタガタと体を震わせ始め、目に涙を浮かべ、体育座りになった。

「う、受けたくない～」

笑わせていつも通りの澪にしたかったが、やはりその壁は予想以上に厚く元通りにするには難しかった。

ため息をし頭を掻きながら律は澪の隣に座る。

「もういいよ澪。無理して桜が丘を受けなくって」

「……」

「私なんか自分の考え押し付けたよな。……ごめん。澪にも都合や考えとかあるのにな」

「……」

「たださ。ただ、私は澪と同じ学校に行きたかっただけなんだよ。それだけはわかって欲しいんだ」

「……たいよ」

「うん？」

「行きたいよ！　私だって律と一緒の学校に行きたいよ！」

「じゃあ一緒に桜が丘を……」

「でも男子は本当に苦手なんだーーーーーー！」

（これでも駄目か……）

この後も律の説得は続く事になるのは想像にかたくない。

第2話『じょしたち』（後書き）

それぞれのけいおん部員が共学になった事でどんな反応するんだろう？　と考えたらこうなりました。
次には入学式に持っていけるようにします

第3話『ごうかくはっぴょう』

合格

その言葉はある種の喜びを与える。

「やっ、やった。やったよ和ちゃん合格したよ！」

「2人とも合格ね。よかった」

またその言葉は逆に絶望という名の悪夢を見せる。

「な、な、ない……だと」

「やっちまったなレン。見事不合格だ」

「くっ、あああ……あんなのに頑張ったのに……それなのになんでお前が合格してんだよ」

「実力の違いってヤツだな」

その両方を兼ね備えた場所『合格発表』はまさに戦場という名に相応しいのかもしれない。

藤澤連太郎もその中にいたのだが結果は……もう言わなくてもいいよね？

「てーく～んれんく～んそっちはどうだった？」

屈託のない笑顔を携えながら平沢唯は走ってくる。その後ろから「急に走ると転ぶわよ」とまるで母親のような眼差しを向けながらゆっくりと歩く真鍋和。表情が今の連太郎と同じ色でない所を見ると彼女達は無事『合格』したようだ。

本日は桜が丘高校の合格発表の日である。

「おう唯に和。バッチリだ！　これで俺も晴れて桜が丘高校の生徒よ」

返事をしたのは言うまでもないが輝彦である。

「よかった～。また同じ学校だね」

「テルも合格しちゃったのね」

「おい和。その態度は何だ。俺が合格しなければ良かったとでも？」

「はっきり言うと……そうね」

「相変わらず厳しいな！」

3人は合格したのでテンションが端から見ても上げ上げだった。真鍋さんでさえいつもと比べると若干浮ついているように見える。ひとり不合格な連太郎は完全に置いてきぼりをくらってしまった。3人との明らかな壁を感じながら見ていると、

「れんくんはどうだったの？」

そんな連太郎に気づいたのか平沢さんが聞いてきた。

「駄目だった」

気にしていてもしょうがないのでハッキリと口にする。

「そっ、そう……なんだ」

「……残念だったわね」

しまった！　逆に気を使わせてしまった！　他にもっと上手い言い方があっただろう、俺！

「まぁ、ようはレンがバカって証明された訳だな」

「お前は少し気を使えやあ！」

輝彦は2人と違い連太郎が受からなかった事が嬉しいようでニヤニヤとしている。

「人の不幸はミツの味って言うだろ」

最低なヤツだ。

笑顔がさらにそうハッキリと認識させる。

「そんな事より受付に行こうぜ。レンはここで待ってるか？　つってもここにいちゃあ悲しくなるだけだろうけど」

こっ、この野郎〜〜！
火で炙って素薪にしてやろうかっ！

「ちょっとテル」

俺が反論するよりも先に真鍋さんが口を出した。

「さすがに言い過ぎ」

と、言いながら真鍋さんの手は自然に輝彦の耳まで伸び思いっ切り引っ張った。

「イデデデデっ！！」

見事な手際の良さだ。思わず感心してしまう。

「そうだよ、てーくん。今のはいじわるだったよ」

平沢さんも特に何も言わず、逆に輝彦に対しての注意を言う。

「わかった、わかった和！　俺が悪かったから離してくれっ！！」

「私に言う事じゃないでしょ、ほら」

真鍋さんは輝彦の目を連太郎に向けさせる。

「ごめんレン！」

「まぁ、別にいいけど」

こんな痛々しい場面を見てたらさすがに許さざるをえないしな。
輝彦少し涙目になってたし。
それになにより、

「どうしたの藤澤君？」

真鍋さんの前ではあまりふざけないようにしないと。

入学の手続きで輝彦と平沢さん、真鍋さんは受付に行っている間、校門の前で待つ事にした連太郎だがやはり暇になってしまった。こうなるとこの場にいるのはやはり居心地が悪い。

「みんな無事に合格出来て良かったね」

「本当本当。１人だけ違う学校になるなんて絶対嫌だもん」

通り過ぎていく多くの女子は十中八九、俺の事を不合格なのに合格出来なかった事を悔やんでいる未練タラタラ野郎と思っているんだろうな。
さっさと帰れば良かったかな？
と、ひがんでいるとさらに２人組の女子が見えた。

「澪、いつまで落ち込んでんだよ」

「だ、だって」

「そりゃあ澪が落ちたのは私もビックリしたけどさぁ」

「……あんなに頑張ったのに……それなのに……禄に頑張ってもいない律が受かってるんだよぅ～」

「アハッ！　何のことやら～」

どうやら連太郎と同じような境遇の人もいたようだ。

気持ちは良くわかるぞ！

頷きながら届きもしない言葉を送ると、その子と目が合った。軽く会釈を返すが、一瞬で目を逸らされる。

えっ、今なんか嫌われた？

そのまま2人組の女子は校門を通り出て行った。

「おーいレーン……ってお前どうした？　なんかさっきより暗いように見えるんだが！」

「いや、ちょっと女子ってわからないなぁって……」

あいさつしただけなのに返されないどころか目を逸らされるとは思わなかった。

「何を今更。男が女の気持ちなんかわかるわけないだろ」

輝彦は時々、的を射た発言をする。

「それに女はズルいんだぜ」

お前は何様だ。

「そういえば受付は終わったのか？」

輝彦がここに現れたという事はそうなんだろうが。

「ああ。俺は一足先に終わったからな。『先に藤澤君の所に行っていいわよ。受付の辺りにうろうろされても邪魔だしね』との和からのお達しがあってな」

結構ズバズバ言ったなぁ。

「俺はてっきり真鍋さんは誰にでも優しい人だと思ってたんだけど……」

「確かにそういうイメージ強いけど親しい奴には結構キツいぜ。今回の桜が丘高校の受験の時、唯に一切何も助言しなかったらしいしな」

「へぇ～」

と、ここで俺にはある疑問が頭に浮かぶ。

なんでコイツそんなに詳しいんだ？

朝の待ち合わせの時も2人と一緒にいてビックリさせられたが。

会話の節々にも謎がいくつかあったし。う～ん、考えたら余計に気になってきた。

直接聞いてみたほうが良さそうだ。

「あの聞いていいか輝彦？」

「何だ？」

「お前と平沢さん、真鍋さんの関係って？」

「えっ、あ～なんというか。え～っと……う～ん」

明らかに動揺の表情を浮かべる輝彦。

怪しい。

もうちょっと突っ込んで聞いてみようか。

「幼なじみよ」

「「どわあっ！」」

連太郎と輝彦は同時に驚いた。

声の主は真鍋さんだった。

心臓が飛び出るかと思った……。

「急に声かけんなよ和。ビックリしただろう」

「それについてはごめんなさい。別に驚かせるつもりは無かったのよ」

ちょっと怒り気味の輝彦を宥めるように謝る真鍋さん。

「で、幼なじみって言うのはどうゆう事なの真鍋さん？」

輝彦ではきちんと答えてくれなさそうなので真鍋さんに聞いてみる。

いや、もう既に答えてもらったのだが連太郎はこれを信じたくな

かった。

「言葉通りよ。私と唯、そしてテルは小さい時からの幼なじみなのよ」

なっ、なんだとーーーー！

「悪かったよ。そうむくれんなって、なっ」

「『なっ』、じゃねぇよ！　お前なんで隠してた！　なんで平沢さんと幼なじみだって事を隠してたぁ！？」

帰り道

平沢さんと真鍋さんは寄るところがあると別れた後、連太郎は輝彦を問い詰めた。

「いやぁ～まぁ～……いいじゃねぇかそんなの。気にすんなよ」

「気にするわっ！」

だって『幼なじみ』だぞ！　『幼なじみ』なんだぞ！
『幼なじみ』と言えば漫画や小説の中に存在するとても甘いポジションではないかっ！　好きなものから苦手ものから癖までお互い知らない事はないという。
正直言って、

羨ましすぎるわっ！

連太郎は輝彦をチラッと見て、間合いを確認すると思いっ切りジャンプした。

死ねっ！

「おおっ危ねぇ！　……お前っ！　いきなりドロップキックはねぇだろ！」

「うるせぇ！　てめぇはもう友達じゃねぇ！」

受験不合格と友だと思っていた奴が好きな人と幼なじみ同士というある意味ダブルパンチを食らった連太郎の怒りは頂点を達していた。

「ちょっとは俺の話を聞けよ」

「遺言なら聞かんぞ！」

「違ぇよ！　面倒くさいなお前は！」

輝彦は息を整え、話し始めた。

「俺はな。お前が最初、唯の事を『好きだ』って聞いた時本当にどうしようか悩んだんだぞ。幼なじみって事実をそのまんま伝えたらお前……俺の事どう思う？」

「そ、そりゃあ……」

……当然

「恋敵だのライバルだのって思うだろうが。だから俺はあえて言わなかったんだよ。いや、言いたくなかったんだ。お前とはそん時ぐらいから結構仲良くなってた時期だし、変な事言って絶交とかしたくなかったんだよ」

輝彦……お前そんな風に……。

俺との仲を守るために。

そこまで考えて……。

「あ～あつまんねぇつまんねぇ。つまんねぇ話しちまった。ゲーセンでも寄ってこうぜ。確か新しいゲームがあったはずだ」

「輝彦……悪い」

「だから気にすんなよ。それにお前はまだ受験終わってねぇだろ」

そうだ気にしている場合じゃない。

俺にはまだ一般受験が残ってるんだ！

第3話『ごうかくはっぴょう』（後書き）

いや～小説は難しい

いろいろ詰め込んで訳分からんちんな状態になってます

しかも書いてる途中で思ったんですが輝彦のほうが書きやすかったり。

第４話『にゅうがくしき』（前書き）

タイトルと中身があっていない気がする

第４話『にゅうがくしき』

春

それは華やかな桜が舞い散る季節。

春

それは学生たちの新たなる生活の第一歩となる季節。

春

それは……、

「はっ、はっくしょん！？」

花粉症の人にとって一年間で一番最低な季節なのである。

藤澤連太郎は春が嫌いだ。

嫌いな理由は彼も『花粉症』だからに他ならない。しかも連太郎の場合スギ、ヒノキの花粉に反応するので余計に辛い。くしゃみ、鼻水、鼻詰まりが止まらないこの苦しみは同じ花粉症持ちでない限り共感など出来ないだろう。

だから冬の寒い時期を終えた４月の春、真っ只中の朝の交通路を歩いていても彼のくしゃみは止まることはないのだ。

「はっくしょん!?」

「さっきからうっせぇな。そのくしゃみどうにかなんねぇのか?」

「そんなの無理に決まっ……はっくしょん!?　……てるだろ。はっ、はっくしょん!?」

ズズーと連太郎は鼻水をすする。

予防のためにマスクはつけてはいるがそれでも少しの隙間から花粉は容赦なく襲ってくるので完全に防ぐ事は不可能なのだ。

「あーこれから入学式なのに……はっくしょん!?」

「どうでもいいけどこっちに飛ばすなよ。花粉症って移るらしいからな」

普通『大丈夫か?』とか一言あってもいいのに、この野郎。

ちなみに先ほどから連太郎と話しているのは親友?　の富永輝彦である。

「花粉症が移るわけないだろ。花粉症はアレルギーのいっ、くしゅん!?　一種だから移るなんてことは、はっくしょん!?　ないよ」

「面倒くさいな。いちいちくしゃみを間に入れんなよ」

と、言われても……

「は、はっくしょん!?」

連太郎にはどうにも出来ない事なのだが。
輝彦はそんな連太郎の辛そうな顔を見ると、ニカッと口角が上がり笑みをつくり始め、そのまま言った。

「まっ、俺には関係ないけどな」

「チッ」

思わず舌打ちをしてしまう連太郎。
こういう時の輝彦の笑顔は大抵他人の不幸を楽しんでいる顔だ。
相も変わらず最低な奴だ。

「おっ、桜が丘が見えたぜ」

輝彦が言うように桜が丘高校が見えてきた。
連太郎の頭に過去の自分が頭をよぎった。
推薦受験の合格発表の後、連太郎は一般受験に向けて猛勉強をした。連太郎の学力は悪いほうではないのだが桜が丘高校はギリギリのレベルだった。だか輝彦は諦めなかった。度々、輝彦が邪魔をされたがへこたれず頑張った連太郎は見事桜が丘高校一般受験を合格したのだった。

頑張ったなぁ、俺。

そして今日からはここの生徒になるのか

連太郎には新鮮な気持ちがこみ上げた。
受験などで何度も訪れていたが今日、今この時見る桜が丘高校は全然違うように思える。
今日からここの生徒になるという事がこんなにも自分に感慨深く

思わせるなんて……

「思わなかったな」

「おーいさっさと行くぞー」

気づくと既に輝彦は反対側の道を渡ってこちらに手を降っている。
いつの間に。

「今、はっくしょん!?　行くよー、はっくしょんはっくしょん!?」

何はともあれ今日から俺は高校生だ。

入学式の前、連太郎は発狂しそうになった。
それはこの一年間の全てを決める一番大事なこと。

その名も『クラス表』を見た時であった。

1年3組と掲示されている中に自分の名を見つけ、上に書かれている名前を深く噛み締め小さくはっきりと読み上げる。

「平沢唯……」

よっしゃあああああああ！？
この時初めて心の底から連太郎は喜んだ。
神様ありがとう、と。
桜が丘高校の先生ありがとう、と。
そして今、目の前の席には平沢唯がちょこんと座っているのである。

「れんくん同じクラスで良かったね」

本当に……良かったっす！
平沢さんのつぶらな瞳、平沢さんの柔らかそうな頬、平沢さんの美しい髪、触れただけで壊れてしまいそうな体、どれをとっても最高だぁーーーーー！

「あら2人とも同じクラスだったのね」

「うわっ！？」

連太郎は喜びすぎて近寄ってくる人物に気づかなかった。

「あっ、和ちゃん」

「藤澤くん。この前に引き続き、私もさすがに少し傷つくわよ」

その人物は平沢さんの親友、真鍋和だ。

「ごめん。ちょっとぼっ～としてて、はっくしょん！？」

真鍋さんは言っているほど傷ついているようには見えないが取り

敢えずここは謝っておく。

「まぁいいわ。ところで唯、今日は早かったのね」

『まぁいいわ』ってやっぱり真鍋さんはちょっとドライな所があるよな～。

「実は朝、時計の時間を見間違えちゃって……」

「それでいつもより早かったのね」

平沢さんはかなりのドジッ子である。連太郎も中学の時にその場面を幾度となく見た記憶がある。

「遅刻するよりはマシね」

「そうだよね」

無茶苦茶良い笑顔だけど平沢さん、誉められてませんよ！

「今日ってこの後、入学式だけで終わるんだよね？」

平沢さんは真鍋さんに聞いた。

「いいえ。確か入学式をやってその後またこの教室に戻ってきて自己紹介と明日からの時定の説明があったはずよ」

「えっ、そうなの！？」

半信半疑な平沢さんは連太郎に聞いた。

「うん。さすがに入学式だけでは終わらないよ」

「入学手続きのプリントに書いてあった筈だけど……唯、もしかして見てないの？」

「えっと～……えへっ」

見ていないらしい。

平沢さんらしいと言えば平沢さんらしい実に微笑ましい本日のドジッ子パート2だ。

「何か予定があるの？」

連太郎は突っ込んだ質問をした。

入学式の事を聞いてくるのだから、何か用事があるのかもしれない。

「てーくんがね。『どうせ入学式は午前中で終わるから、その後みんなでどっか食いに行こうぜ』ってさっき言ってたんだ」

つまり、平沢さんと一緒に食事が出来るということか？

連太郎は中学の時、話した事はあれど一緒に食事をした事など皆無。だから、この誘いは連太郎にとってとても魅惑的なのだ。

「なるほどね。別に私はいいわよ」

「れんくんはど……」

「大丈夫です！」

平沢さんの言葉を遮り連太郎は勢いよく言った。しかもそれ大声だったため、騒がしかった教室は一気に静かになりみんなの目は全て連太郎に集まった。

どうしていいか分からず連太郎は銅像のように固まった。

え、あれっ？　あの～その～

彼の思考回路は回らなくなっていた。人間、いきなり注目されると考えがまとまらないものだ。しかも連太郎はシーンと静まり返った教室をどうにかするユーモアもない。

ど、どどどどうすれば～～～

瞬間、

「うっそぉおおおおおおおん！」

隣りのクラスから聞き覚えのある声が聞こえた。

今度はその声のしたクラスの方をみんな注目する。

占めた！？

「ちょっと俺、お手洗い行ってくるよ」

これを機に連太郎は教室の脱出に成功した。

「わかりやすいわね」

「何が和ちゃん？」

「あんたはまだ知らない方がいいわね」

「？」

富永輝彦は女子が好きである。

だからこそこの元女子校の桜が丘高校を受験したのだ。女子校だった学校が共学になるなどそんなにあるものじゃない。しかも自分の家から近いともなれば尚更である。そんな簡単な理由でも彼は真剣で、本気だった。

女子

女子

女子

「さいっこうだな桜が丘」

見渡すばかりほぼ女子で統一されている教室。

輝彦は満面の笑みであった。
『クラス分け』によって輝彦があてがわれたのは1年2組の教室であった。連太郎や唯、和など知り合いは全員隣りの3組だが、輝彦は決してショックを受けるような事はない。
なぜなら、
「知り合いがいないほうが好き勝手出来るし、やっぱやりやすいよな」
だからだ。
和がいちゃあ、いつ耳を抓られるかわからないし、連太郎がいても絶対に注意されるし、唯は……まぁ、いなくてもいても一緒だがどちらかっていうといないほうが良い。
以上の理由で誰も知り合いがいない事は彼にとって都合が良いわけだ。
さぁ～て誰に最初に声をかけるかな？
「ねぇねぇ、君」
あの黒髪の女の子とかいいな。
顔は大和撫子に相応しいほど綺麗な顔だし、身長もスラリとして高いし、一見するとモデルさんだな。
でも雑誌で見かけた事はないな。
新人さんか？
「もしも～し？　お～い？」
一緒にいるカチューシャの子も大和撫子さんとは違った美人だな。
活発っていうか元気が似合いそうな感じだ。ああいう子も俺的には

ストライクゾーンだ。

「あの～？」

やっぱり声をかけるっきゃねぇ！

「聞いてます？」

「おおっ！」

目の前にいきなり可愛い女の子が顔をだしため輝彦は驚いた。

「あっ、ごめん驚かせるつもりはなかったんだ」

女の子は申し訳なさそうに謝る。

かっ、可愛い！

思わず息を呑む輝彦。

つぶらな瞳と長髪を後ろで束ねているが印象的な女の子だ。

「なっ、なんか用か？」

「よっ、用ってわけじゃないんだけどねっ。えっと～……よければ僕の話相手になってくれないかな？　周りに知り合いがいなくて」

こっ、これは俗に言う逆ナンかっ？

いや、だがこの状況はどう見ても逆ナンだろっ！

しかも今現実にはほぼ絶滅危惧種に指定された『僕っ娘』だとぅ！？

ヤベぇ、さすがに元女子校はレベルがたけぇ～！

「別にいいが俺と話たってつまんないぞ。どっちかって言ったらあっちの女子のほうがいいんじゃねぇのか？」

逆ナンと言っても今日初めて会った女の子の誘いに乗るほど輝彦はバカじゃない。それに一年間同じクラスになるのだ。まだ、チャンスはあるし、じっくり仲を深めるほうがここはいいだろ。

「ええっ！？　無理だよ！　女の子に話しかけるなんてっ！」

恥じらう姿が可愛いすぎだろっ！
手をバタバタさせて顔赤らめられたら、どんな奴でも一発で落ちるぞ。
くぅ～見れば見るほど可愛いく見えらぁ！
男子の制服もよくにあっ……。

「……」

アレっ、なんか見間違えたかな？

いやいやそんなわけない。うん俺の見間違いだよ、きっと。
だってこんなつぶらな瞳をしてて、可愛い顔だちをしてて、僕っ娘で、男子の制服を着ている……。
変な汗が体中から溢れでた。
この汗を拭う方法は一つしかない。

「聞いていいか？」

直接本人に聞く以外には。

「……君、名前なんていうの？」

『君は男の子か？』と聞くのはさすがに勇気がいるので遠回しに名前を聞く。

「あっ、まだ言ってなかったね。僕は稲木薫（いなぎかおる）よろしくね」

完璧に女の子の名前だな。

よし決定！

この娘は男装趣味の女の子だ！

希望を捨てなくて良かった！

「あと、僕よく間違われるんだけど『男』だから」

「うっそぉおおおおおおおん！」

希望が絶望に変わった瞬間だった。

輝彦の絶叫はクラス中に響いた。一気に注目の的になった。

輝彦はすぐさま、はっと気づくとこの状況を打開すべく次の言葉言い放つ。

「なーんてなー。ビックリしたかぁ、みんな。この俺富永輝彦をよろしくーねぇーい」

じゃあ俺はトイレ言ってくるわー、と付け加えて教室を出た。

教室を出た輝彦は考えていた。
稲木薫についてである。
男だった事実を受け入れられなくて思いっ切り叫んでしまった。

『あと、僕よく間違われるんだけど『男』だから』

多分稲木は女の子に見られる事が何度かあったのだろう。男だからわかる事だが、外見が女の子に見える事など嬉しいものではない。彼も同じ気持ちなのだろう。
なのに、俺は

「……さいっていだな」

普段から連太郎から言われている言葉を輝彦は改めて自分に言っ

た。
　するとその連太郎が前から歩いてきた。
「輝彦どうした？　難しそうな顔して？」
「お前こそどうした？　せっかく唯と同じクラスになれたのにわざわざ教室抜け出してきてよ」
「ちょっと教室に帰りたくなくてな」
「俺もだ」
「あっ、そうだ。輝彦さっきはありがとうな、はっくしゅん！？」
「？　どういたしまして？」
　何かお礼を言われるような事をした記憶はないが一応返答しておく輝彦。
「はっくしゅんはっくしゅん！？」
「さっきより酷くなってんなぁ。屋内でも花粉は関係ないのか？」
「そうなんだ。それがつ、はっくしゅん！？　らいんだ」
　連太郎はポケットティッシュを取り出しを鼻を咬みだす。２～３度くり返しようやく落ち着く。
「後、もう一個言うの忘れてた」

「？」

「食事に誘ってくれてありがとうな。俺、頑張るよ」

輝彦は反応が少し遅れた。

「あっ、ああ」

予想もしない『ありがとう』だった。確かに連太郎と唯の仲が少しでも進むように言った事だがお礼を言われるとは思ってもみなかった。

「やばい！　そろそろ入学式の時間だ。早く戻ろ」

携帯電話で時間を確認する連太郎。

「待てよレン」

輝彦はそんな連太郎を止める。

「なっ、何？」

「1人誘いたい奴がいるんだけどいいか？」

これに連太郎は

「輝彦の好きにすればいいよ」

と答えた。

「そうだな」

輝彦はニッと笑って返した。

「富永君いたぁ～」

「稲木」

教室に行く途中、稲木が走ってきた。

「早く行こう。みんな待ってるよ」

どうやら輝彦を探していたらしい。

輝彦は歩いている間に言おう言おうと思っていた事を口にしながら頭を下げた。

「ごめん」

「えっ、えっ、えええ～！　どうしたの突然！」

稲木は何がなんだかわからないようだ。

「最初をお前を俺は女だと思ってた。それはお前にとって嫌な事の筈なのに……俺、あんな大声で叫んじまった。本当にごめん！」

「顔を上げて」

顔を上げる輝彦。

「別に気にしてないよ」

「じゃあ許してくれんのか？」

恐る恐る聞くと、稲木ニッコリ笑顔で言った。

「うん！」

良かった。

許してもらえた。

「……でもその代わりって言うのも変だけど」

一気に気が抜けそうな瞬間に稲木の口から要求が飛び出た。

「友達になってくれないかな？」

それはとても簡単であっさりとした要求だった。

稲木は握手を求めるように手を差し出す。

「ああ」

同じく輝彦は手を差し出し、稲木の手と重ね握手をする。

「で、稲木。突然だが今日放課後、暇か？」

「えっ、うん」

「俺の友達もいるんだけどよう。どっか食べに行こうぜ」

「ほっ、本当に。行くっ、絶対行くよ～」

第４話『にゅうがくしき』（後書き）

やっぱり書いてて輝彦が一番好きという
そして新キャラクターの『稲木薫』も書いててすごく好きになりつつあって、連太郎がどうでもよくなってきた

他のけいおん部員とまったく接触できない。
早く澪や律と紬を絡ませたい

第5話『だんしによる』

入学式から早くも二週間。
新しい生活にも慣れたころのあるお昼休みの教室。

「部活を最初(いち)から作る～～」

「おおよ」

連太郎は驚いて思わず箸を机の上に落としてしまう。

「またまたそれは突然だな」

言いながら箸を拾い手に持ち直す。
一体何を考えているのか？
輝彦とは中学からのつき合いだが連太郎は彼が何を考えているのかまったくわからなかった。

「物事はいつも突然から始まるんだぜ」

お前はいつも突然過ぎるんだよ。
だから周りが置いてきぼりになるんだ。
中学の時誰がお前の後始末をしたと思ってるんだ。

「一体何の部活を作るつもりなんだ？」

「それはな……」

「ごめーん2人共、待ったー」

輝彦の声を遮って現れたのは丸い目と後ろに束ねた長髪が特徴的な男子の稲木薫だった。

稲木くんとは入学式の後、輝彦の紹介で知り合った。初めて見た時はすごい美人さんを連れて来たと思ったものだ。

だが、その後に衝撃の事実を聞かされた。

彼は『男』だったのだ。

驚いた。

平沢さんも、真鍋さんも驚いていた。

それはそうだ。

顔の見た目だけ見れば完璧に女の子。顔だけなら良かったのだが話し方なんかも『女』にしか見えなかったし、何よりも……

「？　どうしたの藤澤くん？」

歩き方が内股なんですよね。

男子で内股って……正直どうよ。

「なんでもないよ」

それからは稲木くんとは仲良くなりお昼休みには時々3人で集まっているのだ。

「随分遅かったなぁ」

モグモグと口に食べ物を入れたまま輝彦は言った。

「先生に頼まれたプリントを持って行くときに同じように頼まれてた平沢さんとぶつかっちゃって」

つまりはぶつかった時にプリントが床に散らばって、それを回収するのに手間取ったという事か。

なんとなく想像出来てしまうのが恐い。

「何の話してたの？」

「新しい部活を作るって話だ」

輝彦が答えた。

稲木くんは近くの空席の机をくっつけながら、

「へぇ～。新しい部活を作るんだぁ。何の部活を作るの？」

訪ねると反射的に輝彦は、

「知らん！」

と言った。

「えっ……」

質問した稲木くんは呆然とした。

「『知らん』てお前何も考えてないのか？」

これに連太郎が聞く。

「だから2人を呼んだだろ」

「……お前の言ってた『大事な話』って、それか？」

「ああ」

こっ、この野郎！

連太郎はキレかけた。

実は連太郎には約束があった。平沢さんと真鍋さんとでお昼を食べようと言う約束だ。だが突然、輝彦に『ちょっと大事な話がしてぇから昼休み空けておいてくれ』と言われたのだ。『大事な話がしてぇ』。そんな風に言われたら断るわけにはいかない。だから平沢さんと真鍋さんの約束を投げ出してまで来たのに。

「そんな事で俺を呼んだのか！　てめぇは！？」

「い、いきなりなんだ？　……って危ねぇ！？　箸で目潰しは反則だろ！！」

「くっそー。上手く避けやがって。大人しくヤられろ！！」

「無茶言ってんじゃねぇ！」

どうにかして輝彦の動きを封じなければ。

だが、どうやって……。

その時2人の攻防を見向きもせず、稲木くんは弁当を開けていた。

チラッと連太郎はその中身を見る。

するとこの状況を打開するある食材を見つける。

「稲木くんその海老フライ貸して！？」

「えっ！？　ちょ、ちょっと～！」

稲木くんが何か言っていたが気にせず海老フライを取り上げ、輝彦の前に見せてやる。

「なっ、それはっ！？」

「そうだ！　お前が最も嫌う食材……海老フライだ！」

「やっ、止めろ！　こっ、こっちにそのキモいもんを見せるな！？」

「き、キモいってそれ僕の海老フライ……」

誰が止めてやるものか！　コイツのせいで平沢さんとのお食事が駄目になったんだ。その分のお礼くらいしないと割りに合わない。

だから、

「喰らいやがれぇー！」

「ぎゃあああああああ！！」

「僕の海老フライーーーー！」

３人のお昼休みはとにかく騒がしかった。

「この学校はとにかく女子が多い。部活なんかは女子だらけだ。共学になりはしたが男子は２０人とかなり少ない。そこんとこは女子校である名残のせいだろうな。そしてそんな中俺たち男子が生き残る方法は一つしかない！！　それが……新たな部活、男子による男子のための男子だけの部活を発足する事にあるのだ！」

「長い演説をどうもありがとう」

連太郎は素っ気なく答えた。

「おいおい。お前が『何で部活を作るんだ？』って聞くからわざわざ説明したってのに。そのどうでもよさそうな顔は何だ？」

輝彦は不満な顔しているが、連太郎からしたら正直どう言っていいかわからないし、正直どうでもいいのだ。放課後にまでそんな勝手な事言われてもな。

「俺帰るわ？」

「ちょっ、待てよ。まだ話は終わってねぇぞ」

帰ろうとする連太郎を引き止める輝彦。

まだ何かあるのか？

「で、だ。午後の授業ずっ～と考えた結果ある部活がとっても俺たちに合ってると思うんだよな」

『で』じゃねぇよ！　得意気な顔して何言ってんだこのアホ！
午後の授業の間そんなくだらない事考えてたのかよ！！！
しかも、

「俺たちって俺もその部活のメンバーに入ってるのか？」

「あたぼうよ！」

勝手すぎる。
女好き
不幸好き
自分勝手
その全てを体現しているのが輝彦である。
連太郎はそれがわかってるからこそあまり関わりたくないのだ。

「大丈夫大丈夫。稲木の奴も入れる予定だから」

何を安心すれば良いんだ？
稲木くんはご愁傷様だね。

「じゃあな」

「だからちょっと待てって！」

しつこい。

「だったら何の部活を作るのかぐらいは聞いてやるよ」

すると輝彦はニッと笑い、声高々と宣言した。

「軽音部だ！」

それが後にある意味で大変な事になるという事はこの時連太郎は知る由もなく、発言者である輝彦もまったく思いもしなかったのである。

第5話『だんしによる』（後書き）

この後どうしようかまったく考えていなかったり。

澪や律、紬も全然出てこないし……文章力の無さがハンパない長い目で見てもらえるとうれしいです。

第6話『けっせい？』（前書き）

連日投稿です

第6話『けっせい？』

輝彦は早速行動を起こした。
彼の心情は『有言実行』。
そして今まさに実行に移している最中であった。

「先生。この学校には軽音部は無いって本当ですか？」

「そうだ。去年で入部していた三年生が全員卒業したから実質廃部扱いになってるだけだがな」

輝彦は担任の早野勤（はやのつとむ）にそれを聞くとすぐにポケットに入れてあった入部届けに記入すると、バンと勢いよく机の前に置いく。

「先生、俺軽音部に入部します！　ついでに部長やります！」

「あ、ああ……わかった」

輝彦は軽音部に入部した。

同じ頃、浮わついた気持ちを足に乗せながら田井中律（たいなかりつ）は廊下を走っていた。『廊下は走ってはいけません』と書かれたポスターがあったがそんなのは気にしなかった。
走っていると身長が高い長髪である親友の後ろ姿を発見する。

「澪〜〜〜っ！！」

呼びかけると親友はふわりと体を回転させて振り向く。
親友の名は秋山澪（あきやまみお）。きりりとした目と女の律から見ても可愛い顔が特徴的な女の子だ。
そんな親友に朝から楽しみにしていた事を律は言った。

「クラブ見学に行こうぜ」

「クラブ見学？」

澪はいきなりだからきょとんとした表情を見せる。
律は言った。

「軽音部だよ軽音部！　今日からどこの部活も見学出来るようになったんだし早く行かないと！」

律は高校生になったら部活に入るなら絶対に軽音部と決めていた。
そこで今日からクラブ見学が出来るようになったので親友の澪を誘って一緒に見ようと考えていたのだ。

「でも私文芸部に入るつもりだし……」

「えっ？」

これに律はビックリ。

そっ、そんな話は聞いてないぞ！

「入部希望の紙も書いたし」

驚いている律に追い打ちをかけるように澪はすかさず入部届けのプリントに『文芸部』とサインした物を見せた。

「う～ん」

つまらない。

そう思った律は澪からプリントを取ると何の迷いもせず、

「びりっ」

破いた。

「あーーっ！？　何すんだよ律ーーっ！！」

澪は叫んだが遅かった。

もう紙は真っ二つに破かれて提出できない。澪はしゅんとした顔になった。

ちょっと悪かったかな……。

まぁいいや。

「ほら行くぞ。早く早く」

律は澪の手を掴んで走り出す。

「ちょっとー」

澪は困惑気味ながらも掴まれながら走った。

「……へ？　廃部した？」

律は絶句した。

彼女は今親友の澪と共に職員室にいた。

軽音部に入部しようと音楽室に行ったのだが誰もいなかったので先生に聞きに来たのだ。

ちなみに走ってきたため少し疲れている。しかも澪はまだぜーぜーと息を整えている最中だ。

「正確には廃部寸前ね。昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって。今月中に４人入部しないと廃部になっちゃうの」

綺麗な音楽の先生が言った。名前は確か山中さわ子先生だ。

「だから誰もいなかったんだ～音楽室」

せっかく先輩たちの上手い演奏を期待してたのに……がっかりだ。

「じゃあ私は生徒に呼ばれているから行くわね」

山中先生は机の書類らしき物を手に取り立ち上がる。

「頑張ってね軽音部」

と言って職員室を出て行った。

頑張る……か。頑張らないと駄目なのか……。

これからの事を嘆いていると澪が脳天気に、

「綺麗な先生だったな」

「そういう問題じゃねぇ」

誰もいないって事は私達だけで部活をやっていかなくちゃならないわけだ。

部活の管理とか面倒くさそう～。

だが、その時ぴきーんと律はある事に気づいた。

「まぁ、廃部なら仕方ないな。私は文芸部に……」

と、律は逃げようとしている澪の肩を掴み気づいた事を得意に言いあげる。

「誰もいないって事は今入部すれば私が部長……ふふ……悪くないわね」

「まだ諦めないのかよ」

澪は肩をすくめて呆れていた。

第2音楽室

富永輝彦はそこで稲木薫といた。理由は当然軽音部の部員勧誘の為である。

『有言実行』を志す彼だがこればっかりは仕方のない事だった。

「来ないね～」

薫はしきりに何度も言った。

確かに誰も来なさすぎる。

と、言ってもこの第2音楽室は校舎の一階の外れに位置しているため立ち寄るものなのだど殆どいないのだ。オマケに音楽の授業でもあまり扱われないらしく、知っている生徒も少数しかいないとか。

「くっそ～早野の野郎。ここで本当に合ってんのか？　1人も来やしねぇじゃんかよ」

なんだかすごく時間を無駄にしている気がする。

「帰ろう。たぶんもう来ないよ」

ねっ、と付け加え薫は言う。

「そうだな。帰るか？」

「うん！？」

置いてあったバッグを持ち、帰ろうとした時、ギィーと音を立てて第２音楽室のドアが開いた。

「ここって軽音部ですか？」

ひょこっと男が顔をだした。

見覚えがある。

１年１組の曽我部舜（そかべしゅん）だ。確か姉が生徒会長をやっているとかいないとか

「入部希望者か？」

だが安心は出来ない。

見に来ただけの冷やかし野郎ともわからない。

曽我部は頭を掻きながら言った。

「ああ」

本気で。

「やったぁあああああ！！」

「良かったねっ！　テル」

自分でもまさか来るとは思わなかった。何日もかかるもんだと思っていたのにこんなにもスムーズにいくとは。
でも、

「よくこんな辺鄙な所がわかったな？」

「早野先生に聞いてきた」

ナイスだ！　ハヤセン！！

「これでメンバーは揃ったな！」

「あれっ？　でも藤澤くんには断られたんじゃないの？」

薫は言った。

「あいつは大丈夫だよ。口で何を言おうが結局は入部する事になる」

「どっからくるのその自信？」

「大丈夫大丈夫」

言い切る輝彦。

「そぉーと決まればどっかで今後の方針について話し合おうぜ。曽我部も来るよなっ？」

「俺は帰る」

「……えっ？」

目が点になった。

今なんて言いやかったコイツ。

「お前達と学校意外で一緒にいる理由がない」

と言いささーと曽我部は出て行った。

「なっ、なっ、なっ、」

言葉を失う輝彦。

その様子に見かねた薫。

「随分個性的だねっ……」

「なんじゃあああああああああああ！　あのやろおおおおおおお！！」

そんな言葉が届かないほど輝彦の怒りのボルテージは上がった。

怒りのボルテージをそのままに保ちながら、ファーストフード店

のドアを勢いよく開ける輝彦。　店員が微妙にビビっていたが今の輝彦はまったく気づかない。

「このマックスバーガーセットってのを一つ！　ドリンクはコーラでっ！　薫は何が良い？」

「ひぃいい！？」

「どうした？　早く言えよ」

ついで薫もビビっているのだが輝彦はまったく気づかない。

「ドリンクのSを一つ。お茶で……」

「ドリンクS！　中身はお茶！」

勢いよく言いお金を渡すと店員は裏返えった声で返事をし、すぐに頼んだものが揃う。それをガバッと持つと空いていた席に置く。

むかつくあの野郎！
そんな真剣に話し合うつもりは当然無かったさ！　ただ少しでも仲を深めようとしただけだろ！

「テルー！　お金忘れてるよぅー！」

薫がお金を手に遅れて向かいの椅子に座る。

「悪い」

「ひっ！？」

お金をもらおうと手を伸ばすと薫が悲鳴にも似た声を発した。
見ると薫は怯えていた。

「どうした？」

聞くと怯えながらも薫は言った。

「テルさぁ。そんな怒ってないで少しは落ち着こうよ。人間怒ってると周りが見えなくなるって言うし……」

輝彦は少し罰が悪そうに顔をゆがめて

「……悪い」

謝った。

「曽我部くんの事はまた今度誘って見ようよ」

「そうだな」

俺は何を怒っていたんだか。まったくこうも直情すぎると周りに迷惑をかけてしまうな。反省しなければ。
だがその前に、

「腹ごしらえだ！」

「それ全部食べられるの？」

「ポテトならやるぜ」

「本当に！」

一方の連太郎はというと、

「和ちゃ～ん私どうしよう～？」

「知らないわよ」

平沢唯と真鍋和と一緒に帰っていた。

平沢さんは可愛いなぁ～。

連太郎は2人と同じクラスになってから一緒にいる事が多くなった。中学の頃は三年間別のクラスで、輝彦がついこの間まで幼なじみという事を隠されていたので、話は何回かしたがそれ意外はまったく接点がなかったのだ。

「れんくんは何の部活に入ったの？」

それが今では毎日顔を見れるどころか声をかけてもらえるまでになったなんて今でも信じられない劇的な変化だ。

「れんくん聞いてる？」

「うっ、うん。えっと……何かな？」

しまった！　平沢さんに見とれていて話しかけられているのに気づかなかった！　俺のバカっ～～！！

「れんくんは何の部活に入ったの？」

「俺は何も入ってないよ。強いていうなら帰宅部って感じかな」

「それって何をする部活なの？」

「……えっ？」

『何をする部活なの？』と言われるとは思わなかった。

確かに何するんだろうな、帰宅部。

「そんな部活はないわよ、唯。ようは部活に入ってないって事よ」

真鍋さんが代わりに答えた。

「そうかっ！　れんくんはニートなんだねっ！！」

平沢さんの言葉に連太郎の胸は貫かれた。

にっ、ニート！

平沢さんそれはどういう意味ですかっ！！　俺をそんなどうしようもない連中と一緒にしないで！？　頼むから！！　え、夢。これ

は夢なのか？　夢って言って誰か俺を殴ってくれー！

「平沢さん、真鍋さん。俺ちょっと用事思い出しちゃった……」

早くこの場を離れたかった。

「うんわかった。じゃあねっ～れんくん！？」

「さようなら。藤澤くん」

もう2人の声は連太郎には全く聞こえなかった。

次の日

連太郎は緩行一番に輝彦の元へ向かった。

「輝彦！　俺も軽音部に入部するぞ！！」

その瞬間桜が丘高校軽音部の男子たちが揃ったのであった。

第6話『けっせい？』（後書き）

やっとやっと澪と律がぁあああ！

でも本編に絡んでいるようないないような微妙な感じに……。

次では紬も出せたら出します。

ていうか何気にオリジナルキャラクターが5人に！？

一応主人公で唯が死ぬほど大好きな常識人　藤澤連太郎

唯と和の幼なじみにして色々やっちゃう悪ガキ　富永輝彦

男なのにどう見ても女にしか見えない容姿を持つ　稲木薫

生徒会長の弟で人と関わるのを最低限しかしない　曽我部舜

1年2組の担任でこれからも本編に絡ませようか検討中の　早野勤先生

どうなるのか自分にもまったくわかりません

長い目でよろしくお願いします。

アニメの1話くらいまではなんとか終わらせたい。

行話1『ずれはじめるころ』

早野勤

彼は桜が丘高校の化学の先生で1年2組の担任を務めている人物だ。どんな人にも分け隔てなく接する姿勢を常に持ち、贔屓目などもなく真面目な性格の持ち主だ。そんな彼だが約一年前から悩んでいる事がある。

「はぁー」

ため息が口からこぼれる。

だが相談など誰にも出来はしない。それほどに訳が分からない事なのだ。

「早野先生」

「はっ、はい～～！？」

勤は思わず立ち上がってしまう。

話しかけてきたのは同じ桜が丘高校の音楽教師山中さわ子(やまなかさわこ)だ。

「今度会議で使うプリントです」

「あっ、ありがとうございます」

受け取った瞬間、勤の心臓はまるで荒れた波の如く揺れた。
しっ、心拍数が半端なく上がっているっ！？

「では、これで」

と言うと山中先生は髪を靡かせながら他の先生にもプリントを配りにいく。

「はぁ～」

これが早野勤の悩みである。
山中先生を見ると心臓が脈打ちまともに話させないどころかプリントの手渡しだけで、

「……限界」

なのだ。
何故だ？
何故、山中先生を見ただけで僕の心臓はこんなに苦しいんだ？
それは一般で言う『恋』というものなのだが今まで縁がなかったのか勤はまったくわかっていなかった。

「早野先生ちょっといいですかー？」

声をかけてきたのは勤が担任をしているクラスの生徒、富永輝彦（とみながてるひこ）であった。

「何だ？　富永」

勤はちょっとびっくりした。
実は富永は勤が個人的にチェックをしている生徒の1人である。
チェックと言っても悪い意味ではない。富永はユーモアがあり、ある意味クラスのムードメーカー的存在の男子だ。その富永が自分に聞きたい事があるとは、一体何のようだろう？

「先生。この学校には軽音部は無いって本当ですか？」

何だそんなことか。

「そうだ。去年で入部していた三年生が全員卒業したから実質廃部扱いになってるだけだがな」

何かと思えば軽音部の事を聞いてくるとはな。
ちょっと予想外だった。
富永はそれを聞くと怪しげな笑みを浮かべてポケットからプリントを取り出すとさらさら～っと書き、机の上に置いた。

「先生、俺軽音部に入部します！　ついでに部長やります！」

「あ、ああ……わかった」

「後、軽音部ってどこで活動してるんですか？」

富永は去り際に聞いた。

「それは……」

あれっ？　どこだっけ？

確か音楽室での活動だった筈だ。
しかしこの学校には音楽室が2つある。
そのどちらかではあった筈だが……。
だが記憶が曖昧ではっきりしない。

「うーん。第2音楽室だったかな……」

「わかりました。第2音楽室っすね。ありがとうございます！」

「あっ、待て！　富永！」

呼び止めたのだがそれを聞かず富永は職員室を出て行った。
第2音楽室でよかったっけな～？
ちょっと心配になってきた勤。

「早野先生！」

そこにまた自分の名前を呼びながら1年2組の生徒が現れた。
名前は稲木薫（いなぎかおる）。女の子のような顔が印象的な男の子だ。

「何だ？　稲木」

「入部届けって先生に出せばいいんですよね？」

「ああ。担任に出すようになってるぞ」

「じゃあこれお願いしますっ！」

ビッと紙を両手に持って恥ずかしそうに目を逸らしながら渡されたプリントをもらう。

内容を確認する。

「……軽音部。稲木も軽音部入るのか？」

「『も』って僕以外に誰か来たんですか？」

気になったのか稲木は興味を示し聞いてきた。

「さっき富永が同じように渡しに来たんだ。いつものように元気に『部長やります』って言ってたぞ」

「ははっ。僕はテル……じゃなかった。富永くんに誘われて軽音部に入ろうと思ったんです」

「なるほどな。まっ、仲良くやれよ」

「はいっ」

ありがとうございました、と礼をして稲木は職員室を出て行った。

次から次へと飽きさせない生徒達だ。

「早野先生良いですか？」

またもや誰かが読んでいるな。

と、振り返ると次は生徒ではなく先生の河辺真理子（かわべまりこ）だった。

「今、軽音部の話されてましたよね？」

「はい」

「すいませんが軽音部に入ろうって子が1人いるんですけど、私軽音部の事はあまり知らなくて……代わりに説明をお願いしてもいいですか？」

「いいですよ」

断る理由も今は特に無いので二つ返事で引き受ける。

河辺先生の受け持つ1年1組の生徒を紹介される。

「よろしくお願いします」

「説明って何が聞きたいのかな？」

その子幾度となく見かけた事があった生徒だが話をするのは初めてなので優しく対応した。

「現在の部員の数と軽音部の行われている場所、それからバンドの外でのライブ活動の辺りを……」

「ストップ！」

「どうしたんですか？」

「ごめん。僕は軽音部の説明と言ってもそんな具体的な事は残念だけど分からないよ」

「……」

生徒は目を細め、一瞬睨みをきかせた。

「でも部員の数と活動場所くらいなら知ってるぞ」

「……」

顔がどんどん強面になっている。

「部員の数は2人。活動場所は第2音楽室だ」

「わかりました。ありがとうございます。これは先生に渡しておきます」

そう言うと入部届けを渡してその生徒は早歩きで職員室を出て行く。

「ふぅーー」

どっと疲れた。

怒らせちゃったかな？

勤は渡された入部届けのプリントを見る。

なんと言う名前だろう？

「曽我部舜（そかべしゅん）……」

勤はこの曽我部という苗字に見覚えがあった。

確か生徒会長をやっているのも曽我部という苗字だった。

生徒会長の弟だったとは。

驚きだ。

全然似てないから気づかなかった。

「これで3人か……」

軽音部もしかすると廃部にならずに澄むかもな。
実質後1人で部と認められるのだから大丈夫だろう。
3人の生徒のプリントをまとめようとした時、

「すいません早野先生。もう一枚プリントを渡すの忘れてました」

「はっ、はいぃいいいいいい！」

山中先生が声をかけてきて心臓が飛び出るかと思った。
思わず立ち上がってしまった。

「どうしたんですか？」

「いえ、なんでもありません。山中先生」

平然な顔を装いプリントをもらう。

「？　ならいいんですけど？　あんまり頑張りすぎないほうがいいですよ。倒れちゃったりしたら元も子もありませんから」

では、とその場を離れる山中先生。
なんでこの人を見るだけでこんなにも心臓が痛むんだ？
席に座り直す勤。
今度病院に行って看てもらおうかな？
本気で考える。

「うん？　プリントはどこへいった？」

気づくと机に置いてあった入部届け三枚が消えていた。

行話1『ずれはじめるころ』（後書き）

結局さわちゃんしか出せませんでした。（泣）

しかもさらに余計なオリジナルキャラクターの掘り下げまでやってしまって……。

今は少し後悔してます。

でもへこたれてはいられないので毎日投稿していくよう頑張ります！

第7話『あれー』

軽音部

その実態をあまりよく知らない連太郎はパソコンのインターネットで調べた。

楽器はギター、ベース、ドラム、キーボードというのがありそれぞれ独自の音色を奏でて上手く合わさると、とても良いらしい。後、部内ではバンドというまた違ったグループを作る必要があるらしく作る際は気の合う友達を誘ったほうがよい……らしい。そうでないと後々解散などという悲劇に発展する。

これが平沢唯にニートと言われた夜に連太郎が調べあげた必要最低限の事だった。

「って言うのを昨日調べたんだ」

「へぇ～。俺が言うのもなんだけどやる気だな」

「当然だろ！」

絶対に絶対にニートなんかになってたまるか！

「とにかく良かったじゃない？　すんなり部員が揃って」

放課後、連太郎は輝彦と稲木くんと第2音楽室にいた。

「そうだな。桜が丘高校軽音部の始動って奴だな」

「その事で一つだけ聞いていい？」

「な～に？」

稲木くんが反応する。

「もう1人曽我部くんってのがいるって聞いたんだが？」

連太郎はもう1人の部員がいないので聞いてみると、

「あんな奴は知らねぇよ。さっき教室に行ったらいねぇし……あれからトンと来てない。ふざけんなよ！」

珍しく怒ってるな、輝彦。

そんな曽我部くんって一体……どんな人なんだ？

ちょっと気になりつつもこれ以上聞くと輝彦からは愚痴しか出なさそうだ。

「とりあえずさ。今後の軽音部については新しい部員を増やさないか？」

「新しい部員？」

「昨日『調べた』って言っただろ。その時に部員は4人だけじゃ少ないと思ったんだよ」

昨日調べた結果、バンドには基本的なものから変則的なものまで色々あるらしい。そう考えると人数が多いほうが今後やりやすい、と連太郎は考えたのだ。

そこで、

「勧誘というか、ポスターを作らないか？」

連太郎は用意しておいた紙を机に置いた。

それに輝彦は、

「めんどい」

「お前部長だろうが！！」

普通こういう事は輝彦の口から出なければならないのだが、どうやらやる気がないらしい。

「まあまあ。藤澤くん落ち着いて。テルも部員が多いほうが何かとやりやすいんじゃない？」

稲木くん……君って奴はいい子だなぁ。このバカにその爪を煎じて飲ませたいくらいだ。

「……それもそうか。よしっ、ポスターを作るぞ！」

多少渋っていたが輝彦もポスター作りに賛成し、３人で作業に入った。

次の日の朝
それぞれ3人が一枚ずつ描いたポスターを片手に連太郎は学校の掲示板を回ることにした。もちろん目的はポスターを貼る為である。
最初に訪れたのは二階の掲示板だ。
ここは一年生の目につきやすい所なのでちょうど良いのだ。
先生から渡された画鋲でポスターを1枚掲示板に貼る。
うん。まぁこんなものか。
端っこに貼ったので見栄えは少し悪いが見えない位置ではないので大丈夫か。

「しかし結構色んな部活があったんだな～」

改めて見るとバスケ部、テニス部、柔道部等のポスターが貼ってあった。

「……オカルト研究部？」

すごい部活だな。一体何をするんだ？
聞いたことのない部活もあり、ちょっと楽しんで見ていると、連太郎の目にある部活が止まる。

「軽音部？」

のポスターだ。

だがそれは昨日作ったポスターではなかった。少なくとも連太郎には見覚えがない。
誰が作ったんだ？
輝彦は作らないだろうし、昨日来なかった……曽我部くん？　いや話を聞いた分だとそういう事はしなさそうだしなぁ。だったら候補として挙がるのは稲木くんしかいないか。
連太郎はポスターをじっと見る。
まるで女の人が書いたような字だな。
やっぱり稲木くんかな。
結論づける連太郎。
稲木くん……君って奴は本当に、

「いい子だな」

ポスターを貼って一週間が過ぎた。
だが残念ながらその効果は連太郎が思っているよりも薄く部員が増えるような事はなかった。
もうこれ以上は誰も入らないか？
と、ちょっと諦めかけたが、本日の昼休み事態は変わる。
机を囲んでいつものように食事をしていると平沢唯が言った。

「とりあえず軽音部ってところに入ってみました」

びっくりして一瞬箸が止まった。

「えっ、平沢さん軽音部に入ったの？」

「うん。そうだよ」

口に食べ物を詰め込みながら平沢さんは頷いた。

平沢さんと同じ部活って事は朝から放課後まで常に一緒ってことだよね？　つまりは近づくチャンスも自然に増えるし、距離も縮められる。

考えただけで顔が緩んでしまう。

「そうなんだ。実は僕も軽音部に入ったんだ」

「へぇー。れんくんも入ったんだ。良かった知ってる人がいてー」

俺も良かったです！！

軽音部バンザーイ！

「軽音部って何する部活なの？」

ずっと黙っていた真鍋さんが聞いてきた。

それに平沢さんは、

「さぁ」

ずっこけるかと思った。

何も分からずに入部を決めているとは流石に思わなかった。

「バンドとか組んでギターとか弾くんだよ」
代わりに連太郎は大まかに説明する。
「えっ、口笛を吹いたりするんじゃないの？」
「何そのやる気のない部活……」
平沢さんの天然ボケに真鍋さんがツッコミを入れる。
俺はこの天然ボケにどう対処していいかわからなかったが真鍋さんはさすがだ。
「私ギターなんて出来ないよ？」
ギターをしている平沢さんかぁ……。
「うーん」
残念ながら連太郎には想像出来なかった。
「じゃあ何なら弾けるの？」
真鍋さんは聞いた。
すると平沢さんは「うーん」と考え微妙に言いにくそうに、
「か、カスタネット」
カスタネットをしている平沢さんか。
連太郎は想像した。
うんたん、うんたん、うんたん、とカスタネットを笑顔で叩く平沢さん。

無茶苦茶かわぇえええええ！！

すると真鍋さん。

「……すごく似合うわ」

激しく同意させていただきます！

放課後になっても連太郎は笑顔でいる事を止められなかった。それは平沢唯がこの第2音楽室に来るからだ。

ギィーとドアが開く音が響く。

きっ、来たー！

「おっ、レン早えじゃねぇか？」

「……何だお前か」

「酷くねぇか、おい！」

部室のドアを開けて入ってきたのは輝彦だった。そして後ろから稲木くんも並んで入ってくる。

いつもの所定の机に2人は腰掛ける。

「2人に朗報があるんだ」

連太郎は切り出した。

「朗報？」

輝彦は少し眉を歪める。

「なんと平沢さんが部員の1人に加わるんだ」

聞くと輝彦と稲木くんはそれぞれ次の反応をした。

「平沢さんが部員になるんだ！」

「マジか？」

稲木くんはとても嬉しそうだ。

それに比べ、

「輝彦は嬉しくないのか？」

輝彦は微妙な顔をした。

「嬉しいっていうかなんというか……」

濁したような言い方をする輝彦。

何か嫌な理由でもあるんだろうか？

「なぁ」

「……俺が最初に言った事覚えてないのか？」

最初？

「あぁ、そういえば『男子による男子のための男子だけの部活』を作るんだったっけか？」

「そうだ！」

輝彦は大声を挙げた。

ここで疑問が一つ。

「そもそも何故そんな部活を作ろうと思ったんだ？」

『生き残るため』とか言っていたがそれはきっとその場の輝彦の思いつきだろう。輝彦はどちらかというと自分の私欲を優先する奴なのだから。

「僕も聞きたいな」

稲木くんも気になったのか乗っかってくる。

すると輝彦は観念したかのように言った。

「文化祭とかで女の子にキャッキャッと黄色い声援浴びてえじゃねぇか！？」

「「え？」」

連太郎は稲木くんと共に言葉を失った。

気にせず輝彦は続けた。

「それにバンドやってるだけでモテるし、彼女だって出来るかもしれないだろ」

忘れていた。

輝彦はとんでもない女好きだった。

モテたいがために一時期自暴自棄にさらされていた事があったっけ。

とにかく、

「理由がくだらなさすぎるだろ！」

「くだらなくなんかねぇ！　だいたいこの学校にはそういった理由で入ったんだからな！！」

「そうだったなっ！」

だからイヤなんだ。

輝彦と関わるのは。

平沢唯は天然である。

その天然は、周りに多大な迷惑をかけた事すらあるほどに酷い。

そんな平沢唯はこの度軽音部に入部した。彼女を知るものなら『なんて無謀な挑戦！？』とつい口をこぼしてしまうだろう。彼女がギターを片手に演奏している姿など誰が想像できようか。平沢唯自身さえ想像できない。

どうしよう？

唯は悩んでいた。

本人の考えでは軽音部は、

「カスタネットとかタンバリンをするのかと……」

連太郎に聞かされるまで本気で思っていた。こんな事を本気で思えるのは彼女が『本物』である証だ。

改めて唯は考えた。

自分には軽音部は向いていない、と。
れんくんには悪いけど……。
その胸を伝えるため軽音部の部室、第1音楽室の前に立っていた。
でもいざ入ろうとすると唯の足はすくんだ。

『あぁん。止めたいだと？　貴様ただで止められると思っているのか？　殺害するぞー』

こんな事言われたらどうしよう？
恐い！　恐いよ～

泣きそうになった。
すると突然、肩を掴まれた。

「いーーーっ！？」

唯は思わず叫んだ。

「あ、あわわわあののの違います違います違う違う違うあわわーーっ！？」

周りが見えないくらいテンパり意味不明になる唯。

「何やってるの？」

誰かの声を聞き唯は正気を取り戻す。

「びっくりしたー」

声を発していたのは自分と同じくらいのカチューシャをつけた女

の子だった。

「もしかしてあなたが平沢唯さん？」

カチューシャをつけた女の子は聞いてきた。

「はっ、はい」

その勢いにちょっとびっくりする。

「入部希望の？」

「はっ、はい」

聞くとカチューシャの女の子は見るからにすごく嬉しそうな笑顔をつくった。

カチューシャの女の子はハキハキと言いながら唯の手を掴んだ。

「色々誤解してごめん！　ギターがすんごく上手いんだよね！？来てくれるの待ってたよー！」

なんかあらぬオヒレがついてるよ……

カチューシャの女の子は嬉しそうな顔で音楽室のドアを開くと「みんなー、入部希望者が来たぞー」言いながら唯を連れ込んだ。

第1音楽室に入るとすぐに机が4つほど置かれているのを発見し、2人ほど部員らしき女の子が座っていた。

「本当か？」

「まぁ」

2人は以下のような反応を示し、立ち上がると

「ようこそ。軽音部へ」

「歓迎いたしますわ～」

笑顔で言われた。

「よしっムギ。お茶の準備だ！！」

「はい」

ど……どうしよう辞めるって言いづらい……。

第2音楽室で連太郎は端から端まで行ったり来たりしていた。

「遅いな～平沢さん」

あれから1時間経ったが平沢さんは未だに顔を出さない。

「そもそも本当にくるのか？」

輝彦は連太郎に聞く。

「その筈だけど……」

平沢さんは天然な所はあるけど決して約束などを破る人ではない。だけどさすがに遅い。

「平沢さんの事だから迷ってたりしてね」

「それだ！」

稲木くんの言った事は的を得ている。確かに平沢さんの事だからこんな辺鄙な場所がわからないのかもしれない。

「急にどうしたの？」

「いっ、いや何でも……」

「？」

稲木くんは不思議そうに小首を傾げている。連太郎が平沢唯の事を好きなのを知らないからだ。

「平沢さん早く来ないかな～」

ごまかそうとしたが声が思いっきり裏返った。

「？」

それから稲木くんはずっと不思議そうに連太郎を見ていた。

その頃、唯は

「ごめんなさい。軽い気持ちで入部するなんて書いたから、期待させるだけさせて……なんて謝ったらいいかぁ」

泣いていた。

どういう訳か軽音部の3人はほのかに期待していたらしくそれに耐えられなくなった唯の目から涙がこぼれたのだ。

「私たちこそごめんなさい」

「無理に引き止めて悪かったな」

天然パーマの女の子と黒髪の女の子が申し訳なさそうに謝る。

カチューシャの女の子も少しうつむいていたがやがて頭を上げると言った。

「じゃあさせめて私たちの演奏だけでも聞いてって」

「えっ、演奏してくれるの？」

演奏を聞かせてもらえるなんて思わなかった唯は突然の提案に目を輝かせる。

生での演奏って一度見て見たかったんだよね。
机を離れてカチューシャの女の子が「やるぞー」と言うと他の2人の女の子も準備をしてあっという間に目の前にテレビで見た事のある光景が出来上がる。
お互いの場所につくと3人は目を合わせて合図を送る。

「1・2・3・4」

カチューシャの女の子はリズムをとり、演奏が始まった。
音は第1音楽室を反響し独特の音色を唯の耳に運んだ。
何を演奏しているのかはすぐにわかった。有名な『翼をください』だ。

唯は息を呑んだ。

カチューシャの女の子も黒髪の女の子も天然パーマの女の子もさっきの時とは表情が違う。上手くはないけど真剣でそれなのにどこか楽しそうで……。
自然と手に力がこもる。

すごい！　なんだかよくわからないけどすごいよ！

演奏が終了した時には唯は立ち上がって拍手を送っていた。

「えへへっ……どうだった？」

照れくさそうに頭を掻きながらカチューシャの女の子は聞いてきた。

「なんていうか……すごく言葉にしにくいんだけど……」

息を吸って、

「あんまり上手くないですね！！」

唯は感想を伝える。

言った唯は気づいていないが軽音部員の3人は一斉に目が点になっている。

「でもすごく楽しそうでした。私この部に入部します！」

最後の唯の言葉を聞くと軽音部の3人は一瞬、惚けた顔になるがすぐに笑顔になった。カチューシャの女の子は「バンザーイ」と両手を挙げ歓喜した。

「それじゃあ軽音部開始記念に」

と言いカチューシャの女の子はカメラを取り出す。

唯は3人と共に並ぶ。

「いっくよーん」

カメラのシャッターを押し、パシャと音が鳴る。

あっ、そう言えばすっかり忘れてた。

「あのー今日ってれんくん来てないんですか？」

「「「誰？」」」

次の日、連太郎は怒っていた。
平沢唯に対してだ。
彼女は結局昨日の放課後、部室に現われる事はなかった。
『絶対行くね！？』
と、言っていたのに。
来なかったのだ。
その事実がとても腹が立って、とても寂しくて、とても悲しかった。
裏切り――
これは明確な裏切り行為だ。
その気持ちを胸に朝早く詰め寄った。

「平沢さん昨日なんで部室に来なかったの？」

連太郎は彼女の事が好きだ。
どんな事をしようとも彼女を好きでいられる自信がある。
だが今回ばかりは駄目だ。
人を裏切るという最悪な形をやったという事実があるのだ。
でも、せめて理由があれば聞きたい。

「昨日私軽音部の部室にちゃんと行ったよ」
平沢さんが嘘をつくなんて……。

信じられない。

「平沢さんなんでそんな嘘つくの？」

「えっ、私嘘なんかついてないよ。昨日ちゃんと部室にいったよ」

「いや昨日来なかったじゃない」

「ええー私は行ったよー」

平沢さんはいつものようなほんわかした喋り方だったが目は真剣だった。

「れんくんがいなかったんだよ」

うん？

「僕はちゃんと昨日部室にいたよ。輝彦も稲木くんもいたし……」

「？　昨日、軽音部の部室にいたのは田井中律ちゃんと秋山澪ちゃんと琴吹紬ちゃんだけだったよ」

ううん？

ここで初めて連太郎は話の食い違いに気づいた。

「えっと……その人たちって誰？」

「私とれんくんと同じ軽音部の部員だよ」

あれー、これって何か面倒くさい事になってはいないかい？

第7話『あれー』（後書き）

次でようやくりっちゃん、澪、ムギの3人と男子軽音部の連中がご対め～ん

第8話『あんなこと』

放課後
第1音楽室に8人の男女が机を人数分囲ってそれぞれ席に座っていた。

「どういう事だ?」

輝彦が最初に口を開いた。

「なんで俺たちがこんな所にいるんだよ!!」

バンと机をたたき輝彦は立ち上がる。
何故かすごく怒っている。

「『話がある』って乗り込んで来たのはテルたちだろー!」

輝彦の向かい側に座っていたカチューシャをつけた女の子が同じ様に立ち上がる。カチューシャをつけた女の子の名前は田井中律(たいなかりつ)。
元気が似合いそうな活発な性格をしているようだ。

「律、少し落ち着いたらどうだ？　富永も」

田井中さんと輝彦を宥めるように言っているのは黒髪ロングの綺麗な女の子。名前は秋山澪（あきやまみお）。大和撫子なんて言葉は信じていなかったが、秋山さんにはそれがぴったり似合う。ちょっとおどおどして顔が少し赤いように見えるが今は気にしている時じゃない。

「そうだよ。秋山さんの言う通り。少し落ち着こう」

稲木くんが同様に宥めるように言う。

「みなさーんお茶が入りましたよー」

空気を読まないようなほんわかした声でお茶を配っているのは琴（こと）吹紬（ふきつむぎ）。天然パーマの長い髪と太い眉が特徴的だ。その振る舞いは育ちの良さが伺える。

「ムギちゃん今日のお菓子なーに？」

「クッキーです」

「やったー」

平沢さんも頼むから空気読んで！？

様子を見守っていた連太郎だがこのままだと話が進まないと判断し、

「みんな俺の話を聞いてもらいたい」

話を切り出した。

場を静めた連太郎はまずみんなに1枚ずつ紙を配った。
眉をひそめ田井中さんは聞いてくる。

「これは？」

「この学校の部活をまとめた表だよ」

連太郎が配ったのは桜が丘高校の部活をまとめた表のようなものだった。そこにはスポーツ系の部活から始まり、文化系の部活まで様々な部活の名が記されている。

「この横に書いてある数字は部員数ですか？」

琴吹さんが言った。

「うん」

表の横にさらに数字が書かれている、これはその部活の部員の数を指し示している。
だが問題はそこじゃない。

「上から順に部活の名前を見ていってもらいたい」

連太郎が言うとみんな一斉に見始めた。

「あっ？」

「えっ？」

「これは……？」

「うん？」

秋山さん、琴吹さん、稲木くん、曽我部くんは気づいたようだ。
驚きを隠せないでいる。
俺も最初は驚いた。
こんな事があっていいのか？　と。

「？　えっ、なになに？　どういう事てーくん？」

「わからん」

「私もまったくわからない」

他3名はまったくわかっていないようだ。
平沢さんはまだしも輝彦や田井中さんは気づいてほしいのだが。

「特に変なところはないよねー……あっ」

すると平沢さんやっとわかったのか手をポンと叩いて、

「わかった。変な部活が多いんだ！！」

「なるほど確かにオカルト研究部とか変な部活がいっぱいあるな」

「そうだな。幽霊部ってのもあるし……よくわかったな、唯」

「てーくんに褒められちゃったー」

平沢さんごめん。

今回ばかりは全力でツッコまさせてもらうよ。
プラス他2名も同様にな。
連太郎は大きく息を吸って全力で吐き出した。

「違げぇえええええええええ！！」

凄まじい声が第1音楽室に響いた。
みんなはいきなりの事に呆気にとられ、じーっと連太郎を見た。
ヤバい。
さすがに大声を出しすぎた。
みんなが俺を見てる。
言いづらい……。

「さっきからよ」

ここで輝彦が口を開いた。
真剣な口調でいつもの憎たらしい笑みも消えている。

「『紙を見ろ』だの言ってるが俺にはまったくわからねえ。さっぱりだ。お手上げだ。だからお前の口からちゃんと説明しろよ。その為に俺たちを集めたんだろ？」

その通りだ。
輝彦の言う通り今のこの特殊の状況を説明するためにみんなを集めたんだ。

「わかった。じゃあはっきり言うよ」

呼吸を整え連太郎ははっきりと告げる。

「この学校に軽音部が2つ存在しているんだ！」

何故こんな事が起こったのかそれを語るのはとても簡単で、とても単純だった。

早野勤（はやのつとむ）

桜が丘高校の教師の1人であるこの男が原因だった。彼は真面目で生徒うけもよくこれといった欠点がない実に良い教師である。そんな勤がどうやって原因を作ったのかその背景を簡単に説明しよう。

早野勤はその日3人から入部届けを受け取った。だがそれをすぐに無くしてしまったのだ。

「どこいったんだ？」

確かに机の上に置いた筈なんだがな。

見あたらない……何故だ。

「後でまたさがすか」
結局その日は見つからず、次の日。
ヤバい。ヤバいぞー。
基本、入部届けは提出されると専用の部活名簿なるものにまとめなければならない。そうしなければ入部した事にはならないからだ。だが、その入部届けを無くしてしまうというミスを犯した勤。
非常にマズい。
面目、体裁、世間体。
そんな風に成り立っている大人の世界で生きているため勤は決して生徒に『もう一度書いてくれ』とは言いにくく、ある決意をする。

自分で書くしかない。

勤は証拠隠滅のため自分で書くことにしたのだ。
3枚の入部届けを書き終わるとそこにとある生徒が声をかけてきた。

「早野先生ですよね？　これ入部届けです」

その生徒は入部届けを渡しささーとすぐに職員室を出ていった。
確認する。
この子も軽音部か……名前は藤澤連太郎か。
実は今、書いていた3枚の入部届けも軽音部に入部する子たちのものだ。
これで部員数は4人……部活の規定人数だな。
廃部にならなかった事に安堵した勤はほっと胸をなで下ろした。
良かった。
正直な感想だ。
こういうところが勤の生徒うけの良い理由の1つだ。

勤は４枚の入部届けを部活名簿にまとめて入れた。
そしてやっておかないといけない作業がもう１つ。

「……パソコンは苦手なんだよな」

パソコンでさらに部活表というものに部活の名前と部員数を打ち込まなければならないのだ。
普段は他に担当で打ち込んでくれる先生がいるのだが今日に限っていないので勤が打ち込む。

「？　この表の一番下に軽音部って打てばいいのか？」

パソコンが苦手な勤はローマ字入力ではかな文字入力でなんとか部活名と部員数を打ち終える。

「ふぅー疲れたー」

「何がですか早野先生？」

「や、山中先生!?　いっ、いや何でもありませんよ。ははっ、ははははは」

「そうですか？　それよりもお茶を入れましたよ。みなさん集まっていますし、お菓子もあるのでこちらに来ませんか？」

「はっ、はい!?　では！」

勤は山中先生に誘われそのままパソコンの置いてある席を離れる。
だが勤は気づかなかった。
軽音部と打ち込んだ上のほうにもう１つ『軽音部』と書かれてい

るのを。

「と、いうのが事の真相だ。富永、稲木、曽我部、藤澤すまない！！」

突如として現れた早野先生は頭を下げて謝った。
どうやら第1音楽室の前で立ち聞きしていたらしい。

「なるほどな。通りで見た事のないポスターが張られてたり、」

「平沢さんが来なかったりしたのか」

納得する輝彦と稲木くん。
すると、

「あの第2音楽室が汚かったのは？」

曽我部くんが言った。
ほとんど声を聞いた事がなかったので連太郎は新鮮に思えた。
結構渋い声だな。

「あそこは元々桜高祭の時に軽音部の生徒が楽器を置く時に使われ

るだけで軽音部の部室ではないんだ」

「……だから汚かったのか」

もしかして曽我部くん潔癖症？

見ると曽我部くんは怒りが隠せないようだ。目がとても恐い。

「あのー」

言いながら、琴吹さんが手を挙げる。

「では、軽音部はどうなるんでしょうか？」

琴吹さんの言う通りこれから2つの軽音部がどうなるかが一番の問題だった。

2つ存在している軽音部はかなり異質な状態だ。

だが連太郎には考えがあった。

この事態を収めるために考えた秘策。

「2つの軽音部を一緒にしようよ！」

だからこそもう1つの軽音部のみんなにも一緒に話を聞いてもらったのだ。

これ以上良い方法など意外考えられない。

「いや藤澤それは無理だ」

「へっ？」

早野先生の一言に呆然とする連太郎。

何かの聞き違いか？
早野先生の口から『無理』という言葉が出たが、嘘だよね？

「信じられないと思うがさっきの話には続きがあってな。……軽音部、男女綺麗に分かれているよな？」

「はい」

「さっきの事を知らない教師がな。１つは女子軽音部としてもう１つは男子軽音部として学校に正式に登録してしまったんだよ」

なっ、なんだってーー！！

「そう気を落とすなって。元気だせ、なっ」

「そっ、そうだよ。部員が増えなかったのは残念だったけど今回は仕方ないよ」

輝彦も稲木くんも慰めの言葉なんか止めてくれ！？
優しい分だけ傷口にしみるっ！

せっかく平沢さんと同じ部活だったのに……せっかく平沢さんと接近する理由が出来たのに……早野のやろぅうううううううう！！

怒りが……怒りが抑えられない。

第1音楽室でのひと騒動が終わった後男子軽音部員は第2音楽室に来ていた。一応言うが曽我部くんは用があると言って帰った。

「でも驚いたな。いつの間にかそんな事になってたなんてよ。律が軽音部員なのも驚いたが」

「僕も秋山さんまで部員だなんて、本当に驚いたよ」

輝彦と稲木くんが言った。

2人は田井中さんと秋山さんと同じクラスらしい。連太郎が知らない所で親交があっても不思議じゃない。

「そんなに2人が軽音部にいる事が変なのか？」

「ああ。特に秋山だな。イメージ的に華道部とか茶道部に入ってるもんだとばかり思ってたからな」

「それはすごくわかる」

秋山さんはまさしくそんなイメージだ。

和服とかすごく似合いそう。

「律はムカつくから特にない」

この輝彦の発言に連太郎は、

「さっきもだけど稲木くん、輝彦と田井中さんと仲が悪いのか？」

「輝彦と田井中さんはいつもちょっとした事でケンカしてるんだよ」

「そりゃまた」

特殊なケースだな。

あの女好き輝彦が女の子とケンカするとは。

だから、

「あんな事言ったのか？」

「へっ、別にいいだろ。ああいうのは言っといた方がやる気に繋がるんだぜ」

男子軽音部員が出ていった後の第1音楽室。

「あんな事になるなんてな」

「驚きです」

未だに事実を受け止める体制が出来ず口に出している澪と紬。

「クッキーおいしいー」

「唯はもう少し食べるのを控えろ！」

澪はツッコミを入れると唯の皿を取り上げた。「ああっ」と唯はクッキーを取られてちょっと涙目になった。

「もうっ！　男子たちがいるときもずっと食べてたじゃないか！？」

「だって美味しいんだもん」

「だから控えろって！」

またもツッコミを入れる澪。

「みおー急に饒舌になったなー。どうしたー？」

様子をずっと見ていた律は言うと口を大きくあけてクッキーを放り込む。

「えっ、いや……別に」

「そうですよね。さっき男性の方たちがいた時はずっと黙ってらしたのに……」

「ムギまで。気のせい気のせい」

平静を保とうとしているが澪のカップを持った手が少しぎこちないのを律は見逃さなかった。

「男子がいたからまともに話せなかったんだよなー」

「ちっ、ちが」

否定しようとする澪にすかさず律は言った。

「違うのか？」

「……違いません」

白状した澪。
顔が少し赤くなっている。
とてもわかりやすい。

「まっ、そんな事はいいや。ムギお茶のお代わりもらって良い？」

「はい。ただいま」

紬は律に新しいお茶を入れるため一旦席を離れる。
すると律は唯がこちらをじっーと見つめているのを発見する。

「唯、なんだ？　私の顔がそんなに可愛いか？」

「そういえばりっちゃんって、てーくんと仲悪いの？」

ボケをスルーされた事に若干寂しさを感じつつ律は言った。

「うーん。仲が悪いっていうかなー。なんて言ったらいいんだろー。……わからん！」

正直律にもなんでこんなに仲が悪いのかわからなかった。
なんでだろう？

「ふーん」

納得したかどうかは不明だか唯は言った。

「だから、りっちゃんはあんな事言ったんだね」

「あんな事ってなんだよ。あれはテルが悪いんだぞ」

あんなこと――――

『1つの学校に2つの軽音部ねぇ。面白いじゃねぇか。りつっ！』

『な、なんだ？』

『俺たち男子軽音部略して「だんおん部」はお前たち女子軽音部に宣戦布告する！　どっちが優れているか今度の桜高祭で勝負だぁ！！』

『！？　……いいぞ乗った！　だがただじゃ面白くないなー。負けた方は来年の部費を勝った方に譲るってのはどうだ！！』

『……いいぜやってやるよ。その方が燃えるからなぁ。絶対にお前たちを倒して部費は我ら「だんおん部」がいただく！』

『その言葉をそのままそっちに返してやるよ！　桜高祭初の……』

『『軽音部対決だぁ！』』

第8話『あんなこと』（後書き）

やっとやっとアニメの1話あたりが終わったぁーー!!

涙が出そうなほど嬉しい（泣）

次は楽器を買いに行くアニメ第2話を下敷きに面倒な設定をちょっとだけぶち込んでいこうと思います

長くなりすぎた事を反省し短くまとめる所存ですので何卒よろしくお願いしますっ!?

第一回プロフィールチェック

律「桜が丘高校軽音部男子のプロフィールチェックー！」

唯・澪・紬「イェーイ！！」

ドンドンパフパフ～～

律「はーい今回はお話を一旦お休みにして。オリジナルキャラクターの男子たちのプロフィールを暴露していきたいと思いまーす。司会進行を勤めますのはこの私、桜が丘高校軽音部のアイドル田井中り……いてぇ！」

澪「嘘を言うな！　嘘を！！」

律「ぶーぶー。軽いジョークもわからないのかよー」

澪「いいからしっかり司会を進めろ！」

律「はいはーい。ではまず最初に紹介させていただきますのはこの人、主人公の藤澤連太郎だぁ！！」

名前：藤澤連太郎（ふじさわれんたろう）

性別：男

身長：１６５ｃｍ

体重：５２ｋｇ

誕生日：７月１４日

性格は真面目で基本常識人。
輝彦に言われた一言で桜が丘高校に入学を決める。クラスでは目立たない位置にいて、まだ男の友達が出来ていない事を少しだけ悩んでいるらしい。お昼休みはほとんど唯と和と一緒に食べている。輝彦とは良くも悪くも友達でなんだかんだで気が合う仲だ。自分の感情が抑制出来ず思わず大きな声を出してしまう時がある。基本的に男子は「くん」、女子は「さん」づけで呼んでいる。スギ、ヒノキの花粉症持ち。

律「これだけ見るとつまらないプロフィールだな」

紬「あはははは」↑苦笑い

澪「そんな事ないんじゃないか？」

律「い～やっ、つまらない。もっとなんかあっても良いのにー。唯はなんか藤澤の面白い秘密とか知らないのか？　同じ中学だったんだろ？」

唯「う～ん。それが私、中学の時はれんくんと別のクラスだったしなー」

律「噂になるような事もなかったのかよー？」

唯「うん。なかった」

律「藤澤は平凡だな」

澪「でもそれが藤澤くんの良い所じゃないか？」

紬「そうですよ」

律「……そうかもな。よしっ、じゃあ次だ！！　でもこいつ私は好きじゃないんだよな～」

唯「誰なのりっちゃん？」

律「こん中じゃあ唯が一番知ってる奴だよ」

唯「？」

律「わかってないならいいや。お次はレンの友達にして唯と和の幼

なじみ、準主人公的ポジションを持つ富永輝彦だぁ！」

名前：富永輝彦（とみながてるひこ）

身長：１６８ｃｍ

体重：５７ｋｇ

誕生日：３月１５日

連太郎が桜が丘高校を受験するきっかけを作った人物。
連太郎とは対照的に面識くさがりで大雑把な性格をしており、尚且つ人の不幸が大好きというＳの一面も。女子と多くの交流をしたいがために桜が丘高校を受験した。
前述の理由から誤解されがちだが本当は人のつながりなどを大切にする優しい人物である。

澪「……なんだか藤澤くんよりもしっかりとしたプロフィールだな」

律「……だな。私も驚いたよ。なんでコイツこんなに優遇されてるんだ？」

紬「なんでも元々は主役にする予定だったらしいですよー」

律「へぇーそうなんだ……って、ムギなんでそんな事知ってるんだ？」

紬「聞きたいですか？」

律「いやっ、いいや。なんか恐いし……ところで唯、テルについてなんか知ってる事とかあるか？」

唯「てーくんはねー。エビとかカニが苦手なんだー。後、寝相が悪いでしょー、数学が苦手でしょー、スポーツは得意で、料理も得意だったかなー」

澪「詳しいなー。さすが幼なじみ」

律「それにしても料理が得意って以外な情報だな。普段料理とかしてるのか？」

唯「家ではたまに料理してるみたい。あっ、今思い出した。私が家で1人の時とかに心配して和ちゃんと一緒に夕ご飯を作ってくれた事があったんだ」

紬「優しいんですね。プロフィールの通りです」

律「そこが私は一番信じられないんだよなー。テルが優しい所なんて見た事ないぞー」

澪「プロフィールにもあったろ。富永は気づきにくいだけで本当は優しいんだよ。律にもそのうちわかる時が来るよ」

律「いやにテルの肩を持つな澪。何かあったのか？」

澪「えっ、いや……そんな事より次いこう次」

律「まぁ、いいや。お次は……」

紬「待ってましたー！」

律「うおおっ！？　いきなりどうしたんだムギ？」

紬「私の事はいいですから。早くお願いします」

律「すごく気になるが今は後回しだ。次は顔は女の子みたいに可愛い容姿を持つ心優しい癒し系、稲木薫だぁ！！」

名前：稲木薫（いなぎかおる）

身長：１５２ｃｍ

体重：４３ｋｇ

誕生日：５月１０日

女の子みたいな容姿の男の子。
優しい性格の持ち主で人のフォローにまわったりして他人に気を使う事が多い。
一人称は「僕」。

クラスと部活で癒し系マスコット的なポジションで終始いじられている。
ピアノをやっていた経験がある。

紬「なんでこんなに少ないんですか？」

律「いやさすがにまだ本編で出してない事をポンポン出せないじゃん」

澪「それはそうだな。こう考えると富永は本編で出しすぎたんだな」

律「ああ。だから今後は出番を減らしていくらしいな。……しかし藤澤と同じで薫についても話す事ほとんどないんだが？　誰かなんかない？」

唯「そういえばかおちゃんが男子トイレの前で先生に引き止められてるとこ見たよー」

澪「私も身体測定の時に男子の列に並んでいた薫が女子の列に引っ張られているところを見たな」

紬「私もこの前薫くんが綺麗な女の人と一緒に道を歩いてる所を見たくらいしか……」

律「ちょっと待て！？　今なんて？」

紬「ですから薫くんが綺麗な女の人と一緒に歩いてる所を見たんで

す」

唯・澪・律「ええー！？」

紬「どうしたんですか？　みなさんいきなり大声をあげて」

澪「どういう事だ？」

律「つまり薫には付き合ってる彼女がいるのか？」

唯「すごいなぁ。かおちゃんもう彼氏かいるんだぁー」

澪「いやまだ決まってないからな、唯。しかも『彼氏』じゃなくて『彼女』だからな」

律「もう少し詳しく教えて、ムギ」

澪「おい、律。まだ紹介が1人終わってないぞ！　それは後にしろ！！」

律「えー」

澪「は・や・く・し・ろ」

律「わかったわかった。わかったからそんな怒んなって。……さて最後は人と距離を取りたがる寡黙なクールガイ、曽我部舜だぁ！！」

名前：曽我部舜（そかべしゅん）

身長：１７６ｃｍ

体重：６５ｋｇ

誕生日：９月２４日

あまり喋らず人と関わりを持たない男の子。入学時から教室でいつも１人という悲しい日々を過ごしている。クラスは１年１組。自分から何かを話すことはほぼない。潔癖症らしい。生徒会長の姉が存在する。

唯「なんでしゅんくんはいつも１人でいるんだろうね？」

律「おおっ！　唯にしては的確な指摘だな。そうだよなー。なんで１人でいるんだろうな？」

紬「もっと仲良くなれればいいんですけど……」

澪「難しいんじゃないかな」

律「う～ん。多分だけど、どうやって仲良くなっていいか分からないんじゃないか？」

唯「じゃあさっ。今度みんなで仲良しパーティーやろうよー。お菓子とかジュースとかいっぱい用意して派手にやろう？」

澪「それいつもと変わらないんじゃあ……」

紬「そのアイデアすごくいいですよ。私お家からありったけのお菓子持ってきます！」

律「今度男子連中にも相談してみようぜ！　テルだけ省いて」

唯「ええー。私、てーくんもいた方がいいと思うなー」

紬「人数は多いほうがいいですよ」

律「……仕方ないなぁ。テルも呼ぶか」

唯・紬「うん！」

律「澪はどうだー？　もしかして反対か？」

澪「わ、私もやるよ！？　みんなで仲良しパーティー」

律「よし。……というわけで今回の桜が丘高校軽音部男子のプロフィールチェックを終了します。またご縁があればまたやるかもしれません。お送りしましたのは桜が丘高校軽音部、ドラムの田井中律でしたー。ではみなさんさようなら～」

唯・澪・紬「さようなら～」

第一回プロフィールチェック（後書き）

と、いうわけで今回は唐突なプロフィールチェックでした。

自分でもよく分からなくなってたのもあって、オリキャラたちを簡単にまとめて唯たちに紹介させました。

何気にこのプロフィールチェックで初めて暴露された設定も……。

とりあえずこれを書き終わった後に思ったのが連太郎と輝彦の扱いですね。

連太郎は元々サブキャラの予定でしたし、輝彦は主人公の予定だったんですけど『これじゃあ、ありきたりじゃね？』と思い今のような形に……。

その関係で稲木薫、曽我部舜というキャラまで出てきて、今更ながらやり過ぎた感が。

二次創作なのに本当にオリジナル設定が多い作品ですがどうか今後もよろしくお願いします

次回はちょっと時間を空けて投稿する予定です

第9話『しょうてんがいのまえに』

楽器
音楽を奏でるために用いる音の出る器具。

「高いな～」

電気楽器
楽器の作る振動を、電気信号として取り出し、何らかの処理をして音声を出力する仕組みを持った楽器。

「高すぎる」

藤澤連太郎（ふじさわれんたろう）はエレクトリックギターを見ながら吐露した。
今、連太郎がいるのは商店街の楽器店の中だ。何故、彼はここにいるのかというと至極単純。
値段の確認である。
桜が丘高校男子軽音楽部の部員として正式に決まってしまい、若干の不満はあるもののいつまでも引きずっていられない。そう思った連太郎はせっかくなので下校の際に値段の確認の為立ち寄ったのである。
だがエレクトリックギターというのはかなりのお値段だった。

「5万、10万、15万……」

並べられているエレクトリックギターをスライド式に移動して眺めて行くがどんどんと値段が上がっていき最終的に、

「ひゃく……」

言葉が出なかった。

高すぎんだろ！

楽器店など一度も入った事のない連太郎は終始驚いた。

次の日

「そんな事になったのね。偶然が重なったにしてはすごいわね」

お昼休みの時間、連太郎はそれとなく真鍋和（まなべのどか）にこれまでの軽音部の経緯を伝えると以上の感想が返ってきた。

「多分桜が丘初なんじゃないかしら？　男子だけの部活って」

「そうらしいね。でも、もう男子サッカー部とかも出来たって聞いたけど……」

「男子サッカー部は残念ながら部活としては認められなかったわ」

「なんで？」

「サッカーって１１人でやるでしょ。でも部活申請しに来た人数が３人。これじゃ、とても部活なんて認められないから同好会止まりになったのよ」

なるほど。

もしかしたら男子軽音部も同好会にされる可能性があった訳だ。

そう考えると運が良いと言える。

「サッカー部以外でも新しく部活を作ろうって動きがあったようだけど結局人数不足でどこも同好会になったわ」

話を続ける真鍋さん。

連太郎は申し訳ないような気持ちでいっぱいになった。

本気で部活をしたいって人がたくさんいるのにほぼ輝彦の思いつきで始めたような男子軽音部が正式に採用されて心底居たたまれない。

「ごめんね」

「えっ？」

何故か真鍋さんは謝ってきた。

面食らっていると、

「話を聞いている限りだとテルが迷惑かけたみたいだし本当にごめ

んなさい。私もちゃんと見張っておくべきだったわ」

真鍋さん……。

「お、俺は大丈夫。真鍋さんが謝る事じゃないよ。それに今では結構楽しいから」

「そう、ありがとう藤澤くん」

真鍋さんは本当に輝彦の事を気にしてるんだなぁ。

幼なじみだからかな？

なんというかそんな関係を続けられているのが妙に微笑ましい。

「けど軽音部をわざわざ男子と女子で分ける必要、あるのかしら？」

「……」

ないと思う。

その日の放課後

連太郎はオカルト研究部などが立ち並ぶ怪しげな廊下を歩いていた。

理由は、

「……まっ、まだ」

平沢唯（ひらさわゆい）が後ろで震えながら制服の袖をちょこんと指で掴んでいるからである。

うひゃあああああああああああ！！！！！

かっ、神よおおおおおおおおおお！！！？

言葉にならない喜びが連太郎を支配した。

何故こんなステキイベントが発生しているかというと、平沢さんに頼まれたからである。

『この廊下恐いから一緒に歩いてくれない』

なんて頼まれたら誰でもやります！

偶然通りかかっただけだが半端なく嬉しい。出来れば永遠に続いて欲しい！！

「もう着いたよ」

だがそんな願いは通じるはずもなく廊下を抜けて女子軽音部の部室前に繋がる階段に到着する。

「あっ、ありがとう～！」

すると平沢さんは連太郎の手を掴んで思いっきり喜んだ。

ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！

もう死んでもよくなってきた。
手を離し平沢さんは階段を上がっていく。
ああ幸せよ……さようなら。
平沢さんの後ろ姿を目に焼き付けると連太郎は部室へと向かった。

「はぁー」

富永輝彦（とみながてるひこ）は男子軽音部室で音楽雑誌を見ながらため息をついていた。

「どうしたのテル？　似合わないため息なんかついちゃって」

言ったのは稲木薫（いなぎかおる）だ。
チラッと見ただけじゃ男とは思えない美貌を持つ彼は輝彦のそんな姿を見ながらキーボードを弾いている。元々家にあったものを持ってきたらしい。

「俺って左利きじゃん」

「うん」

「左利きのギターってのが中々ないんだよな」

音楽雑誌を見ても左利き用のギターはあまり乗っていなかった。
左利き。
いつもそんなに気にした事はないのだが輝彦は左利きである自分を今初めて恨めしく思った。
何故こんなにも少ないんだ？
所詮は右か左か西か東かみたいな違いしかないのに。

「左利き用のギターなら専門店に行って直接見てきた方が早いんじゃない？」

「やっぱりそうだよな。今度の休みにでも見に行くか？」

ウダウダ考えるよりそっちの方が手っ取り早いしな。

「薫は一緒に行くだろ？」

「うん」

笑顔で言う薫。
後はレンを誘うだけだな。

「そうだ！　この機会に曽我部くん誘ってみたら」

「曽我部ね……」

曽我部舜（そかべしゅん）はこの男子軽音部の部員の１人なのだが部活にほとんど顔を出さない。出したとしても一言も話さない。輝彦にとっていまいち調子の掴めない相手なのだ。

「曽我部くん。先生から聞いた話だと自分から軽音部に入ったようだよ。多分だけどバンドとか楽器に詳しいんじゃないかな？」

そうは到底思えないが。

「どっちかっていうとスポーツやってそうだがな？」

「それはテルにも言える事だよ」

輝彦も文化系よりかはスポーツ系の部活に入っていそうなイメージが強い。それは輝彦自身もわかっている。実際、男子サッカー部を作るって奴らについこの間誘われたばかりだ。

まぁ、断ったけどな。

元々入るつもりはなかったし、その時には軽音部に入部、部員集めで大変だったからだ。

「……しょうがない。不本意だが曽我部も誘ってみっか？」

一応アイツも男子軽音部の一員だ。

けたましい音を立てながらドアが開いた。

「お待たせ」

入ってきたのは遅れていた連太郎だ。

「遅かったなー」

「ちょっとね。ところでどうしたの？　なんか話してたみたいだけど……」

「今度の休みにみんなで楽器店に行こうって話してたんだ」

連太郎の質問に薫が答えた。

「いいね。なんだかんだ言って楽器があるのは薫くんだけだし、みんなで一度足を運ぶのは良いことだよ」

連太郎の賛成意見を聞くと輝彦は口角を上げニッと笑みを作る。

そして、

「決まりだな。今度の日曜日に商店街の前で１０時に集合だ！」

同じ頃、第１音楽室の女子軽音部で平沢唯は、

「このケーキおいしいね」

ケーキを美味しくいただいていた。

女子軽音部に入ったものの唯は部室に訪れてはお菓子ばかり食べている。

そのせいで本人にやる気があるのかないのか同じ部員である３人には計れないのである。

「で、唯。ギターは？」

自然な形でりっちゃんが言った。

ハッと唯は気づいた。

「あーそうかー忘れてた！　私ギターやるんだっけ」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ」

直後に澪ちゃんに注意される。

唯は「えへへー」と笑ってごまかす。

いけないいけない。

せっかく部活を始めたのにこんなんじゃ。

「ギターってどのくらいするの、値段？」

すると澪ちゃん「うーん」と顔を下げ腕を組み何やら考えてる模様。

「安いのは1万円代からあるけど……あんまり安すぎるのは良くないからなぁ……」

澪ちゃんは考えが纏まったのか顔を上げて、

「5万円くらいがいいかも」

「えっ？　5万……」

唯はビックリした。

高校生にとって決して安い金額ではない。それに今の唯のお財布

事情を考えると、とても手が届かない。

「私のお小遣い１０ヶ月分……」

お小遣い貯めて買ってたら1年終わっちゃうよね。

さらに澪ちゃんは得意気に、

「高いのは１０万円以上するのもあるよ」

唯は目線を部長であるりっちゃんへと向け、頼みを聞いてもらえるようになるべく優しい笑顔を作ると、

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

落ちなかった。

そんなに甘くなかった。

このまま楽器買えないのかなぁ。

「これ美味しいわよ」

唯の様子を見かねてかムギちゃんがお菓子を渡してくれた。

受け取ったお菓子に唯はかぶりつく。

「おいしー」

唯が笑顔になったのを見るとムギちゃんと澪ちゃんは薄く笑みをこぼしている。

「とにかく楽器がないと何も始まらないしなぁ……」

澪ちゃんが言うとすかさずりっちゃんが、

「よーし今度の日曜日にギター見に行こうぜ」

ぐるっとみんなの様子を伺う。

反対する人は誰もいなかった。

確認するとりっちゃんは拳をつくり天井に向かって振り上げ叫んだ。

「オーー！」

その日の夜、唯は部屋でブタさん貯金箱達の中からお金を取り出していた。

だがブタさん貯金箱達から出てくるのはどれも１０円や５円といった小銭ばかり、とてもではないが足しにならない。

「……無念なり」

唯はかき集めた小銭を見ながらがっくりと肩を落とす。

コンコン、とドアをノックする音。唯は「ほい」と言って返事をする。
ガチャリとドアを開けて現れたのは妹の平沢憂(ひらさわうい)だ。
「お姉ちゃんごはんだよ」
妹の姿を見た瞬間、唯は今にも泣きそうな顔して、
「うーい」
「どうしたの？」
泣きそうな姉を心配しながら憂は聞いた。
「軽音楽部に入ったの……」
「ええっ！」
憂は驚いていたが唯は気にせずに続ける。
「ギター買いたいんだけど……」
「へぇーお姉ちゃんギター弾けたんだー」
「ううん全然！」
はっきりと否定する唯。
憂はパチクリと目を瞬かせている。
「でねー……お金を貸していただけないでしょうか？」

残念ながら今の唯の所持金ではギター1本すらまともに買えない状況だ。
次の休みにはどうしてもお金が必要な為、もう頼みの綱は妹の憂しかいないのである。

「ごめんね。私もあんまりない」

「ですよねー」

平沢家の月のお小遣いは決まっている。なので買いたい物がある時は事前に貯めておく必要があるのだ。
やっぱりギター買えないのかなぁ。
落ち込んでいると

「お母さんにお小遣いの前借り頼んでみたら」

憂が言った。

「私も一緒にお願いしてあげる」

ばぁーと笑顔になる唯。

「さすがー頼りになる！」

「えへへ」

得意気に憂は笑った。

「じゃあ下で待ってるから」

言うと憂は部屋を出て行く。
唯は自分の携帯電話が鳴っているのに気づいた。
確認するとメールだった。

メッセージ：りっちゃん

タイトル：ノンタイトル

本文：次の日曜日の１０時に商店街の前に集合！　くれぐれも遅刻するなよ～

「日曜日かー。楽しみだなー」

そして日曜日――――――

「「なんでコイツがいるんだ！？」」

騒がしい２つの声が商店街の前で響いたという。

第9話『しょうてんがいのまえに』（後書き）

もう少し早くに投稿する予定がちょっとした事故にあって中々出来ませんでした。

今回もバラバラに行動させて結局会うみたいになっちゃいましたが見返すと結構微妙でした。

1話を長々やったので2話目は短くやっていきます

第１０話『まちじかん』

「なんで律がいるんだぁ！」

「テルこそ！　なんでいるんだよー」

「俺はだんおん部で楽器を見に行こうって事になったからここにいるだけだ」

「私だって女子軽音楽部で楽器を見に行こうとしてるんだ」

連太郎が商店街の前に着くと輝彦と田井中さんが言い合いという名のケンカを勃発していた。

呆れると共に連太郎は驚いた。

それというのも田井中さん以外に秋山さんと琴吹さんもいたからである。

「あら？　藤澤くんおはようございます」

こちらに気づいた琴吹さんが挨拶をする。

秋山さんも気づいたようで軽く頭を下げる。

連太郎はそれらにお辞儀をして返す。

「えっと……どうなってるか説明してもらっていいかな？　琴吹さん」

連太郎は事情がわかっていないので琴吹さんに聞いてみる。

「そうですね……」

すると琴吹さんは笑顔で視点をゆっくりと連太郎から輝彦と田井中さんとへと向ける。

「人の事をとやかく言う前に律はもっと内面を磨けよ。そうじゃないとモテないぞ！」

「テルみたいな軽い奴に内面どうこう言われたないわーい。お前こそもっと内面を磨いたほうがいいんじゃないか？」

以前ケンカ継続中の2人を見てにっこりと微笑むと琴吹さんは視点を戻し、

「ご覧の通りです」

「わかんないんですが！？」

思わず声を荒げてしまった連太郎。

来たばかりの連太郎には2人がケンカしていると言う事しかわからない。だから説明を求めたというのに……。

もしかして琴吹さん……平沢さんに負けないくらい天然なのでは？

新たに知った事実を受け止められずに誰か他にちゃんと説明が出

来そうな人はいないかと探すと秋山さんと目があう。
そして
「説明……お願い出来ます」
「……はい」
秋山さんから聞いた話を総合すると、どうやら男子軽音部と女子軽音部は同じ日に、同じ場所、同じ時間、そして同じ目的で集まったようだ。
「でも秋山さん達ってもう楽器を持ってませんでしたっけ？」
連太郎はこの前軽音部に訪れた時に女子軽音部室で楽器を見た記憶があったので聞いてみた。
「ゆ、唯が持ってなくてな……」
なんと平沢さんは楽器を持っていなかった。
すでに平沢さんは持っているものとばかり思っていたから少し驚いた。
ふと連太郎は軽音部に入部してからの平沢唯との会話を思い出す。

『ムギちゃんはすごくおっとりしてて、高そうなティーセットなんかも持っててお嬢様って感じ』

『澪ちゃんはね。大人な感じがするんだけど、とっても繊細ぽくて可愛いんだぁ』

『りっちゃんはとにかく元気なんだ。ドラムをやってる理由を聞いたらね。カッコいいからなんだって』

『後、ムギちゃんが持ってくるお菓子はどれもおいしいんだ』

そういえば3名の部員とお菓子の話しか出てなかったなー。
完全に連太郎の勘違いだった。
思い出した会話の中には楽器の話など一度も出てない。
何故なんだろうね？

「あれーりっちゃん達が何で？」

呑気な声と共に現れたのは遅れていた薫くんだ。
いつものように長髪を後ろで束ね、上はシャツにブレザーを着込み、下は太股の辺りまでしかないズボンを履いていた。ついでに手提げバッグまで持っている。
完璧に女の子だ……。
連太郎の見た感想だ。
誰がなんと言おうとこれは完璧に女の子である。輝彦は『薫も女の子みたいな容姿は気にしてんだよ』と言っていたが到底そうは思えない。
気にしているならもっと男らしい服はいっぱいあるだろうに、何故わざわざ女の子に見えそうな服を着てくるのか、はたはた疑問だ。

「はぁあああ」

隣で琴吹さんがうっとりしていた。
目線が薫くんに向けられている。
まっ、まさか……。
連太郎は琴吹さんの態度にある結論に達するが確実とは言えない為、自分の内に仕舞う。

「……随分と騒がしいな」

「やっぱりそうだよね。これじゃあ先が思いやられるよ……って！？　曽我部くん！！」

びっくりして声を荒げる連太郎。
気づくと曽我部舜がいた。

「曽我部くん来てくれたんだ！」

「……まぁ」

チラッと輝彦に顔を向けて曽我部くんは、

「あいつに……しつこいぐらいに誘われればな」

冷めたような感じで言った。
輝彦の奴なんだかんだ言って曽我部くんの事も気にかけてやってたんだな。
自分の事を最優先する人が多い中、誰かを気にかけられるアイツはお世辞抜きでカッコいいと連太郎は思う。

「ん？　目の下の隈がなんかすごいよ」

曽我部くんの目の下に大きな隈が出来ているのに気づく。

欠伸をしながら曽我部くんは、

「昨日、富永に『行きます』ってメールするまで秒単位で無言電話といたずらメールが交互に送られて眠れなかったんだ」

やっぱり輝彦は最低だった。

「唯、来ねぇーな」

「なんでテル達まで待ってんだ？　もう揃ったんだからさっさと行けよ」

「いいだろ。目的は同じだし一緒に行ったって」

「やだ」

「『やだ』は流石にねぇな。理由になってない。さては偏差値、底辺の下だな？」

「偏差値なんかで私の凄さは計れない。テルこそ、この前因数分解出来てなかったろ」

３０分以上もケンカして疲れたのか、火が消えたが如く静かになった２人。

だが疲れてもお互いにトゲを含む会話を続けている。

「はぁ～」

連太郎の口からため息が漏れる。

「輝彦、いい加減止めろよ。田井中さんもそろそろ……」

「「レンには関係ない」」

ぴったり同時に輝彦と田井中さんは言った。

息ピッタリだなぁ……。

田井中さんは俺の呼び方変わってるんですけど。

「あっ、来たよ平沢さん」

薫くんの言う通り、平沢さんが向こうの歩道にいるのを連太郎は見つける。

かっ、可愛い！

これまでほとんど制服姿しか見ていない連太郎にとって平沢さんの私服姿は新鮮だった。

気づいた平沢さんはこちらに走ってくるがすぐに通行人にぶつかる。

ひっ、平沢さ～ん！　あの野郎平沢さんに謝れ！！

優しい平沢さんは自分から謝って再び走りだし連太郎たちのいる歩道に着く。
が、すぐに飼い主の持つリールに繋がれた犬を見つけるとワシャワシャと撫で始める。
いいなぁあの犬……。

ちなみに連太郎以外の反応。

「後、数メートルなのに……」

「辿り着けない！？」

「まったく唯は」

「平沢さんらしい感じはするけど……」

「あらあら」

「ね、眠い……」

第１０話『まちじかん』（後書き）

時間が結構空いてしまいました

それなのに短い……

更新は多分一週間に一回出来ればいい方だと思います

次は男女のお買い物ですが果たしてちゃんと楽器店に行けるかなぁ

第11話『すっかり』

平沢さんが来て女子も揃った事で一同はようやく商店街に繰り出した。

商店街は洋服店や飲食店などが立ち並びどちらかと言うと何でも揃っているショッピングモールのようなものに近い。休日だからか人も多く、賑やかである。

「それにしても遅かったな、唯？」

「ごめ～ん。でも、てーくん達も来てるなんて知らなかったよ」

眉間にしわを寄せる輝彦に笑顔で応対する平沢さん。

「お金は大丈夫だった？」

琴吹さんが言った。

「うん。お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらった」

「5万円て……いいよなぁ唯ん家は親が優しくてよ」

「そんな事ないよ。てーくんのお父さんとお母さんも優しいって」

「アレが優しいか？　……唯、お前は目が悪いようだから眼科に行ってこい。良い所教えてやっから」

「私、視力は悪くないよ」

「いや、平沢さんそういう意味じゃないと思うよ」

連太郎が言うと平沢さんは首を傾げる。
平沢さんは相変わらず天然だ。
輝彦の嫌味も動じないとはさすがである。
さらに横では、

「曽我部……だっけ？　結構高いよな。身長何ｃｍだ？」

「……」

「おーい無視すんなよー」

「……」

田井中さんが不機嫌そうに眉をピクピクと上げ下げし始めた。
交友的に接してくれている田井中さんだが曽我部くんにその気がないのか黙り込んでいる。やはり曽我部くんと仲良くなるのは難しいかな？

「曽我部くん黙ってないで教えてあげたら？」

笑顔で言う薫くん。
優しい感じで言っても無駄だと思うが、

「１７０ｃｍくらいだ」

以外にもあっさりと曽我部くんは答えた。
……結構簡単かもしれない。
そしてみんなの様子を見ていた秋山さんはそれとなく、

「じゃあ早速楽器……って、唯！」

平沢さんは突然走りだし洋服店に置かれているマネキンに着せられた可愛らしい服の前に立つ。

「い、今なら買える！」

「コラコラ」

田井中さんは呆れながら平沢さんの首根っこを掴む。

「ちょっと見るだけ」

だが平沢さんはそう言うと構わず店内に入ってしまう。
連太郎、輝彦、田井中さん、秋山さんは呆れながら、薫くんと琴吹さんは笑って、曽我部くんは表情を変えずに追って店内に入った。

田井中律は今日を楽しみにしていた。楽器店に行くのが最大の目的だが、今回女子軽音部で出かけられる初めての日。今日は行く前からウキウキだったのだ。

それなのに

「ここ女性服専門店じゃねぇか。なんだよ。せっかくだから新しい服買おうと思ったのに……」

「そんな事よりこの店俺たちには場違い過ぎるのでは？」

「別に大丈夫だよ。変な気を起こさなきゃ」

「……早く帰って寝たい」

何故テルたち男子組みがいる？

別に律は男子が嫌いなわけじゃない。男子の友達は少なからずいるし、一緒に遊んだりする。だから男子組みも嫌いではない。どちらかというと友好的だ。

「待てよ。こんな機会滅多にないんだし、色々見て楽しんでいくのもありだな！」

只、１人を除いて。

テルの顔を睨みつけると律は店内を見回す。

ざっとだが目移りしそうな可愛い服かいっぱいだった。店内も女性向けにアレンジされていて律は好感が持てた。だが男子には入りずらい店というのは否めない。その証拠に男子はだんおん部の連中

だけである。

「ねぇねぇ澪ちゃん」

「何だ、唯？」

「澪ちゃんにこの服似合うと思うんだけど、どうかな？」

「どれ……って無理むりムリ！　大体そんな派手な服私には似合わないって！！」

「ええー！　……似合うと思うんだけどな」

「ぷっ、くくくくっ」

律は2人のやり取りを見てつい吹き出してしまいそうになる。必死で笑うのをこらえてもう一度見る。

「あっ、こっちのはどうかな？」

「だから派手だって！」

「くくっ、ははははは」

限界だった。

唯に悪気がないとはいえ派手な服ばかりを澪に勧めているから余計に面白い。

もう少し様子を見守ってみよう。

「どうしたよ、唯？」

だがそこへ最低最悪野郎富永輝彦がひょっこりと顔を出す。

コイツいつの間に。

「可愛い服だね。買うの平沢さん？」

さらに薫も話に加わる。

「てーくんとかおちゃんはどう思う？　こっちの尖ってる服か、こっちのキラキラしてる金色の服、どっちが澪ちゃんに似合うかなぁ？」

テルと薫は考える仕草をすると唯が見せた服を交互に見る。

「秋山の似合いそうな服ねぇ……」

「やっぱり本人の意見を聞かなきゃ。澪はどんな服が好みなのかな？」

「おっ、おい！　富永も薫もそんなに深く考えるな！！」

「うーん？　……ううん！」

悩んでいたがやがてテルは近くにかけてあった服をとる。

「このフリルがいっぱいついた黒い服なんかどうだ？　秋山に絶対似合うぜ」

「ああ、いいかも！」

「ちょっと待って！」

楽しそうな2人を止め薫もかけてあった一着の服を取り出す。

「こっちの色違いの赤の方が澪には似合うと僕は思うなぁ」

「うんうん」

唯は目を輝かせる。

赤も似合う、と思っているようだ。

「こっちの黒バージョンが良いとおもうんだがな……」

「いや赤の方が似合うって」

「あの私の意志をもう少し尊重してもらえると……」

色の違いで意見が食い違うテルと薫。

「だったら2着とも買っていこうよ。そうすれば好きな時に使い分けられるし」

「おっ、唯にしては名案」

「いい考えだよ平沢さん。2着とも買おう！　店員さ～ん！」

「止めろっーーーー！！」

澪はさらに困った顔になって面白いのだがさっきと違って見ていた律には笑みどころか怒りにも似た感情が湧き上がる。
原因はテルである。
律は何故かテルを見てると『ムカつく』のである。

「おっ」

「あっ」

ついテルと目が合う。
律はすぐに睨みをきかせると、

「フンっ！」

そっぽを向いた。

場所は変わって可愛い小物などが置かれているお店に入った一同。
みんなそれぞれバラバラに店内を動く中連太郎は平沢唯を見ていた。

「なにか可愛いぬいぐるみないかな？」

可愛いぬいぐるみ探しているらしく平沢さんはあちこちと目を光らせている。
よし、平沢さんの為に可愛いぬいぐるみを探そう。
決意し連太郎は店内を歩き回る。

「あっ！」

すると大きな熊のぬいぐるみを発見。
連太郎は手にとって見てみる。
見た目ほど重くないし、フワフワとして柔らかいし、枕にするには持ってこいの……って、

「選ぶ基準が……」

間違っている。
平沢さんの為に選んでいるつもりがいつの間にか自分視点になっていた。
そもそもぬいぐるみを枕代わりにしようとしている俺って……。
酷い奴じゃね？
若干落ち込み気味に連太郎はぬいぐるみを元の位置に戻す。
今、気づいたがこの店はどうやら女子高生をターゲットにしているファンシーショップのようだ。至る所にいかにも女子受けする小物が置かれている。無論幅広い年齢に合わせた物もあるがこっちは数が少ない。

「さっきの店に続いてまたも場違いの所だな」

ぼやいていると曽我部くんが視界に入る。

真剣な目で何かを見ながら考え事をしているようだった。
近づくと、

「……買うか買わざるべきか……いやだが……」

曽我部くんはブツブツとまるで呪詛のように呟いていた。
何か買うのかな？
気になって見てみる。

「えっ？」

連太郎は目が点になった。
曽我部くんの見ていた物……それは石だった。
正確に説明すると丸形に加工された淡いピンク色の石。
ただの石ならば連太郎も驚きはしない。
玄関に置いておくようないわゆるオシャレとしての石については認知済みだからだ。
連太郎が驚いたのは石ではなくお店が作ったであろう説明書きの方だ。

『1人寂しいチェリー共！　恋人は欲しくないかい？　そうだよね欲しいよね！　だったらこの恋愛石を買ってっけコンチクショー！！　確実に恋が人出来る事間違いなし！？』

どこかで見た事もあるような煽り文句の横には、

『格安の1つ￥2000円なり～～』

高いわっ！
どこの詐欺の手口だ！！

憤慨した気持ちを抑えながら曽我部くんを見る。
さらに連太郎が驚いたのは曽我部くんがそんな『恋愛グッズ』を見ていた事だった。今までの行動や言動からてっきりそんな物には全く興味が無いと思っていた。
それ故に意外だった。
真剣な顔してるからにはそうとう好きなんだな。
だが、

「よし買おう」

「いやいや買わない方がいいって！」

さすがにこんな見るからに詐欺の延長みたいな物を買うのは止めなければ。

「いけない……かな？」

曽我部くんはいつもの変わらない表情で言った。

「いけないって言うか完全に騙されてるからさ。２０００円なんてぼったくりもいいところだし」

「絶対に恋人が出来ると書いてあるぞ」

説明書きの触れ込みを本気で信じている！
思わず苦笑いになる連太郎。

「なにやってるの、レン？」

と、薫くんが対照的な笑顔で話しかけてきた。

見ると薫くんは手にビニール袋を持っている。

「何か買ったの？」

連太郎は聞いた。

「うん。部室に飾ろうと思っていくつか買ったんだ」

「部室に？」

「だんおん部の部室って殺風景だから、少しでも見栄えがよくなるようにって思って」

薫くんの言う通り男子軽音部の部室である第2音楽室は殺風景だ。いくつかの机と椅子、後何故かあった食器棚しかなくかなりもの寂しい。その部室に小物を置くというのは良いアイデアだと思う。

「俺はいらねぇって言ったんだけどな」

そこへため息をつきながら輝彦が現れた。

多分薫くんの買い物に付き合わされたんだな、と連太郎は思った。

「ところで何やってんだ？」

「それが……」

輝彦の問いに連太郎は視点を説明書きの方に移し、あれあれ、と顎で示す。

「「うん？」」

輝彦と薫くんは同時に眉をひそめ説明書きの紙を見る。

「２０００円って高くないか？　これ」

「うんうん。それに僕にはただのビー玉に見えるんだけど」

以下のように反応する２人。

やっぱり誰がどう見ても高いと思うよな。この石ころ。

「やっぱりこんなの買わないほうが……！！？」

目を離した隙に曽我部くんは恋愛成就モドキの石ころをガバッと５、６個を手に掴みレジに向けて、

「ちょっと待て！」

歩きだそうとするのを連太郎は止めた。

「人の話聞いてた！　しかもなんでそんなに買う必要があるの！！」

「複数あればその分効果が上がる筈だ」

「上がるかっ！」

何なんだ！

曽我部くんは分かり難いキャラだと思ってたけどフタを開けてみればこんなんか！！

まさかだけど曽我部くんも天然なわけじゃないよね？

「この石買うのかよ、舜？」

輝彦の言葉を受け、コクンと頷く曽我部くん。
そのままレジに向かおうとす……、

「だから買わない方がいいって！」

連太郎は止めた。

「僕は別にいいと思うけどな。レンに実害はないでしょ」

「薫くん……確かにないけど……」

う～ん。

「そうだそうだ。お前には関係ないだろ」

輝彦も同調する。
確かに連太郎には関係ない。
買うのは曽我部くん、お金を払うのも曽我部くんであり、連太郎がマイナスになる事は全くないのだ。

「じゃあ買いに行ってくる」

かといって、

「だからダメだって！」

連太郎には騙されようとしている友人を見過ごす事は出来なかった。

次に一同が足を運んだのはゲームセンターだ。

「よっしゃー。澪、このゲームで対戦やろうぜ」

元気いっぱいで律が勧めたのは撥を使ってタイミングよく面を打つ太鼓型のゲームだ。

「またやるのか？」

呆れたように言う澪。

律はこのゲームをかなり気に入っていてゲームセンターに来ては必ず1回はプレイしている。その度に澪は付き合わされているのだが、そろそろ飽きてきた。たまには他のゲームをやらないか、と澪は提案すると、

「嫌だ！　私はこれがやりたいんだ！」

まるで小さな子供のような事を言う律。

こうなってしまっては仕方ないと諦めてため息をつきながら、

「わかったよ」

と澪は言った。

「よしっ！　じゃあ早速……って、曽我部！　それ私たちが先にやろうとしてたんだぞ」

話している間に曽我部くんが太鼓型のゲームにお金を投入していた。

「遅い」

備えられている撥を持ち曽我部くんが言った。
いつまで経っても始めない澪と律に業を煮やしていたようだ。

「とりゃーー」

と、横にいた筈の律がいつの間にか曽我部くんの隣に立ってお金を入れていた。
早ッ！

「なっ、何を？」

「こうなったら私と対戦だ！」

「嫌だ」

「怖いのかよ曽我部？」

「……」

「無視すんなー！」

律と曽我部くんは対戦を始めた。

「えと……律？」

私と対戦するんじゃなかったのかよ！

太鼓型のゲームは２人対戦用のゲームなので自然と澪は省かれる形になった。元々律が誘った事なのに。

ため息をつき２人から離れる。

他のみんなは何してるだろう？

ガチャガチャとボタンなどの音が響き合う中を歩いていると、

「またまたゲットーー！」

それらを全てをかき消すように大声が澪の耳に届く。

この声は藤澤くんか？

声のしたほうに行くとクレーンゲームをしている藤澤くんの姿があった。

「やったねっ！　レンくん」

「うん！」

その横には唯もいて一緒に喜び合っている。

「……」

藤澤の顔に澪は一瞬惹きつけられる。

あんな風な顔もするんだな。

いつもはどことなく落ち着いた雰囲気を出している感じなのに。
今の富永は年相応の、いや年以下の笑顔をしていた。もしかしたらアレが藤澤くんの素なのかもしれない。
澪は微笑し、2人に近づこうとすると、

「おーい、秋山」

小さな声で富永が止めた。
いつの間に。

「どうした、富永？」

「シーー！」

富永は静かにするように人差し指を口元に近づけて言った。
何だ？
意味がわからず首を傾げる仕草をとる澪。

「ちょっとこっち来い」

「えっ、ちょっ……」

澪の手を引っ張り歩き始める富永。
力が強いため澪は強引に振り解く事も出来ずに繋がれた状態で歩く。
いきなり何なんだ？　富永の考えがまるで読めない。
富永の背中を見ながら澪は考える。
何か怒らせるような事したかな？
だが澪にはそんな事をした記憶は皆無。まるで覚えがない。

「何か怒ってるのか、富永？」

聞いたが反応がない。

多分周りのゲームの電子音などが邪魔して聞こえないのだろう。

もっと大きな声じゃないと……でも……恥ずかしい。

大声を出したら自然と注目される事になる。

それだけは……嫌だ。

顔が若干熱くなっているのを感じると、澪は顎を引いて視点を下げる。

「！？」

その瞬間澪は気づいた。

て、てててっ、手を！

男の人の手を握っている事に。

恥ずかしがり屋で男に免疫のない澪は当然動揺した。

あ、あああわわっ、私手を握ってる！？

男の人と手を繋いじゃってる！！

どうすればいいかわからず澪の頭はパニック状態。

顔もさっきの比ではないくらい熱い。

心音も段々と早くなっていくように感じた。

「おーい、澪？」

富永の言葉でハッと気づく。

周りを見るとゲームセンターの外の駐車場だった。いつの間にか

外に出ていたようだ。

「悪いな。こんな所まで連れ出して」

「あ、いやべ、別に……」

「とりあえずそこのベンチに座っててくれよ。ジュース買ってくる」

富永は手を離して行ってしまう。
言われた通りベンチに座る事にした澪。
すーはー、すーはーと息を整える。
本当に富永は何を考えてるんだ？
こんな所まで連れ出して。
男はみんな狼と言うがもしかして富永は私を……。

「って、私はな、何を！　第一富永がそんな事するわけが……」

あるな。
落ち着いて考えると富永は学校で積極的に女子に話しかけている場面を何度も見る。
それに少し前に、

『やっぱり元女子校は可愛い子が多いな。彼女を作るにはもってこいだ』

などと言うことを澪はふと聞いてしまった事がある。
つまり私は、

「……狙われている？」

周りには知り合いはいないから助けてもらうのも無理だ。
ダラダラと今度は冷や汗が出る。

「きゃあ！」

すると急に頬に冷たい何かを押し当てられた澪はビックリして背筋がピンと伸び、声を荒げてしまう。

「スマンスマン。驚かすつもりはなかったんだ」

振り向くと両手に缶を持った富永がいた。

「ほいオレンジジュース」

無言で澪は受け取る。
横に座り富永はもう一つのオレンジジュースの缶を開けて飲む。
同じように澪も缶を開けて口元にオレンジジュースを流し込む。

「「甘〜〜」」

言葉が重なる。

「甘過ぎないか？　このオレンジジュース」

どこの会社が作ったか知らないが甘過ぎる。

「くそっ！　失敗した。普通に紅茶とかにしときゃ良かった」

頭を抱えて悔しがる富永。
その姿がちょっと面白くて澪は笑みを作る。

「本当に悪かったな秋山」

富永は話を切り出した。

「ちょっと2人を……あのままにしときたくてな」

「……」

そういう事か。

つまりは唯と富永を2人きりにしたかったと。なんか変に勘ぐっていた自分がバカらしくなった。

ここで疑問が一つ浮かぶ。

「藤澤は唯の事好きなのか？」

言うと、

「ああ。レンは唯の事す……」

富永は固まる。

「しまった。これ秘密だったわ」

「おい！」

何か抜けてるよな富永って。

「まぁ、そういうこったから」

しかも軽い！
藤澤が聞いてたら怒ってるな、絶対。

「ああっ！　てーくんと澪ちゃんこんな所にいたぁ！！」

唯の声が聞こえる。
見ると他のみんなも一緒だった。

「澪ーファミレス行くぞー」

「テルも早くー」

律と薫が呼ぶ。
立ち上がり、澪と富永は駆け寄る。

「それ何？　澪ちゃん」

唯は澪の手に持っている缶を見て言う。

「オレンジジュース」

「ちょっと貰ってもいい？」

答えると唯は聞いた。

「いや、これは……」

澪は渋る。
このオレンジジュースは一瞬で虫歯になるかもと思うほどかなり甘いのであまり人にオススメ出来ないのだ。

「俺のならやるぞ」

「本当に！？」

富永が自分の手にあるオレンジジュースの缶を渡す。

「えっ？」

澪は思わず声を出す。

富永もこのジュースの甘さを重々承知の筈だが。

だったら何故？

富永の顔を伺うとニカっと笑みを湛えていた。

狙ってやっている！

「唯待て！　それは……」

澪は止めようとしたが、すでに唯はオレンジジュースを飲んでいた。

遅かったか。

唯は缶を口から離して、

「このオレンジジュース美味しいねっ！」

「「うそっ！」」

ファミレス内
８人でテーブルを２つ使っているためちょっと周りから見られているのだが唯は決して気にかけない。それよりもパフェを食べてお腹が膨れた事に大満足をしていた。

「あー疲れたぁ」

パフェを食べ終わった唯は言った。

「へへっ。買っちった」

りっちゃんは買った物をポンポンと叩く。

「僕もだよ。色々買っちゃった」

下に置いてある４つの大きなビニール袋を見ながら、

「いや、薫は買い過ぎだろ」

「そうかな？」

鋭くツッコミを入れるりっちゃんだけどかおちゃんはわかってないみたい。

私も買い過ぎだと思う。

「曽我部くんそれは？」

ムギちゃんはしゅんくんに聞いた。

しゅんくんの持っている物が気になったようだ。

「運命を変える石だ」

「？」

ムギちゃんは首を傾げた。

唯も意味が分からず首を傾げる。

「とっ、富永……それは？」

「最初に入った服屋で買ったんだ」

「何を誇って言ってるんだ！　俺にも出させたクセに」

「いいじゃんかよ。ゲームセンターで埋め合わせはちゃんとしただろ」

「確かに感謝はしてるが……」

「って事で秋山にプレゼントだー」

「ええっ！」

こっちはこっちで仲良いなぁ。

見ながら唯は思う。

「次どこいこっか？」

みんなの顔を見ながら唯は言った。

その時、唯は何か引っかかった。

「あれ？　……何か忘れてない？」

何だっけ？

家の戸締まりはちゃんとしたし、携帯電話だってカバンに入れてあるし……本当に何だっけ？

「なんかまだ注文する気だったんじゃないのか？」

てーくんが言った。

首を振って唯は違う事を示す。

「忘れ物？」

れんくんが言った。

それも何か違う。

段々と唯の頭はモヤモヤしてきた。

一体何を忘れているのだろう？

澪ちゃんは肩を組みながら、

「楽器だ。楽器」

「あっ」

すっかり忘れてたぁーー！

第11話『すっかり』（後書き）

投稿遅れました

本当にすいません

場面展開としては

連太郎→律→連太郎→澪→唯

の順番ですがわかりましたかね？

2話もなんだかんだで膨らませていきそうです

アニメだと1分もない場面なのに過去最高の8ページになるとは…

……

感想まってまーす！

第12話『ないし……』

放課後の部室。

「「はぁ～」」

「どうしたの？　2人ともため息ついて」

「そりゃあため息もつきたくなるよ」

「そうだな。バンドするにしても雑誌を見ても一番必要なのが何なのか昨日それを思い知らされた感じだぜ」

「お金……だよね」

「「はぁ～」」

結論から話すと『お金』が足りな過ぎる。

先日女子軽音部と一緒に商店街を歩き回った後、楽器店に足を運

んだ。連太郎は前に一度訪れていたのでコレと言って見るものはなく、ただ値段だけに目がつき『高い』と言う事だけは再認識させられた。

「ポールリードスミス製のギター1本20万……高ぇな」

再認識させられたのは連太郎だけではなく輝彦もだった。雑誌などで事前に調べていた様子だが実際に現実を目の当たりにして愕然としたらしい。

「とりあえずどんな手を使ってでも手に入れないとな」

「盗みだけはするなよ」

「どういう意味だ！」

もちろん冗談だが輝彦はちょっと気に障ったのかムッと表情をつくり、そっぽを向く。

「部費でどうにかならないの？」

薫くんが言った。

「それは止めといたほうがいいかも。部費で買うと結局部活の物って事になるから」

と、いうかそもそも部が発足されたばかりで部費なんて無いに等しいんだけどね。

連太郎が返答すると薫くんは「そっか」と残念そうにつぶやく。

「だったら募金活動すっか？」

そっぽを向いていた輝彦がいきなり提案してきた。

「募金活動？」

連太郎は首を傾げる。

「そっ！　募金っていうか、厳密には融資って感じだ。金を出してもらって俺たちは楽器を買う。そしてもらった額に上乗せして後で返すんだ」

「考えはわかったけど上乗せして返すってどうするんだ？」

「そんなもんそこら辺で演奏して金貰えばいいじゃねぇか」

連太郎は次に言葉が出なかった。

すごくマトモな意見でとても輝彦の口から出たとは思えないからだ。

睨みをきかせる連太郎。

「なっ、なんだよ！？　俺、変な事言ったか？」

ちょっと怪しいが追求するのは面倒なので止めておこう。

「でもさ。それを実行したとしても融資してくれる人に心当たりはあるのか？　確かに１つの案としては良いかもしれないけど確実性に欠けるって言うか……。そもそも俺たちの目的は金じゃなくて楽器を買う事の筈だろ」

言い終えると輝彦はため息をつき、

「レン、お前なそういうやってもいないで否定的な意見を並べるのは止めたほうがいいぞ」

「別にそういう訳じゃ……」

連太郎は言いかけた口を止める。

別に否定したくて否定した訳じゃない。ただ確実性というか、それを実行する決定打がないからだ。現に述べた通り輝彦の意見は穴だらけである。

「まっ、いいけどな」

どうでもいいように輝彦は吐き捨てると、バックの中から雑誌を取り出してとあるページを開いて見せた。

「とにかくこんな格好いいバンドを作るには必要不可欠な事だ」

果たして俺たちがこの雑誌に載っているようなすごいバンドになるのかは置いておいて、本当にどうするか？

融資をしてもらうのもありだが、

「楽器を持ってる人に譲ってもらうのはどうだ？」

腕を組みながら連太郎は言った。

楽器を買うとなればそれ相応の費用が掛かるが、譲ってもらう事が出来ればタダで手に入れられる。

タダより良いものは無いのだ。

「却下！」

真っ先に否定する輝彦。

あれ？　却下されるような事じゃないと思うんだけど？

「タダより高いものは無い！」

「……」

確かにそうだな。

「それに潔癖症じゃないが、誰かが使ったお古なんて俺はまっぴら御免だ。やっぱり自分で買って自分で使って演奏しないとだんおん部を設立した意味がない！」

うぅ～。

輝彦に言われたら言われた分だけ正当に聞こえるな。俺もどっちかって言うと自分で新しいの買いたいしな。

「大丈夫。融資してくれるって奴には心当たりがある」

だけどコイツの意見をそのまま聞くと中学の頃の二の舞になりかねないんだよな～。口八丁手八丁なんて言葉があるが間違いなく輝彦はそれだ。

それを理解しているつもりなのに、

「わかったよ。その方法でいこう」

乗っかってしまおうとしてしまうのは何故なんだろうな？

すると輝彦はいつも通りの怪しい笑みを作り、

「決まりだな。よしっ！　早速行動するぞ！！」

天井に向かって手を振り上げた。

「おう！」

連太郎もそれに同調して手を上げる。

そこで連太郎は気づく。

薫くんがさっきから何も喋ってこない。

見ると薫くん「う～んう～ん」と唸りながら何か考え事をしているようだ。

「どうしたの？　薫くん」

「……」

「薫くん？」

もう一度声を掛けるとようやく薫くんは、

「あのさぁ。僕2人の話ずっと聞いてて思ったんだけど……」

「うん？」

「普通にバイトするのは駄目なの？」

「「あっ」」

同じ頃。
女子軽音部では求人誌を片手にそれぞれページを開いていた。
目的はもちろんバイトをする為である。
先日、ギターを買いにいったのだが唯の気に入った物が１５万円とかなりのお値段だった。５万円の費用しかない唯は当然買えなかった。
そこで女子軽音部は総出でバイトをする事になったのだ。

「う～ん……」

求人誌をピラピラとめくりながら澪は少し不安を感じていた。
バイトなんて始めてだし、どれをやっても失敗しそうで、嫌だなぁ。
澪は律、唯、ムギの順番で見る。
３人はすごくやる気だ。
頬に手をつき、はぁ～とため息をつく。
私に合ったバイトなんてあるのかな？

「ティッシュを配るのは？」

律の声が耳に届く。
ティッシュ配りか。
ちょっと想像してみる澪。

「む、無理」

渡すどころか声も掛けられないに決まってる。

「ファーストフードはどうですか？」

次にムギが提案する。
ファーストフード……。

「駄目……かも」

絶対に緊張して声が裏返ってしまう。
澪に不安が募る。
そんな様子に気づいたのか、

「そっか。澪にはハードル高いかもね」

律が言った。
そうなのだ。
怖い人が出てきたらと思うと玄関のベルが押せない、オーダーが聞きにいけない、レジに立つのだって……。

「ふぅう！？」

考えすぎて澪は倒れそうになる。

「みっ、澪さん!?」

瞬時に隣にいたムギが支えてくれた。

「ごっ、ごめんね。無理しなくていいから」

心配そうに唯は言った。

見ると悲しげな目をしている。

何をしてるんだ、私は。

やる前から無理だとか駄目だとかばかり言ってる。唯のギターを買う為なのに。それは女子軽音部の為でもあるのに。

乗り越えないと。

澪は決心して立ち上がる。

律たちは呆気にとられながら澪に注目する。

「私、何でもやるよ!」

自分を……乗り越えないと。

「あっ!」

「なっ、なに?」

律が突然言うのでびっくりして声が上擦る澪。

前言撤回やっぱり無理!?

「これなんてどう?」

律はみんなに見えるよう真ん中に求人誌の1ページを見せた。

「「「交通量調査？」」」

帰り道、連太郎は輝彦と一緒に帰っていた。

「バイトどうする？」

連太郎はそれとなく聞いた。

「どうするってやるに決まってるだろ」

輝彦はやる気満々のようだ。

「じゃあ問題は何のバイトにするか、だな。スタンダードにコンビニにするか？」

バイトと言えば真っ先に思いつくのはやっぱりコンビニだよな。

「バカ野郎。コンビニのバイトなんか最初の１ヶ月は３万くらいしか貰えないんだぞ」

「そうなのか？」

「ああ。それに1ヶ月も2ヶ月も時間を費やしてられねぇ。もたくさしてたらあっという間に桜高祭だ。だから短期間で稼げるバイトにしとかないと意味がない」

バイトという単語が出なかった割に詳しいな。輝彦のこういった知識はどこから集めてくるのやら。

「って事で行くぞ」

「どこにだよ？」

聞くと輝彦は憎らしい笑顔をつくり、

「ラーメン屋」

と言った。

ラーメン千曲川。

商店街の外れの人通りの少ない道に構えているラーメン屋の名前である。味はそこそこで下手にレストランで食べるラーメンよりかは美味しい。

そんな店の前に連太郎と輝彦は立っていた。

「よー、おっちゃーん」

輝彦が勢いよくラーメン千曲川の戸を開けると不機嫌そうなオヤジがこちらを見る。

「……来たか」

見た目からでもわかるような頑固そうな感じのオヤジの名前は千曲川伝助（くまがわでんすけ）。ラーメン千曲川の店主にしてこの地域界隈の子供からは恐れられている存在である。

「おっちゃん。俺は塩の大盛チャーシュー麺固めで」

「俺は醤油のネギ多めの麺固めでお願いします」

輝彦に続いて連太郎も頼む。
いつものように奥の席に座ると、

「で、なんでラーメン屋だ？」

連太郎は言った。
バイトの話をしていた筈なのに……そもそもここにくる理由がよく分からんのだが。

「いいじゃねえか、別に。それとも何かこの前みたいに唯が一緒の方が良かったか？」

この前と言うのは入学式の日の事である。輝彦、平沢さん、真鍋

さん、薫くんとでこの店に食べに来たのだ。
あの時は平沢さんとの初めての食事でドギマギしてあんまり覚えてないんだよなぁ。嬉しかったのは覚えてるけど。

「俺が聞きたいのはそういう事じゃなくてな……」

「出来たぞ」

連太郎の声を遮る形で千曲川のおっちゃんがラーメンを2人の前に置く。
2つとも注文通りに仕上がっている。
細かな注文が出来るのはこの店の良いところだ。

「後、これもやる」

千曲川のおっちゃんはさらに餃子をテーブルに置いた。
連太郎は少しびっくりした。
あの……頑固者のおっちゃんがサービスだと？
中学の時から来ているが一度たりともサービスをされた事がない。
しかも餃子は2皿。
つまり2人分もサービスしてくれたと言うことだ。
どういう事だ？

「サンキューおっちゃん」

だが輝彦は気にも止めず餃子に箸を伸ばし、口に運ぶ。
美味しそうに食べているところを見ると怪しいものは入っていないようだ。
俺の考えすぎか？

「レン。ぼっさとしてっとラーメン伸びるぞ」

輝彦に言われはっ、と気づく連太郎。

ヤバいヤバい輝彦との付き合いですっかり人を疑う癖がついたらしい。人の好意を素直に受け取れないなんてそれこそ最低だ。

「ズズーー」

勢いよく連太郎は麺をすすった。

「美味しかったー。ごちそうさまです」

食べ終わり連太郎は千曲川のおっちゃんに礼を言う。

「まったくだぜ。相変わらずの腕だな。千曲川のおっちゃん」

輝彦、お前はもう少し目上の人に対するマナーを学んでくれ！

このおっちゃん只でさえ怖いんだからさぁ！

「それで約束の事だが……」

睨みをきかせ千曲川のおっちゃんが言った。

「ああ。わかってるよ」

約束？

そういえばさっき千曲川のおっちゃん『……来たな』って言ってたっけ。輝彦がいきなりラーメン屋に行くって言った時は何で？と思ったがどうやら2人の間でなにか約束をしてたみたいだ。

そして連太郎は次の言葉に衝撃を受ける。

「約束通り今からレンがこの店で働くよ」

……はぁ？

「わかった。レン、ちょっと店の奥に行ってこい。そこに従業員用の着替えが用意してあるから」

「へぇー。わざわざ従業員用の制服作ったのか？　おっちゃん」

「元々あったものだ。それにバイトとは言え一応従業員に変わりないからな」

「そういうとこ義理堅いっすよね。おっちゃんは」

2人の会話をぼけーっと聞いていたが、もう我慢できない。

「ちょっ、ちょっと待ってよ！　どういう事、一体何がどうなってんの？」

状況がまったく読めない連太郎はパニックになった。
不意打ちをくらったかのような衝撃が強く平静を保てないのだ。
すると千曲川のおっちゃんは、

「お前をウチで働かせる事にした」

「……」

突然過ぎて言葉が出ない。

「俺が人手が足りないと最近話していたらさっき電話でお前を紹介されてな。採用する事にしたんだ。だからさっき普段ならしない餃子のサービスまでしたんだ」

あの餃子はそういう事か。
聞くと連太郎は輝彦へと視点を変えて、

「聞いてねぇよっ！！」

「だって言ってねぇもん」

なんなんだコイツのあっけらかんとした態度は！
怒りが俺の中で怒りが渦巻いている。
渾身の跳び膝蹴りをお見舞いしてやろうかっ！！
そんな連太郎の表情を知ってか知らずか輝彦は

「ニッ！」

いつも通りの笑みを作った。

あっ、あの野郎！
最初からこれが狙いかっ！！
と、ここで連太郎は思い出す。

「って餃子をサービスしたんなら輝彦だってここでバイトするんですよね？」

「いやアイツには紹介料って事でサービスしたんだ」

ノーーーー！

完璧に輝彦の手で踊っている！
ピエロだな、まるで。

「じゃっ、そういう事だから頑張れよーー」

笑みを湛えながら輝彦はラーメン千曲川を出て行った。

「はは……ははは」

渇いた笑いが口から出る。
さすが輝彦だ。バイトするとほんの1時間前に決めたというのにこうもあっさりとバイト先を見つけてしまうなんてな。やり方はとことん最低だが俺にバイトをあてがった点については正直感謝出来る。
だけど、

「さっそくだが皿洗いを頼むぞ」

俺が千曲川のおっちゃんを苦手なの知ってるだろ！

本当に最低野郎だよ、お前は……。

お金も払ってないし……。

第１２話『ないし……』（後書き）

なんとかゴールデンウイーク中に書けました。

と、言っても話は全然進んでないですけどね。

楽器店での事は長くなりそうなのでカットしました。
なので今回はバイト探しのお話でした。

今回は新キャラ千曲川のおっちゃんが出ましたが彼の登場は今回で終わりです。
設定も何もない只のラーメン屋の頑固オヤジってだけです。
輝彦にはめられる連太郎を書きたかっただけなので。

果たして連太郎たちは無事バイトを終えて楽器が買えるのか！？

男子と女子の交流をもっと増やしたいです。

第13話『がんばらないと』

土曜日
唯はとある公園の前で交通量調査のアルバイトをしていた。
初めてのバイト……頑張らないと。
唯は初めてのバイトということで少しばかり張り切っていた。
と、いうのも自分1人しか楽器を持っておらず、さらにはバイトを女子軽音部のみんなに手伝ってもらっているという自責の念によるものからなのだが、
「ふぁ～」
交通量調査を始めて、30分が経過し早くも欠伸が出た。
唯は車や人が通る度にカウンターを押すだけの簡単な作業のため飽きてきてしまった。腰掛けているパイプイスもバランスが悪く、動くとガタガタ、音をたてた。
ふと横を見る。
そこには淡々とカウンターを押すムギの姿があった。
交通量調査は2日間にわたって行われる。2人1組になって1時間毎に交代するという指示が出され、唯はムギと組んだのだ。

唯はムギを見る。
調査を始めてから表情が一切変わらない。
そのとき、実は無理をしているのではという考えが浮かび、唯は口を開いた。

「ムギちゃん疲れない？」

「大丈夫よ」

目線を道路に固定したままムギは答え、カウンターを押す。

「……指痛くない？」

やせ我慢という事も考えられるのでもう一度、今度は別な方向から攻めてみた。

「うん」

ちょうどその時通った車が通り、ムギはカウンターを押す。
以前目線は道路上だ。
本当に疲れてないのかな？

「……眠くない？」

最後の最後にもう一度聞いてみた。
カウンターを押すムギ。
瞬間、「あっ」と声を上げた。
どうしたんだろう？
ムギは目線を唯に合わせると、

「返事する代わりにカウンター押しちゃった」

申し訳ないように言った。

その表情を見ると唯の頬は緩んだ。

一日中座ってやる交通量調査にもお昼休みがある。そこで４人は公園でビニールシートを広げて休んでいた。

「そういえばレンてバイトしてるのか？」

昼食も食べ終わり落ち着いているとふと律が聞いてきた。

「うん。ラーメン屋さんで働いてるんだって」

唯は言った。

一昨日くらいに連太郎が言っていたのを思い出す。話によると輝彦に強引に押し付けられたとか。

「れんくんがどうしたの、りっちゃん？」

急に連太郎の話が出たので唯は不思議に思った。

「ああ。さっき岡持ちを持って走るレンが向かい側の道を通り過ぎたんだよ」

「岡持ち？」

「出前用のおけだよ。ほら、よくテレビのドラマとかで使われてるやつ」

わからない単語に首を捻っていると澪が説明してくれた。

ポンと両手を合わせ唯は納得した。

「レンくんなら私も見ましたよ」

すると食後のデザートらしきお菓子を並べながらムギも話に加わる。

「えっ、いつ？」

ムギの言葉に驚いた。

ずっと一緒にムギちゃんといたのに全然気づかなかったよぅ。

「私が返事の代わりにカウンターを押しちゃった時くらいです」

「えっ、あの時！？」

気づかなかった……。

「それにしてもラーメン屋でバイトなんてすごいな」

話を聞いた澪は深く関心していた。

「働いてるのはどこのラーメン屋なんだ？」

興味ありげに律は聞いた。

「ラーメン千曲川ってラーメン屋さんだよ。お店も確かこの近くにあるよ」

唯が答えると、「へぇ～」と律は笑みを浮かべ、

「じゃあさ。バイトが終わったらみんなで行ってみようぜ！」

「午後も頑張ろうね、澪ちゃん！」

「ああ。頑張ろうな」

調査が再開されると律が『午前中と同じじゃつまんないから、メンバー変えようよ』の言葉でメンバーを変える事にした。

唯は澪と組む事になった。

「澪ちゃん」

「なんだ、唯？」

調査中だが会話がないと退屈してしまうので唯は澪に話しかけた。
少しぐらいなら大丈夫よね。

「澪ちゃんてどうやってベース買ったの？」

話す内容はなんでも良かったのだが、せっかくなので楽器の話題をふれた。
澪は車が横切りのを確認し、カウンターを押すと、

「私は最初毎月のお小遣いを貯めて買おうかな、って考えてんだ」

「うんうん」

唯は興味津々に耳を傾ける。

「でも律に……」

『毎月のお小遣いなんか貯めてたら、楽器買う前に卒業しちゃうだろう！』

「て、言われたんだ」

その時の事を思い出しているのか、澪はしょんぼりした。
確かにその通りだ。

「ちなみに澪ちゃんの1ヶ月のお小遣いっていくらなの？」

澪は言いにくそうに体をそわそわさせると、

「……２５００円」

「わ、私のお小遣いの半分!?」

思わず唯は言った。

すると、

「やっぱり……少ないよな」

ど～ん、と澪は落ち込んだ。

「そ、そんな落ち込む事ないよ。私もお小遣いを５０００円にして貰ったのつい最近だし、大丈夫!」

言った直後唯は何が大丈夫なんだろう？　と疑問を持ったが気にしない事にした。

「あれ？　だったら澪ちゃんはどうやってベースを買ったの？」

聞くと、

「それは自分の口座からお金をおろしたんだよ」

「えっ、お金おろしたの？」

唯はびっくりした。

まさか口座からお金をおろすなんて、自分ではまったく考えになかったからだ。

「親に貸してもらう事も考えたんだけど……その……やっぱり迷惑かけるからさ。自分の事は自分でなんとかしよう、って思ったんだ。そしたら貯金をおろすしか考えがなくて……」

瞬間、澪は苦笑する。

どうやら恥ずかしかったらしい。

澪ちゃんすごいな～。

その後唯は終始、澪に関心していた。

「バイト楽しかったですね」

「ムギはすごいな。私は座りっぱなしで疲れたよ」

「本当か～？　澪は『座りっぱなし』で疲れたっていうより通行人たちの視線を気にして疲れたんじゃないのか？」

「そっ、そんな事ないぞ！？」

「そういえば澪ちゃん。通行人が通るたびに顔赤くしてたね」

「ゆっ、唯まで何を!?」

女子軽音部の皆は1日目の調査が終わり若干、開放的になっていた。

「なぁ、ところでレンの奴どんな反応すると思う？　私の予想だと絶対『うわぁ～あ!』とか言って驚くぞ」

「律、もしかしてラーメン屋に行くって言い出したのって、藤澤くんをからかうのが目的なんじゃあ……」

「あっ、バレた」

澪はため息をついた。

でもおそらくはそんな反応を示すだろうと全員が思った。

「唯ちゃん、あそこですか?」

ムギが言うと、目の前には『ラーメン千曲川』と書かれた店があった。

「うん。そこだよ」

唯は一度来た事があるのですぐにわかった。

「こんなところにあったんだな。ラーメン屋さん」

澪が言った。

ラーメン屋千曲川があるのは裏道だ。

そのため普段は地元の人くらいしかこないのだ……と輝彦が以前言っていたように唯は記憶している。

「よっしゃあ！　お腹ペコペコだしさっさと入ろうぜ」

律は言い、ガラッとラーメン千曲川の戸を開けた。

「いらっしゃいませ！」

すると目的の人がこちらに挨拶をしてきた。

「お好きな席へどうぞ」

続けて席に案内される。

「あれ？」

拍子抜けたような声を出したのは律だ。思ったより反応がなかったのでちょっとビックリしているようだ。

「残念だったな律。見たい反応が見れなくて」

澪は律の肩をポンポンと叩き、早々とテーブル席に座る。

それに続くようにムギが座り、残念そうな顔を浮かべて律も座った。

「……」

「何やってんだよ、唯？　早くー」

「あっ、ごめん」

遅れて唯も座った。

ついついれんくんの姿を追ってしまった。

「みんな何にする？　私、とんこつ」

壁に書かれているメニューを見ながら律は言った。

「私は塩かな」

続けて澪も言った。

「私は……あの汁無し麺というのを1つ」

「えっ、汁無しにするのか？　ムギ」

驚くように律は言った、

「はい。珍しいお名前なので」

汁無し麺というのはラーメンのスープの代わりに油が入っている料理で男性に人気の料理だ。だが反面女性には脂っこすぎて不人気なのだ。本来ならここは止めといたほうがいいと言ってやるべきだが、ムギは好奇心に目を輝かせているので誰も言おうとはしない。

「唯は何にする？」

「……」

「唯？」

「あっ、うん。私はしょうゆがいいかなぁ」

唯は連太郎から視点を外し、慌ててメニューを決める。

「どうかしたのか？　気分でも悪いのか？」

澪は唯の顔を覗き込みながら言った。

心配させちゃった！

「なんでもないよ。それより早く頼もうよ。注文お願いしまーす」

大丈夫、とアピールしながら唯は店員を呼んだ。

当然のことながら注文を聞きにきたのは連太郎である。

「はい、ご注文は……」

ボールペンを取り出したところで連太郎の唇が固まった。

ほんの数秒の時が流れると、

「って唯さぁーーーーん！」

「遅っ！　いまごろ！？」

澪がツッコミを入れる。

「しかも私たちもいるぞー」

頬を膨らませて、不満そうに律は言った。自分の予想していたリアクションが見れなかったのが原因みたいだ。

「全然気づかなかったよ。言ってくれればいいのに」

「いや、さっき普通に案内してたじゃんか。『いらっしゃいませ』って」

「あれっ？　そうだったけ？」

どうやら連太郎は物事に集中すると周りが見えなくなるみたいだ。そんな発見をしつつ、４人は注文をした。

「はい。かしこまりました」

聞き終えると連太郎は頭を下げる。

「おっ、さまになってるなー」

律が言った。

「本物みたいです」

「いや、全然駄目だよ。未だに口ごもるし、今は知ってる人だからなんとか緊張せずに出来てるんだ」

どうやら言ってる事は本当のようだ。

その証拠に足が小刻みに震えている。

「藤澤くんはバイトを始めてどのくらいなんだ？」

「今週の月曜日くらいから」

「なんでラーメン屋でバイトしてんだ？」

聞いた瞬間、連太郎は顔をしかめた。

だがすぐに表情を元に戻し「ふっ」、と笑い、

「輝彦に騙されて無理矢理バイトさせられてるんだ」

「「「……」」」

一瞬にして言葉を無くす女子軽音部の３人。

「あっ、そうだったんだ」

幼なじみの唯は輝彦ならそのような事をしてもおかしくないと思っているので特に気にしない。

「まっ、でもあいつにはある意味で感謝はしてるけどね」

「「「「？」」」」

４人は一斉に首を傾げた。

それがどういう意味か気になったが、その後すぐに「お勘定お願いします」と他のお客さんに呼ばれ、連太郎は席から離れた。

「大変そうですね。レンくん」

「そうだな。少なくとも私たちよりかは大変だろうな」

「大袈裟なリアクションを期待したのに……」

「律は結局そこなのな」

「……」

みんなが話してるなか、唯はずっと連太郎を見ていた。

第13話『がんばらないと』（後書き）

気づいたら最後の投稿から2ヶ月も経っていた！

実は何を書いていいか定まらず、スランプ状態だったです。
本当にすいません。
これからどうなっていくかわかりませんがよろしくお願いします。

ところで話は本編に変わりますが、今回は唯たちのバイトの話です。
唯視点で書いてるつもりですが最後は自分でも訳のわからない事になりました。

変なところがありましたらご指摘のほどお願いします。

第１４話『たのしかった』（前書き）

遅れた分を取り戻すため2日続けて投稿

第１４話『たのしかった』

「ゆい」

昨日のれんくん頑張ってたなぁ……。

「ゆい、聞いてるかー？」

それに比べて私は。

「おーい、ゆいってばー」

私は頑張れているのかなー？

「ゆいぃいいいいい！」

「わぁ！？」

急に耳元で声が聞こえ、唯は驚いた。さらにその瞬間ふわっと飛んだような感覚がくるとすぐに、頭を思いっきり打ちつけた。

「イタぁ！」

涙が出そうになるのをこらえてあたりを見る。
目の前には何故か空が広がっており、太陽がギラギラと眩ゆい光を発していた。

あれ？　私は一体何してたんだっけ？

事態が把握出来ない。

「大丈夫か、唯？」

すると空と唯の間に律が割って出てくる。

「立てるか？」

唯は律に差し伸べられた手を持つとゆっくり立ち上がる。
どうやら驚いたときに椅子に座ったまま後ろに倒れ込んだようだ。

「どうしたんだよ？　ぼっ～として」

心配して律は唯の顔を覗き込んだ。

「りっちゃん、私何してたんだっけ？」

唯は言った。

「本当に大丈夫かよ、唯？　私たちはギター買うためにバイトしてる最中だろ」

「あっ」

そうか、今日は交通量調査のバイトの2日目だ。
今は律と一緒に調査をしている最中だったんだ。

「？　なんかよくわかんないけど、具合が悪いようなら澪かムギに代わってもらうか？」

律は後方で休んでいる澪とムギに目を向ける。

「だっ、大丈夫だよ。私はすっごく元気だから」

「……ならいいけど。何かあったらすぐに言えよな」

「大丈夫だよぅ」

唯はそう言うと倒れたパイプイスを立て直し、静かに腰を落とす。
少しグラグラするが気をつけていれば倒れる事はなさそうだ。
それを見ると律も続けて横のイスに座る。
引き続き調査の再開だが、やはり心のどこかによくわからないとっかかりみたいなのを感じる。
チラリと律を見る。
思い出されるのは昨日の澪との会話。
りっちゃんは一体……。

「は、私がどうやって楽器を手に入れたかって？」

「うん」

このとっかかりを解消出来るかわからないが、昨日澪にも聞いた事と同じ内容を律にも聞いてみた。

「私はほら……あれだよ」

あれと言われても唯はなんの事だかわからない。

少し言いにくそうに、

「私は親からお金を借りたんだよ」

律はカチッと調査用のカウンターを押し、

「それでも足りなくてさー。お店の人に値段をまけてようやく今のドラムを買ったんだよ」

イヒヒ、と律は苦笑いする。

「……」

「でも、どうしてもお金が関わってくるからさ。ちょ～っと親と喧嘩しちゃったりして色々大変だったんだー」

「……」

りっちゃん……。

「だからあのドラムには余計に愛着がわくんだ」

「へ、へぇー」

「唯もきっとギター買ったら愛着がわくよ」

……本当にそうなるのかな。

「2日間お疲れさま」

「「「「お世話になりました」」」」

交通量調査のバイトが終わり、係の人に4人は軽く頭を下げる。
1人に1つずつバイト代の入った封筒を渡される。
「では」と係の人が立ち去ると、

「終わったーー！」

律は思いっきり伸びをした。
やはり彼女には1日中座ってるのは酷だったようだ。

「さすがに疲れたな」

隣で澪も一緒に伸びをする。
2人を見ながらムギは笑顔を浮かべている。

「よし、行くか」

自然と律が一歩を踏み出し、それに続くように3人は歩いた。
時刻は5時を過ぎ、夕日がもう落ちようとしている。
歩きながら、

「この後はどうする？　またレンが働いてるラーメン屋に行くか？」

「ごめんなさい。私、今日はこの後用事があって……」

「私もパス。第一明日学校だし」

ムギと澪は揃って首を横に振る。
がっくりと律は肩を落とす。
「あははははは」とその姿に2人は笑うが唯は笑うどころか口をつぐみ続けている。
耳に3人の声が入ってこない。
それは頭にあるとっかかりがまだ唯の頭の中に残っているためだ。
これは一体何なんだろうか？

「……」

「唯」

「……」

「唯ってば！」

「ほぇ？」

名前を呼ばれ我にかえると澪と律、ムギが唯に視線を向けている。

「な、何？」

わ、私なんか変な事しちゃったかな？

「いや私たちバスだからさ」

見るとここはバス停の前だ。

気づかなかった。

「私も電車なので」

唯以外の3人はそれぞれここまでの交通量経路が違う。

澪と律はバスで、ムギは電車で来ていた。

「後、忘れないうちに」

澪がバイト代の入った封筒をバッグから取り出し、唯に渡す。

律もムギも同じように封筒を渡す。

「……」

唯は無言で受け取る。

みんなのバイト代……。

「1日8千円か……」

律がつぶやく。

「お母さんに前借りした5万円と合わせてもまだ全然足りないわね」

ムギの言うとおりこれだけでは足りない。唯の欲しいギターは１５万円。みんなからもらったお金を合わせても合計は１１万４千円。少なくとも後、４万円は足りない計算になる。

「……」

本当にこれでいいのかな？

唯の中で疑問が浮かぶ。

本当に……これで……。

「あと何回かバイトするか？」

「そうですね」

「うし。じゃあまた探そっか？」

みんなにも色々やりたい事もあるはずなのにわざわざ……私のために。

そこまで考えてくれるなんて……。

唯は渡された封筒を見る。

これには2日間みんな頑張ったものがいっぱい詰まってる。

だったらこれを本当に使うべきは……、

「やっぱりこれいいよ」

私じゃない。

「「「え？」」」

3人は不意打ちをくらったかのような声をあげた。

「バイト代はみんな自分のために使って」

唯は封筒をそれぞれに返す。

「唯ちゃん……」

「急にどうしたんだよ？」

「そうだぞ。何のためにこの2日間……」

「わかってるよ。みんなが私のために頑張ってくれたのはわかってる」

2日間の澪、律、ムギの3人の姿が浮かぶ。

「でもね。昨日れんくんが働いてるところ見て思ったんだ。頑張ってるんだなぁ、って。それに比べて私は頑張ってるのかなぁって」

「「「……」」」

「澪ちゃんやりっちゃんの話を聞いた時も私はすごいと思ったんだ。2人にはさ。自分の考えがあって、自分の力だけで楽器を買って」

「それは……別に」

「私、昔から誰かに頼ったりしちゃうところあるから。多分みんなに甘えてたんだと思うんだよね」

「そ、そんなこと……」

「別に私たちは気にしません」

「そうだぞ、唯！」

みんな優しいな……。

「だからね。私、自分で買えるギターを買うよ」

そっちのほうがきっと愛着も……。

「いいのか？」

澪は封筒を見て言った。

「うん。それに1日でも早く練習してみんなと一緒に演奏したいもん」

だから、

「また楽器店さんに付き合ってもらってもいい？」

澪、律、ムギの3人は顔を見合わせ、

「「「うん」」」

と、答えた。

唯はみんなと別れ1人歩いていると、

「よー！　唯」

後ろから声が聞こえて、首をくるりと方向転換させる。

「あっ、てーくん」

自転車に乗った輝彦がこちらに手を振っている。

唯は反射的に手を振り返す。

キィー、と鈍いブレーキ音を立てて自転車は唯の横に止まる。

「てーくんも帰り？」

「おおよ。ちょうどバイトが終わってな」

「えっ、てーくんバイトしてたの？」

初耳だ。

「まぁな。話は歩きながらにしようぜ」

言うと輝彦は自転車から降りる。

唯の歩くと同時に輝彦は自転車を押した。

輝彦は今週の月曜日から今日まで商店街でバイトをしていたそうだ。

「肉屋で働いたり、魚屋で働いたり、八百屋で働いたりと色々大変だったぜ」

どうやらいくつもバイトを掛け持ちしていたみたいだ。

証拠に輝彦からは何やらよくわからない匂いが感じとれた。

「それより唯は何してたんだ？」

「私？」

次は唯が交通量調査のバイトの説明をした。

「へぇー、だったら大変だったんじゃないか？　1日ずっと座りっ

ぱなしで」

「そんなことないよ。みんないたし」

ふっ、と輝彦は笑うと

「で、どうだったんだ？」

「何が？」

「初めてのバイトは楽しかったか？」

そんなの答えは決まってる。

「うん。すっごく楽しかったよ！」

笑顔で唯は言った。

「そうか。良かったじゃねぇか」

第１４話『たのしかった』（後書き）

今回は唯の成長？　をテーマにしたくて書いたんですがどうだったでしょうか……。

正直出来はあまりよくありませんね
一応伏線を入れたりしたのですが……。

最後に輝彦を登場させたのには特に理由はありません。
なんか長らく時間が空いていたせいでどうにも『だんおん』の奴らの設定が曖昧になっちゃてから、という事で書いただけです。

感想待ってます！

第15話『もうひとこえ』（前書き）

まだまだ終わらない

第15話『もうひとこえ』

「ふぅ～あ～」

学校へ向かう途中に連太郎は欠伸をした。
同時に目に涙がたまり、視界がぼやけたのですぐに拭うと、ビキィと肩に衝撃が走る。

「っ！」

まるで直接電撃を流し込まれたような感覚は、やはりというか筋肉痛だった。
少し動かしただけで肩や腕、足は悲鳴をあげている。
月曜日から日曜日にかけてラーメン屋でバイトをしていたのが原因なのは確実だ。
平日は学校が終わった後すぐに、休日は朝から1日中働いたからなぁ。
思い出しながら遠くを見る。
だがそれなりの成果はあった。
ポケットから財布を取り出し中身を覗く。

「1、2、3、4、5……」

1週間働いて占めて5万円の稼ぎになった。
ついつい嬉しくなって笑みがこぼれる。
多分これは働いた者のみにしかわからない高揚感だろう。

「ふふふふふふ」

「……気持ち悪いぞ」

「どわぁ!?」

心臓がドキンと跳ね上がった。
振り返ると曽我部舜が冷ややかな目でこちらを見ていた。

「……俺、今気持ち悪かった?」

連太郎が言うと、コクンと舜は首を立てに振り、

「正直、気持ち悪かった」

うっ!
グサリと何かを突き立てられたような感覚が連太郎を襲う。
数秒前の自分に止めろと警告したい。

「言い訳を……してもいいかな?」

「ご自由に」

冷めたような口調で許可を貰うと、ニヤニヤしていた理由を話し

た。
話をしている最中にうすらと曽我部くんの口元が笑っていたように見えたが確認もしようがないのですぐにそれは頭の隅へと追いやった。
話を聞き終えた舜は、
「だから1週間ずっと部室にいなかったのか？」
と言った。
「もしかして曽我部くん。先週は部室に来たの？」
舜の口振りから気になって連太郎は聞いた。
「うるさい奴がいなかったからな」
なるほど。
『うるさい奴』というのが誰なのか連太郎はすぐに理解する。
曽我部くんは潔癖症なだけではなく、うるさいのも嫌いのようだ。
つくづく輝彦とは相性が悪いな。
「おっはよー！」
そして何でこうタイミングを見計らったように登場するんだ、コイツは。
「どうした、2人共？　あっ、もしかして俺がカッコイいから見とれたなー」
そんなわけあるかっ！

輝彦の軽口に連太郎は心の中でツッコミを入れた。
舜はやはりというか輝彦を見た瞬間にわかりやすく顔をしかめている。

「まったく1週間働き詰めで疲れたぜ」

輝彦は肩をさすってほぐしているが、表面上は全然疲れているように見えない。
輝彦は色々と伝手があり、連太郎が働いているのと同じ期間内でいくつかのバイトを兼任していたらしい。
よくもまぁそんなにやったもんだ。
関心してしまう。

「で、いくらになったんだ?」

どうせバイト期間は同じなわけだし大した金額の差なんかないだろう、と思い連太郎は聞いた。
輝彦は得意気な顔で、

「15万」

「じゅっ!?」

驚いて連太郎は目を大きく開けた。

「なっ、なんで、そんなに……」

動揺しながら聞いた。
同じ1週間働いたのに倍以上も違うなんてありえるか?
絶対に何か裏があるはずだ。

輝彦はその問いを待ってました、というように得意気に、

「お前とは仕事の質が違うってことよ。どうせ皿洗いや出前をやっただけなんだろ？」

「ぐっ……」

反論出来ずに連太郎は口を歪ませる。

「その点、俺はいろんなバイトやったからな。肉屋に魚屋、八百屋なんかの店や朝の新聞配り、深夜にはスナックやバーなんかで……」

「……」

「……」

沈黙が生まれた。

２人の注がれる視線に輝彦はしまった、と思ったのか手を頭に置き急に、

「いやー。今日はすがすがしい日だな。太陽が眩しいぜ」

「……」

「……」

クラウチングスタートの姿勢をつくり、

「こういう日はなんだか体を動かしたくなるよな。よしっ！　ここ

から学校までジョギングでもして爽やかな汗をかくぞー！」

「いい加減にしろやー！」

「おおっ！？」

構えていた輝彦に連太郎は回し蹴りを決めようとした所、いつもの如く避けられた。「見事なフォームだな」と舜がつぶやいていたが今は気にしている時ではない。

「お前今スナックって言ったよな？」

襟首を掴み連太郎は問いただした。

「えっ……なんのことかな……」

「言っただろ！　しかもバーとかって、輝彦、お前なんか変なバイトでも……」

「違う違う。俺が言ったのは……そう！　俺が言ったのはスナップだよ、スナップ」

「スナップ？」

「そうそう。スナップ写真て言うだろ。カメラを持って町中を撮りまくったのさ」

「百歩譲ってそうだとして、じゃあバーってのは何なんだ？」

「……」

「目を逸らすな！」

「細かいこと気にすんなよ。世の中にはお前が知らなくていい事がたくさんあるんだ」

「何を格好つけて言ってんだ！」

もしかしたら犯罪になるかもしれないんだぞ！

「ちょ、ちょっとストーップ！」

すると薫が割って入ってきた。走ったのか息切れをしていた。薫は輝彦を守るように体勢をつくり、

「レン、いじめは駄目だよ！」

連太郎を睨めつけた。

「えっ、いや薫くん違うんだよ」

急に現れた薫にビックリしながら、すぐに訂正しようとすると、

「そうなんだよ～薫。レンの野郎が俺をいじめてくるんだよ～」

輝彦が甘えるような口調で言った。

気持ち悪っ！

嘘臭いんだよ、このアホが！

「大丈夫、テル」

と、薫は信じたようでキッ、と睨みをきかせた。
このままではマズい。
あらゆる闘いにおいて数は重要だ。
数が多ければ多いほど闘いは有利になり、勝率も自然と上がる。
それが例えこんなくだらない事でもだ。
本当の事を言えば薫がこちら側についてくれそうだが今、彼は輝彦を信じているのでそれは無理だ。
だったら、

「曽我部くん、君からも何とか言ってくれないか？」
こちらも数を増やし、せめて五分五分に持ち込む。

「どこに曽我部くんがいるの？」

「うん？」

見ると先程までいた舜の姿がいない。
ど、どこ行ったんだ

「あっ、あそこ」

薫が言うと走っている舜が見えた。

「何急いでんだ、曽我部は？」

全員首を傾げていると、

「あっ！？　もうホームルームの時間まで5分しかないよ！？」

「なにー!?　だから曽我部の野郎、先に走って行きやがったのかっ！　待ちやがれーー!!」

「っていきなり1人で走んなよ、輝彦!?」

「ちょ、待ってよ!?　2人ともーー!!」

「この世は弱肉強食。待ってなどやるものかー!」

「だったらお前は遅れて行け!」

「!?　危ねぇ。ギリギリだったぞ、今の!」

「チッ」

「走りながら蹴るのは危ないよ、レン!」

後ろからの声を聞きながら、

「本当にあの2人は騒がしいな」

舜は静かにつぶやいた。

放課後、男子軽音部は楽器店にへと足を運んだ。もちろん言い出したのは輝彦。自分用の楽器を買うのが目的だ。１５万円という大金を携え、意気揚々としていた輝彦だが、

「う～ん」

ギターを前にした途端にその場で立ち尽くして悩んでいた。

「足りるんだからさっさとレジに持ってけよ」

呆れた口調で連太郎は言った。
もうすでに３０分は経っているというのに一向にレジに持っていく様子はない。

「さっきまではこのギターにしようと思ってたんだけどな」

と、輝彦はギターを指す。
ギターは明るい緑色を基調とされたスタンダードタイプだ。

「だけどこっちのもいいような気がするんだよな」

輝彦は隣に置かれているギターを手にとる。
ギター選びはかなり重要だ。
選ぶ基準として色、形、材質、弾きやすさ、ネックの形状、反り、

弦高がある。
だが恐らく、
「こっちのもいいよなー。あっ、こっちのは女子にうけそうだな」
輝彦はそんな事お構いなしに決めるんだろうな。
もうほっとこう、と連太郎は輝彦から離れた。

同じ頃、女子軽音部も楽器店に来ていた。
う〜んと唯は目を凝らせて色とりどりのギターを見ていく。
だがその視点はギター本体よりも横に貼られた値札な方にいっていた。昨日の事で意識的に敏感になっているようだ。
「唯、やっぱり悩んでるな？」
「そうですね。昨日のバイト代、本当に私たちが貰ってしまって良かったのかしら」
その様子を心配して見ていた律と紬は言った。
対象的に澪は心配していなかった。
実の所、昨日から澪は関心していた。
あの時『やっぱりこれいいよ』と言いバイト代を返された時は本

当に驚いた。
これではなんのためにバイトをしたかわからない。
だがそれは唯にもわかっていて、わかっていながらそう言ったのだ。
ある意味すごいわがままだ。
私だったらそんな事も考えず普通に感謝して受け取っているだろう。
ゆえに澪は心配していない。
心配するという事は唯の決意を無駄にする事だと思うから。

「4万9千8百円か……見たところ形も……ネックの感じもいいな。唯、これはどうだ？」

澪はギターを手に取った。

「「「？」」」

唯の返事がないのが気になり3人は振り返ると、

「……」

唯はとあるギターの前で足を止めていた。
そのギターは1週間前に楽器店に訪れたとき唯が一目惚れしたものだ。
元々バイトはこのギターを買うためにやったのだ。

「……あっ、ごめん」

こちらに気づいて唯は謝る。

無理しているのがすぐにわかった。

「よっぽど欲しいんだな」

本当に物欲しそうな顔をしている。

澪はその姿に自分がドラムを買ったときを重ねる。

あの時は本当に欲しくて、親に頼んで通帳からお金を出して、何度も何度も楽器を見に来たっけ……。

澪は笑みをこぼす。

「うっしゃあ。やっぱまたバイトを」

律が言った。

しまった！

このままだと唯の決意が。

「おい、律。昨日の事、もう忘れたのかよ」

澪は耳打ちした。

「昨日の事？」

まるで律には覚えがないようである。

「唯は私たちの力も借りずにギターを買おうとしてるんだぞ」

「あっ、そうか」

本当に忘れていたようだ。

「でしたら」

すると紬が何かを思いついたように、

「ちょっと待ってて」

と言い歩いていった。

その姿を追いかけるとどうやらレジに用があるようだ。

店員に声をかけている。

「ムギちゃん、何やってるんだろう？」

唯が首を傾げた。

澪も紬が何をしているか見当がつかない。

話がついたのか紬が戻ってきた。

「このギター、５万円で売ってくれるって」

「えー！？」

「マジで！？」

「何！　何やったの！？」

驚いている澪、律、唯に対し紬は、

「実はここ店、家のの系列のお店で」

「「「えっ！？」」」

またも3人は驚いた。

紬がお嬢様である事を再認識する。

「そ、そうなんだ」

唯も気が抜けたようにさっきまで張り詰めていた顔が緩んだ。

「ムギちゃんありがとう」

「でも唯、他人の力を借りないんじゃ……」

澪が言うと、

「ちょっ、ちょっとくらいいいよね」

「おいおい……」

昨日の決意はどこへ行ったのか、結局いつも通りの唯。

せっかく関心していたのに。

「残りは必ず返すよ！　何十年経っても！？」

「おい！　さすがにかかり過ぎだろ！！」

でもこれはこれで唯らしいと密かに思う澪だった。

一方、連太郎はエレキベースのコーナーにいた。

「これ形も色も良いなー」

ベースを手にとった。

ギターに固執しすぎて忘れていたが、ベースもバンド楽器の１つだ。

何故今まで忘れていたのだろう？

もしかしたらこっちの方が安かったりするかもしれないのに。

別にギターを弾きたいわけじゃないしベースでもいいや。

ひょい、と値段を見る。

「こっ、これは……」

瞬間、連太郎は驚愕した。

率直に言おう。

「ギターよりも高いじゃないかー！」

思わず大きな声を発した。

高い、高すぎる！

標準のギターより３０％ほど割り増しって。

「第一どこが違うんだ？」

大きさは若干……ベースの方が大きい気がするが。
連太郎は深くため息をついた。
色合いも形もギターより好みのが多いのにな。

「これとか」

だが連太郎が手に取ったベースは２０万円。
まるで手が出ない。

「やっぱりレンくん」

不意に自分の名を呼ばれ顔を上げると、
「琴吹さん」
琴吹紬がいた。

「どうしたの、こんなところで？」

「唯ちゃんのギターを買いに来たんです」

紬の話だと唯の楽器を買いに女子軽音部の全員で楽器店に来たらしい。
そういえば学校でも唯から聞いたような気がする。

「平沢さんはギターを買えたの？」

「はい。さっき、ギターをレジに持っていきました」

紬は手をぎゅっと握り拳をつくり、

「私、上手くやれたんです！」

やり遂げたような顔をした。

「そ、そうなんだ……」

連太郎はだじろいだ。

そのキラキラした目と勢いについ押されてしまったのだ。

「藤澤くんはどうしたんですか？　大声が聞こえましたが」

「えっ、俺大声出してました？」

「はい」

またやってしまった。

連太郎は頭をかかえた。

このどこでも大声をあげる癖はなんとかしないとな。

つまり紬は急に聞こえた連太郎の声に気づいて心配してきたのだ。

「何があったんですか？」

「えっと、実は」

連太郎はちょっと迷ったが紬が心配しているようなので安心させるためにもため息の理由を話した。

すると、

「私がどうにかしましょうか？」

「へっ？」

思いがけない言葉に連太郎は固まった。

例えると親に借りてきて貰ったＤＶＤがまったく別のものだったりした時のような感覚だ。

まさに予想外。

「えっ、どういう事？　どうにかするって俺の代わりにお金を払うってこと。だったら遠慮するよ」

いくら何でも他人にお金を出させる訳にはいかない。

しかも『女子』に。

小さい事かもしれないが連太郎には結構重要だったりする。

「違いますよ」

慌てる連太郎とは逆に紬は笑顔で、

「もう一声するんです」

第１５話『もうひとこえ』（後書き）

今回はギターを買ったんだか買わなかったんだかで終わりました。
というか設定を間違えてたりして、色々修正を加えた話でした。
特に連太郎のベースの下りとかベースの下りとか。

何を間違えたか連太郎もギターを使うようになるところでした。
連太郎は私の設定では主人公ようで主人公じゃない奴なのでギターとかやられると困るのです。
あとあとの設定に差し支えるし。
ちなみにそれぞれ男子たちの楽器にも意味があります。
連太郎がベースなのも
輝彦がギターなのも
薫がキーボードなのも
舜がドラムなのも全てです。
でも考えすぎてワケわかんなくなってるのが現状です。

誤字、脱字などがあったら教えてください。

第16話『しどう！』（前書き）

やっと原作アニメの2話が終わったーーー！

泣きそう……。

次はテストの話ですね。
これは絶対すぐに終わらせて早急に海に行ってもらわないと。

今回は後書きも見てください。
エピローグ的なものを書いたので。

第16話『しどう！』

「ジャジャジャジャーン、ジャジャジャジャーン！」

「……」

「ジャジャジャジャ

輝彦は笑いながらくるっと回った。
その肩から下がっているのは一本の青いギターだ。
ポールリードスミスというメーカーのもので、輝彦調べによると多くの有名ギタリストが愛用しているらしい。

「ノリノリだね、テル」

連太郎向かい側に座る薫はパチパチと輝彦に拍手を送る。

「うるさいだけだ」

その横では舜は睨みを利かせて輝彦を見ていた。

「へっへー」

俺のものですと言わんばかりにギターを見せる輝彦に対し連太郎はため息をついた。
輝彦のギターはバイトして稼いだ額には届かない３０万円。
だが今、輝彦の手元にある。
それは他でもない琴吹紬のおかげなのだ。
実はあの楽器店は紬の父が経営しているお店の１つだったのだ。
聞いた時はもちろん驚いたし戸惑った。
まさか本当のお嬢様だったとは。
そして紬が頼むと店員は楽器を安くしてくれたのだ。
まぁあれは頼むというより権力を使った脅しのような気がするが……。

「レンもそのベースで一緒に弾こうぜ」

輝彦が言った。
連太郎は自分の足下に置かれているケースを見る。
持ち上げて机の上に置く。
これも紬に安くして貰ったベースだ。

「……」

複雑な気持ちながら連太郎はケースを開く。そこには白を基調としたベースが収められていた。

「持ってみてよ、レン」

顔に急かされ連太郎は肩に掛けてみる。

「意外と様になってんじゃん」

「色が白なのもレンに似合ってるね」

「いいんじゃないか」

まじまじと3人に見られて連太郎は頬をかく。
ちょっと恥ずかしい。

「そういえば」

連太郎は気づいた。

「曽我部くん楽器はどうするの？」

確かまだ曽我部舜は楽器を持ってない筈だ。

「まだ見てないのか？」

舜が言うと連太郎は首を傾げる。
何の事だかさっぱりわからない。
くいっと舜が顔を動かすのを追うと、

「ドッ、ドラムがある！」

奥にドラムがあった。
連太郎は身を乗り出してドラムを近くまで見に行く。

「これどうしたの？」

「知り合いからタダで貰って、お前たち2人がいない間に運んだ」

「僕も手伝ったんだよ」

と、いうことは

「バンドが組める……」

「そういうこった。まっ、結果オーライって奴だな」

輝彦に肩を叩かれると連太郎は力が抜けて床にへたりついた。

「どっ、どうしたの、レン？」

心配して薫が言った。

「なんだかやっと軽音部が始まると思ったら……安心しちゃって」

その発言に輝彦は、

「相変わらずバカだな、お前は。これからなんだぜ！　俺たちが頑張るのは」

「わかってるよ」

充分にな。

「て、事でいきなりだが俺たちの目標を発表しようと思う！」

「目標だと？」

「そうだ曽我部！　何事にも目標があったほうがいいからな！」

ニヤリと嫌な笑みを浮かべて輝彦は天上に向かって手をかざし叫ぶ。

「目標は武道館ライブだーー！！」

「えーーっ！」

薫は声をあげ、

「アホだな」

舜は呆れるような口調で言った。

「武道館ライブって正気か、輝彦？」

連太郎も驚いて聞いた。

「正気でいたらこんな事言わねぇよ。それに目標は高いほうが燃える！！」

「無茶だと思うけどな」

「無茶でも何でもやってやるっ！」

輝彦は本当にどこまで本気なんだ。

熱意だけは伝わるのだが、いかんせん現実味がないのが傷だ。

「律の野郎に負けてたまるかーっ！」

あっ、そっちが本音か。

「そうだ。みんなで記念に写真でも撮らない？　軽音部始動ってことで、さ。今、デジカメ持ってるんだ」

言いながら薫はポケットからデジカメを出した。

「おっ、いいな。撮ろうぜ」

輝彦は即決。

もちろん連太郎も断る理由はないので縦に首を振る。

だが、

「俺は写真が嫌いだから、いい」

一人空気の読めない舜。

「入らないの、舜？」

準備していた薫が悲しそうに言った。

「みんなの輪を乱すような事言うんじゃね。さっさと入れ」

舜は輝彦が腕で首をつかみ逃げられないようにヘッドロックを掛けてカメラの写る位置に連れてくる。

連太郎はその隣に入る。

「じゃあいくよ」

薫はカメラのタイマーをセットし、輝彦の隣へと入った。

「タイマーは何秒後？」

連太郎は聞いた。

「後１０秒くらいだから、すぐだよ」

だったらもうシャッターが切られるな。

しばらく待ち構えていると、

「もう少しこっちに入れ、レン」

輝彦が言った。

連太郎も舜のように首を掴まれる。

「ぐわぁ、な、なにしやがる！？」

「いいからいいから」

「よくねぇー。離しやがれ」

じたばたと動く連太郎。

「こっちも離せ」

反対の腕に掴まれる舜も動いた。

「3人ともそんなに暴れたら……ってああ！」

「おい、薫！　急に寄っかかるなよ！」

「ちょっと待て。このままだと倒れるぞ！」

「「「「うわぁあああ！！」」」」

パシャ！？

「フン！」

女子軽音部の部室で唯はみんなの前でギターを持ってみた。
ずっしりとした重さ、ネックの太さ、色、形も彼女には不似合いかと思ったが意外にも様になっている。
みんなは拍手を送った。

「えへへー」

唯は照れて頬を赤く染める。

「なんか弾いてみてっ！」

律は言った。
唯は少し悩んだが昨日練習したばかりの曲を披露しようと指を手にかける。
弦を左手で抑え、ピックで丁寧に弾いた。

「ちゃ、チャルめら？」

がっくしと肩を落とす澪と律。
いやー、と唯は頭を掻きながら、

「ギターってキラキラピカピカしてるから、なんか触るのが怖くて」

「あっー、わかるわかる」

澪は唯の言葉に賛同する。

「鏡の前でポーズとったり、写真とったり、添い寝したりはしたんだけど」

「弾けよ」

当然のツッコミを入れる律。

「そういやギターのフィルムも外してないもんね」

澪が指摘する。

見るとギターのフィルムカバーがついたままだ。

するとそれが気になったのか律は手を伸ばし、

「そいやーっと！」

一気に剥がした。

「あっ……あ……あ、うん……」

唯は突然の事でショックを受けた。

わかりやすく表情にまでそれが出ていた。

「ごめん！　ほんの出来心だったんだ。ごめんね、唯ちゃん」

さすがにマズいと思ったのか頭を下げる律。
私の、私の大切なギターが……。
だがすでに唯の目には涙が現れる。

「唯ちゃんお菓子お菓子」

紬は唯にお菓子を差し出す。

「ムギ、そんなもので機嫌が……」

澪は唯を見ると

「治ったー！」

既に治っていた。
むぎちゃんのとこのお菓子はすごく美味しいなー。
それにフィルムが取れて気づいた。

「そうだよね。ギターってやっぱり弾くものだよね。ただ大事にしてるだけじゃ、可哀想だよね」

唯は律の手をとる。

「ありがとうりっちゃん！　私、やる気出てきた！」

「そうかっ！　唯が練習するきっかけになればと思ったんだ。さっすかわた……」

「せいっ！」

調子に乗り始めた律のわき腹に澪は肘をぶつけた。
急所に当たったようで律はその場で座りこむ。

「じゃあ練習するか」

澪は言った。
そこで唯は昨日から疑問に思っていた事を言った。

「ライブみたいな音を出すにはどうしたらいいのかな?」

「アンプに繋いだら出るよ」

アンプ?
澪は床に無造作に置かれたコードを手にとって見せる。

「これをギターに繋いでみて」

言われたとおりギターに繋ぐ。

「ほら、律。そんな所でうずくまってないでアンプにコード繋いでくれ」

「誰のせいだよ、誰の」

律は渋々、コードをアンプに繋いだ。
適度な音量に調節し、「よしっ」と親指をたてた。
OKの合図だろう。
深呼吸しギターに手をかける。
ピックを持ち、鳴らす。

《ブゥゥウウウウウン！！》

部室内に音が響いた。
瞬間、唯は息をするのを忘れた。
この音に、響きに魅入ってしまったのだ。
これは澪、律、紬が最初に聞かせてくれた『翼をください』の時と同じだ。
ドキドキが止まらない。
体が妙に熱くなる。

「かっこいい……」

言葉を絞りだせた。
今の響きに何かを感じたのか、

「やっとスタートだな」

澪、

「私たちの軽音部」

律、

「ええ」

紬は言った。
始まるまで長かった。
でもついに始まる、桜が丘高校女子軽音部が。

「夢は武道館ライブっ！！」

「「「えーっ！」」」

律のいきなりの目標宣言に一同は驚く。

「卒業までにっ！！」

「「えーっ！」」

澪と紬が驚く。

「ついでにテル達も倒すぞー！」

「本音はそっちかい」

澪はツッコミを入れる。

武道館ライブか……。

唯はギターに手をかけアンプに繋いだ状態のチャルめらを弾いた。

「「「ああっ……」」」

聞くと3人は肩を落とす。

やっぱりダメか……。

「ごめん。まだこれしか弾けない……」

自分の実力のなさが申し訳ない。

でも練習していけばなんとかなるよね。

アンプで音をならすのも、

「もう少ししてからだね」

とアンプについているコードを抜こうと手にかける。

「あっ、危ない!?」

「え?」

澪が叫ぶが、一歩遅く唯はコードを抜いた。

「っ!?」

突然、唯の耳に音が響いた。

それは黒板を爪で引っ掻いた音に近く、何倍も強力な音。

なっ、なに、今の?

「アンプのボリューム下げる前にコード抜くとそういう音が出るんだよぅ」

「そっ、それを早く言ってよ、みおちゃん……」

やっぱり武道館ライブは夢のまた夢かも。

第16話『しどう！』（後書き）

「あっ、琴吹さん。やっと見つけた」

「レンくんどうしたんですか？」

「いやっ、あのー……そのー……」

「？」

「これ、どうぞ」

「これは？」

「ええと……この前ベースを値切ってもらったでしょ……それでお礼というか、なんというか……とにかく何か感謝の気持ちとして表したくて……だから、その……」

「いいんですか？」

「はい。あっ、でも……中身は期待しないで下さい。大したものじ

ゃないんで……」

「いいえ。気持ちだけでも嬉しいです」

「そおっ！　良かった……。じゃあ僕はこれで」

「はい。ありがとうございます」

パサッ

タッタッタッタッタッタッ

「律儀ですね。別にお礼なんてよろしいのに……あら、写真？」

ヒョイ

「ふふっ。レンくん楽しくやってるみたいですね」

第17話『あんぷ』

「あれ、くしゃみが出ない？」

自室で連太郎は呆けたように言った。

連太郎は花粉症持ちである。入学式の日、派手なくしゃみをぶちかまし、周りの視線が気になった彼はひそかに予防策を練っていた。

それ以降平穏に過ごす事が出来たのは言うまでもない。

そして本日の朝、いつもすぐに発生するはずのくしゃみが出ない。

「やったーーー！」

俺は乗り越えたんだ、あの悪夢のような日々をっ！

この日をどれだけ待ち望んだことか。

彼はルンルン気分でカレンダーを見た。

花粉症の影響であるくしゃみがなくなったということは、

「もう夏が始まるんだ！」

「もう夏だなー。大手スーパーとかだとすでに夏のセール実施してたり、料理店は冷やし中華を置いてたな。ああっ、それよりも見たか？　今日の女子の制服を。冬服もいいけど、やっぱりああやって肌の露出が増える夏服は何ともたまらんもんですよ。暑さなんか一発で吹っ飛ぶし、俺たち男にはご褒美です！」

「何言ってんだ、コイツ？」

「アホな事言ってないでさっさと手伝え、このアホ」

「レンよ。アホってのはアホと言ったほうがアホなんだよ、このアホぅが」

「そんな事はいいから手伝ってよ、テル」

「てか、お前ら何してんの？」

「話聞いてなかったのかよ……」

現在、男子軽音部の部室では輝彦以外の全員で大捜索が行われていた。

「アンプとケーブルがないだぁ？」

そう、そうなのだ。
この部室アンプといったバンドに必要な機材が１つも出てこないのである。
連太郎は部屋を眺めつつ、
「音楽室なのにな」
「でもそれって何年も前の話でしょ。この前までここはほとんど物置部屋みたいな所だったから。置いてなかったとしても不思議じゃないよ」
薫はそう言いながら、か細い両手で鉄アレイを持つ。
その姿はまったくと言って不似合いである。
「そうだったの？」
初耳だ。
「うん。レンや舜が入る前に僕とテルで片付けたんだよ」
薫は鉄アレイをいらない物置き場として定めた机に置いた。
「これもいらないな」
舜も机にくまの人形を置こうとした時、
「えー、これはいるよー」
瞬時に薫はそれを奪い、自分の両腕でがしっと抱きつく。

「ふふっ」と笑う姿はまさしく女子のようである。……本当は男だけど。

「いや、いらんだろ」

「いるって」

「いらん」

「いる」

部活に顔を出さない間にあの2人は結構仲良くなっていたようだ。
舜の方もかなり心を開いているようだ。
それにしてもいらない物ばかりが出てくるな。
くまの人形や鉄アレイなんか何に使ってたんだ、昔の軽音部？

「あ～、じれったい！　またバイトでもすれば話は早いんじゃ……」

「それだけはナシだぁ！！」

連太郎は輝彦の言葉を遮った。
この前の事で気づいたがバイトは疲れる。
それに楽器の練習に確実に影響を及ぼすだろう。
と、いうか俺の技術が乏しいのか如何せん楽器が上達しない。だから今バイトなんてやったら確実に桜高祭に間に合わなくなる。

「じゃあどうすればいいんだよ？」

輝彦がぼやいた。

「いっそのこと女子軽音部に貰いに行くか？」

確か平沢さんがアンプを使って一度だけ弾いた、と言っていたから多分他にも機材はあるはずだ。

「……」

「なんだよ、輝彦？　あからさまに嫌そうな顔して」

大体理由は察しがつくが……。

「アイツに頭を下げにいくのは、嫌だ」

輝彦の言うアイツは恐らくというか、田井中律のことだ。

まったく仲悪いよな、お前ら。

「でも他に方法はないぞ」

連太郎が言うと、輝彦は口を歪ませる。

どうするか決めかねているようだ。

「僕もその方がいいと思うな」

いつから話を聞いていたのか、薫が言った。

「金はあまりかけないほうがいい」

舜も賛成する。

３対１の状況で輝彦は、

「わかったよ」

あっさりと折れた。

まぁ、抵抗されても迷惑だから別にいいけど。

「よし。さっそく行ってくる」

輝彦は言い残して女子軽音部へ向かった。

女子軽音部では、

「澪ちゃんの手ってぷにぷにだねー」

澪が唯に手を触られていた。

なっ、なんでこんな事に!?

最初は、ギターを弾いていたら指を切るんではないか、と心配していた唯を安心させるために自分の手を見せたのだ。　すると唯は何を思ったのか澪の手をベタベタと触り始めてしまい未だに解放されない。

「もういいかな？」

「もっ、もうちょっとだけ」

いい加減にしてくれ。

助けを呼応と律を見たが、雑誌に目を通していてこちらに気づいていない。

ふと時計を見る。

紬はまだ掃除から帰ってこないな。

「誰でもいいから助けてくれ……」

つぶやくと、ガラッとドアの開く音がした。

ム、ムギか！

だが部屋に入ってきたのは、

「あっ、てーくん！」

輝彦だった。

なっ、なんでテルが！

澪は瞬時に自分がさらなる窮地に晒されている事を理解した。

恐らく輝彦は唯を止める様な真似はしない。

どちらかというと一緒になって澪の手を触りにくる筈だ。

そ、そうなったら……

「どっ、どうしたんだよ、秋山？　泣きそうな顔して」

「てーくんもこっち来なよ。澪ちゃんの手ぷにぷにだよ」

「悪い。今はそういう事やってる暇ないんだ」

あれっ？
だが予想に反し輝彦は断った。
そのままま っすぐ律の元へ歩いた。

「何の用だ、テル？　私は忙しいんだ」

律は雑誌を目にしながらもトゲトゲしい口調で言った。

「雑誌を見てるのが忙しいの範疇に入るなら、桜高祭の時にはもうお前はそこらで野垂れてるよ」

「大丈夫大丈夫。テルを倒すぐらいの力なら残しておくからさ」

目を光らせお互いを睨み合う2人。
最近慣れてきたのかこの光景に違和感を感じなくなった自分が恐い。

「止めなくていいの、澪ちゃん？」

心配して唯が言った。

時が過ぎて、

「遅い、遅すぎる！」

連太郎は怒っていた。

あれから1時間経っているというのに、輝彦が帰ってこない。

「う～ん。僕の予想だとテルはりっちゃんと喧嘩してると思うな～」

「まさか。さすがのあいつも交渉くらいは出来るよ」

輝彦の交渉スキルは俺より上だ。

例えばこの前のバイト。

あれはただ単に輝彦の顔の広さのおかげの様かもしれないがそうではない。

実際にはあいつが上手く喋った結果なのだ。

「でもりっちゃん相手だとすぐムきになるよ。いっつも喧嘩してるから」

「いつも？」

「うん。いつも」

……。

「大丈夫だよ……な？」

そんな連太郎の不安は、

「今なんて言った？」

「別にー。ただテルが部長なんてレンたちが不幸だよなー」

「へっ、残念だな。俺の集めた部員たちにヤワな奴はいない。それにそう言うお前はどうなんだ？」

「ふっ、それこそ残念。私たち女子軽音部にもそんな奴は誰1人としていない」

当たっていた。

1時間も罵倒を繰り返していたが、とうとう矛先が関係のない部員にまで及んでいた。

2人とも周りに迷惑かけてるって自覚はあったんだな。

「澪ちゃん。コードのCってどうやるの？」

「ああ。それは手をこうやって……」

澪は2人の喧嘩をしている間に唯にコードを教えていた。

コードはギターを弾くのに一番重要な筈なのに、唯は弾き方すらわかっていなかった。それに加え楽譜の読み方もわからないようで

……。

「なるほど。ありがとう、澪ちゃん」

唯は笑顔で言った。

それに笑顔で返すと澪は視線を律と輝彦に向けた。

「だからお前はアホなんだよ。このアホテル」

「そっちこそ。頭が良いわけじゃないだろ。聞いたぞ。律は学力だけだったら桜が丘にかすりもしなかったって」

「なっ、ふざけんな。私はこれでも中学の頃はちょー頭良かったんだぞ」

「それは嘘だ！」

「なんでだよ！」

その通り。

今の律の発言は嘘だ。

頭が良かった時期など一度もない。

「よしっ。そこまで言うなら今度の中間テストで勝負するか？」

「面白い。やってやるよ。後で吠え面かくなよ、律」

「アホテルこそな」

火花が飛ぶ。

勝負好きだなー。
律と輝彦はクラスでもよく勝負を行う。それはジャンケンだったりトランプだったり、勝負が出来る物なら2人はなんでもいいらしい。

「賭けの対象は？」

そしていつから始めたのかわからない賭け制度。
主に対象はお菓子やシャーシンの類だ。

「今回は今までとは違うからなー。なにかデカい物を賭け対象に……」

「だったらお昼ご飯を1週間おごるのは？」

「そんなの面倒だろうが。もっと、こう簡単な。賭けの対象は……」

腕を組んで悩む輝彦。
その時、ギィと扉の開く音が聞こえた。
今度こそムギか？
澪は見ると、

「そ、曽我部くん……」

男子軽音部の1人、曽我部舜だった。
何を考えているかわからない顔に加え、高身長の彼に澪は少し苦手意識がある。今も若干引いている引いている状態だ。

「……」

舜の目はじっと律と輝彦を見ている。

「1週間続けては流石にお互い金がなくなるから。おごるにしてもわかりやすくアイスとかを1個にした方がいいな」

「負けるのが怖いのか？」

「なめんなよ、律。俺はこれでも中学ではクラス1の成績を……」

「嘘つくな！」

2人は睨み合う。

部室に入ってきた舜には気づいていないようだ。

「……」

すると舜は少しずつ近づき、

「大体お前が頭良いならこの学校にいない……だ……ろ」

輝彦の背後を取った。

律もやっと気づいたようで喋る勢いがなくなる。

高身長の舜が見下ろしている図ははっきりと言って恐い。無表情がさらに恐さに拍車をかけている。

「どうした？　いきなりハトが豆鉄砲喰らった顔しやがって。俺の後ろに幽霊がいるわけじゃあるまいし」

輝彦は振り返ると、

「うわっ！？　……ビックリしたー。なんだよ。いるならいるって言えよ、舜。心臓が飛び出るかと思ったぜ」

「……」

「ところで何しに来たんだ？」

「……」

「俺はちょうど賭けをしててな。なんか良いアイデアないか？　とりあえず金のかかる事は極力さけ……あれ？　ちょっ、いきなり人の頭掴むなよ。これは何の趣向だ？」

「……」

「あの。指っていうか段々と手の力が上がってるような……ってイタいイタい！？　なにすんだ、この……」

「フン！」

「がぁあああああああ！！」

その後、舜から事情を聞いた女子軽音部はアンプを心良く譲り渡したのだった。

第17話『あんぷ』（後書き）

いつもながら話の進み具合が……。
今回はアニメの3話の冒頭の辺りのみ。

個人的にはもう少し輝彦に出演を抑えたいんですけどコイツがいなくなると、途端に執筆スピード遅れるんですよねー。

やっぱりキャラとして1番わかりやすいからかな？

最近は他のオリキャラらが空気になってしまわないか不安でしょうがない。

感想、意見待ってまーす

第１８話『てすとのぜんじつ』

高校生のテストは重要である。
特に最初のテストは１番重要だ。
難しくなっているのに加え、ここである意味で自分の居場所が決まってしまうのだ。
例えば、最初のテストで９０点を取る。だが、次のテストで７０点を取ってしまうと、それをバネにしてより頑張ろうとする。逆に最初のテストで５０点を取って、次に６０点を取ると「がんばったほうだ」などと言う。
こうして自分の居場所が決まるのだ。
それともう１つ大事な理由は『大学の推薦』である。
高校は中２からの成績だが、大学の推薦は高１から。
大学の推薦は平均評定によって決まり、これが下回っていると行きたい大学に行けなくなってしまう。
と、ここまでで高校生テストの重要性は理解していただけただろうか？
今回のお話はそれだけ重要な最初のテストの前日の夜にそれぞれがどのように過ごしたかを順を追って見ていこう。

琴吹紬の場合

「えと、確かここの問題は代入すれば……」

紬は勉強などあらゆる面においてコツコツ型である。努力を怠らない……というより本人の性格によるものであろう。

前日であってもそれは変わらずいつも通りに勉強をしていた。

「後は教科書を少し読むだけにしましょうか」

すると、自室のドアが叩かれる。

「どうぞ」

「失礼しますお嬢様」

そう言って入ってきたのは琴吹家専属執事の斉藤だ。
小さな時から側にいて、紬は彼を親の次に信頼を寄せている人物である。

「お嬢様。明日は大事な中間テストの日。夜更かしをして実力が出せないなどという事になりかねません。そろそろ就寝を」

見ると時計は１１時を過ぎている。
紬の普段の就寝時間は平均１０時ほどなので比べるとかなりの夜更かしだ。

「もう。斉藤は心配しすぎです」

と、言ってももう紬は高校生だ。
これぐらいは大丈夫、といつもよりも勉強時間を引き伸ばしたのだ。

「わかってますよ。後、少しで寝るので大丈夫」

紬は笑顔で答える。

「左様ですか。わかりました。ではお嬢様お休みなさい」

「ありがとう斉藤。お休みなさい」

曽我部舜の場合

「これはこの位置でいい、と」

舜は自分を中心に教科書を並べ、その手にはドラム用のバチがあった。

リモコン操作でCDプレーヤーを起動させると、元々セットしてあった曲が流れた。

音を耳で捉え、リズムに合わせて並べた教科書を舜はバチで叩いていく。

舜がしているのはドラムの練習だ。

ドラムの練習は他の楽器と違い、自宅練習する場合は本や座布団などを使う。周りに迷惑をかけない為もあるが、本当のところは持ち運びが楽ではないからである。

「ふう」

曲が終わると舜はバチを置いた。

「上手くいかない」

一定のリズムが刻めず、気を落としていると、

「うるさいわよ、舜。何やってるの？」

「姉ちゃん」

部屋を訪れたのは曽我部恵。

舜の姉にして桜が丘高校の生徒。

成績優秀、生徒会にも所属し2年生にも関わらず会長を務めている。

「ドラムの練習」

「ドラムの練習？　ああ、そう言えば男子軽音部に入部したのよね」

「うん」

恵は数少ない舜の理解者だ。

当然、舜が男子軽音部に入っている事も知っている。

「舜がそんなに積極的になるなんて初めてじゃない？」

「……」

「無言……てことは、やっぱり何かあるのね。軽音部には」

「……」

「深く事情は聞かないけどこの際だから頑張りなさい。高校生活は一生に一度しかないんだから」

「……うん」

恵は部屋を出ていこうとドアノブに手をかけると思い出したように言った。

「そういえば明日テストなのに勉強しないの？」

ただ一言、舜は

「問題ない」

稲木薫の場合

「Ｓｌｉｐは滑る、滑って転ぶって意味だったような……よし、正解！」

薫はベッドの上で寝転がりながら単語の最終チェックをしていた。
英語が苦手なため薫は前日には必ずこのようにして頭に入れる。
人によっては否定されるが薫はこの方法が間違っているとは思っていない。

「Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓは不可解な、不思議な……当ってる！」

むしろ最適な方法ではなかろうか、と自信を持っている。

「Ｓｏｍｅｂｏｄｙは大物、重要人物、と。よし、これで大体は終わった」

単語帳をベッドの上に置く。
欠伸が薫の口から漏れた。

「明日はテストだし。もう寝よう」

部屋の電気を消し、仰向けになって目をつぶる。
だが、

「やっぱりもう少し勉強しようかな」

と、考え直し暗い中そっと、目を開けて単語帳に手を伸ばす。
すると写真立てが視界に入った。
写っているのは薫を含めた４人の男子軽音部員。

楽器を買った記念にと全員で撮った時のものだ。
薫の頬が緩む。

「ふふ」

今頃みんなちゃんと勉強してるかな？
レンは勉強してそうだよね。
舜もなんだかんだでやってそうだし。
でもテルだけはちょっと心配かな。

「くくくくくっ」

そこまで考えて、薫は急に可笑しくなった。

「さっき覚えた単語。３人に上手く当てはまるなぁ」

薫は気づくと単語帳を取るのを忘れしばらく笑っていた。

秋山澪と田井中律の場合

「みおー勉強教えて？」

「ダメだー！」

「いいんじゃんかよー。なっ、なっ、なっー」

「何度頼んでもダメなものはダメだ。第一恥ずかしくないのか？高校生にまでなって人に頼ろうとするなんて」

「大丈夫。羞恥心はすでに置いてきたぜ！」

「おおい！　それじゃあもっとダメだろ！？」

突然の襲来だった。

律は澪のいない少しの間に部屋に侵入していた。

勝手に部屋に上がっているのは別段珍しくなく、むしろ普段からやっているのだが今回は事情が違う。

何故なら律は澪に勉強を教えてもらいに来たのだから。

はぁー、と澪は深いため息をつく。

「わかったよ。教えればいいんだろ。で、どこがわからないんだ？」

「えっ？」

見ると律は全教科の教科書を抱きかかえて、机の上に置こうとしていた。

「……それ全部か？」

「モチのロンです！」

澪は呆れた。

「やっぱり教えるのは無しな」

「えっ、酷い！？」

「どっちがだ！」

「お願いだよう、澪。私には澪しかいないんだ」

「……そう言ってくれるのは嬉しいけどな。どちらにしろ今から勉強したところで大して点数なんか取れないぞ」

「いいや。私には澪が必ず私に高得点を取らせてくれるって信じてるぞ」

「結局人頼みかっ！」

信じるって言葉の意味を間違えてないか。

「お願いだよー」

ああっ、もう！

「わかったからそんなに引っ付くなっ！！」

富永輝彦の場合

「テストというのは残酷だ。出来る者と出来ない者を一瞬で二分する。出来る者は皆から持て囃されある意味で注目の的。先生からも可愛がられ、多少の校則違反も見逃してもらえるなどの優遇っぷり。一方出来ない者もある意味で注目の的になる。だがそれは決して賛美の声ではなく誹謗と中傷の嵐だ。周りからはバカ、アホなどと罵られ、生徒の味方の筈の先生からも見放される。酷い時は無視されるなんて事も当たり前。こんな事があっていいのかっ！？　テストなんかで全てを計っていいのか！　紙の上の数字なんかで俺たちの何がわかるってんだ！　俺は誓おう。将来必ずやテストのない時代

を作ってみせるっ！！　子供たちの明るい未来の為、俺は身を削ってでも成し遂げてみせるっ！！！」

「はいはい。わかったから手を休めないでくれる。それとここの問題間違えてるわよ、テル」

「そんなバカなっ！」

輝彦は勉強が得意ではない。

と、いうか元来好きではないのである。

桜が丘高校を受験する時も推薦で受かったのは彼にとって幸いだったろう。もし一般受験であったならどうなっていたかわからない。

そして今回の中間テストもかなり危ない状況に立たされていた。

実は輝彦は前日のこの日まで全教科のテスト範囲を知らなかったのだ。

や、ヤベぇ……。

当然だ。

最終的に輝彦が頼ったのが優秀な幼なじみの真鍋和だった。

「ここの英文はかなり難しいから絶対にテストに出るわよ。後、新しい単語は絶対に覚えておきなさい」

来たときは渋っていた和だが今はこうして教えてくれている。

さすがは持つべきものは幼なじみだ。

「ちょっとテル。ちゃんと聞いてる？」

「聞いてるよ。新しい単語は絶対に覚えておくんだろ？」

「そう。……全く高校生にもなってアンタの勉強を見るなんてね」

「想像してなかったか？」

「いいえ。想像はしてたけど、いざ目の前で起きると、ね」

「……もしかして和。少し怒ってないか？」

「別に」

「いいや怒ってるって」

「だから怒ってないって言ってるでしょ。まったくアンタは……」

「何だよ」

「……何でもないわよ」

「？」

「いいから。最後に英文の音読をするわよ」

「へーい」

藤澤連太郎の場合

「よしっ。終わった」

連太郎の勉強はテスト2週間前から始まる。
2週間という期間にテストの範囲を抑え前日には全て出来るようにしておくというスタンスをとる。
連太郎は最後の追い込みも終わると急に力が抜けた。

「はー。これで明日のテストは大丈夫だな」

時計は11時ちょうどを示している。

「うん？」

不意に机の上の携帯電話が鳴った。
誰だ？
携帯電話をとる。

「はい。もしもし」

『あっ、もしもしテル』

「薫くん。どうしたの？」

電話の相手は男子軽音部の稲木薫だ。

『そんなに深い用ってわけじゃないんだけどね。ちょっと気になってさ』

ちょっと気になるって、そういう言い方止めて欲しいな。

薫くんはただでさえ女の子っぽいのに。

『勉強の方はどう。はかどってる？』

「大丈夫だよ。俺はどっかの誰かと違って余裕があるから」

『やっぱり～。予想は的中だね』

「予想って？」

『なんでもないよ。コッチの話』

「あっ、そう言えば薫くん。輝彦には勉強を教えたりしてないよね？」

『それなら大丈夫だよ。レンに言われた通りテルには教えてないよ』

ほっ、と連太郎は胸をなで下ろす。

輝彦は大体周りの誰かに勉強を教えてもらおうとするからな。

先に手を打っておいて正解だった。

『あとさ。テストが終わったらでいいんだけど、みんなでどこかに遊びに行こうよ』

薫は嬉しそうに言った。

そういえば男子軽音部のメンバーでどこかに出かけるのは、楽器を買いに行ったあの日だけだっけ。

もちろん連太郎は、

「いいねっ、それ。みんなには……まだ伝えなくていいや。下手に言ってテストに支障があるといけないし」

『わかった。ありがとうね、レン。話を聞いてくれて』

「何言ってるの。薫くんは友達だから当たり前だよ」

『……レンはすごいね』

「えっ、なに？」

『なんでもない。もう遅いし切るね。おやすみレン』

「うん。おやすみなさい」

平沢唯の場合

「ふふ～ん。ふふん。ふふん。ふふん。ふふ～ん」

唯は自室でギターを弾き鳴らしながら鼻歌をしていた。
すると部屋に唯の妹の平沢憂が顔を出した。

「あっ、憂。どうしたの？」

唯は言った。

「ちょっと心配で。……お姉ちゃん何してるの？」

不思議そうに見る憂。

「ギターのコードの練習だよ」

答えると、

「明日テストだから今日は勉強するんじゃなかっの？」

「あっ！？」

「……お姉ちゃん」

気づいた時には時計の針が１２時を指し示していた。

第18話『てすとのぜんじつ』（後書き）

今回はそれぞれテスト前日の夜をどのように過ごしているかを書きました。
若干いつもとは違う感じにしたのですがどうだったでしょうか？

紬のは完全に自分の想像なので、どう受け止められるかが不安です。
後、唯には何か歌わせたかったんです。でも歌詞掲載の知らせを見て急遽鼻歌をさせることになりました。
男子陣では薫が一番難しかったです。
だって男なのに女っぽいんですよ。
どこで線引きしていいか本当に困りました。
そしてさらっと出てきた舜の姉の曽我部恵。彼女はオリキャラではなく、原作にいるキャラですので勘違いしないようにお願いします。

果たして次はどうなっているか……。
8人も動かすのは大変だというのが今になって難しいと感じています。

感想・意見待ってます！

第19話『あかてん』

「今日はこの前のテストの結果を返していくぞー」

つい先日行われた中間テスト。

総じて難しい内容ではなく、日々の勉強が出来ていれば、ある程度は点数がとれるものだった。

日々の勉強に余念がない澪は、確かな手応えを感じており、自信に溢れた顔で担任教師である早野先生に答案を渡される。

「やった」

結果は予想よりもよく出来ていた。

頬が少しだけ緩む。

だが、澪は分かっていなかった。

自分のように結果の良い者がいれば、その逆もあるのだ、と。

「追試だそうです」

その日、女子軽音部の部室にて唯の重い声が響いた。

「「「うわぁ～」」」

差し出されたテストの点数を見て、澪含め律と紬もどうしようもない感情が湧き出た。

唯らしいというかなんというか……。

言葉が出ない。

「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

落ち込む唯に紬が慰めの言葉をかける。

「そうそう。ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕」

珍しく？　律も元気づける。

澪も何か元気の出る言葉をかけよう、と頭の中で思考させる。

テストの点数で落ち込んでるんだから、やっぱり次のテスト頑張れー、とか言ったほうがいいかな？

でも、それだとムギと被るし。

追試のことに触れたら、律と被るし。

以外と難しい。

私ってこういうの本当に下手だな～。

「勉強は全くしてなかったけど」

澪はコケそうになった。

必死で考えたのがバカらしかった。

「励ましの言葉返せコノヤロウ！」

律のツッコミに横で頷きながら、澪は何も言わなくて良かったと

心の底から思った。

改めて、いつものように椅子に腰をかけた。

「なんで勉強しなかったのさ？」

皆を代表し、疑問を口にする律。

「いや～……しようと思ったんだけど……なんか試験勉強中ってさ。勉強以外の事に集中出来たりしない？」

「あ～、それはあるなー。部屋の掃除はかどったりなー」

律は唯の言葉に共感を覚えるようで、納得し、そのまま遠くを見つめた。

そういえばテスト期間中、律の部屋が綺麗に整理整頓されてたっけ。

「勉強の息抜きにギターの連絡したら、抜け出せなくなっちゃって……。結局全然勉強出来なかったの」

でもね、と唯は一拍置いて、

「おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！！」

誇らしげにVサインをした。

その堂々たる姿に、紬は苦笑し、律は呆れて肩を落とした。

なんだろう？
律で慣れているのか、唯の話を聞いても澪は呆れるどころか、ふぅーん、と言った感じだ。
慣れって恐ろしいな。

「その集中力を少しでも勉強に回せば……」

人のこと言えないぞ、律。

「そう言うりっちゃんはどうだったのさ！」

律のため息混じりにぼやいた言葉に、珍しく唯は口を曲げる。
「ん？　私？」と反応し、律はバッグの中からテストの答案を取り出し、

「余裕ですよ！　この通り！！」

自慢気に両手を腰にあて、鼻を高くさせた。

「……こんなのりっちゃんのキャラじゃないよ……」

一方、律のテストの答案を見て、愕然とする唯。

「オーホッホッホッ！！　私くらいの人間になると何でもそつなくこなしちゃうのよ」

追い討ちをかけるように、どこかのお嬢様スタイルで言う律。

「りっちゃんは私の仲間だって、信じてなのに」

唯は本当に残念そうにテストと律の顔を交互に見る。
裏切られた、という気持ちなのだろう。

「オーホッホッホッ！　オーホッホッホッ！」

調子に乗ってるなー。
私が助けた事もすっかり忘れて。
唯が可哀想だし、そろそろバラすか。

「テストの前日に泣きついて来たのはどこの誰だっけ？」

「うわっ！？　ちょっ、バラすなよ！」

制裁を加える意味でも、ちょうど良いタイミングだった。
慌てている律を見て、澪はふっ、と首を横に振る。

「それでこそ。りっちゃんだよ」

「赤点取ったやつに言われたくねぇー！！」

唯は仲間が出来てとても嬉しいようだ。

「赤点と言えば、私のクラスにも追試になった人が二人ほどいましたよ」

「ムギのクラスにも？」

案外、追試になっている人は結構多いのかもしれない。
多分、自分には頓と縁のない事だろうけど。

「そうなんだー。だったら平気だね」
「全然平気じゃないぞ」
律が鋭いツッコミを入れる。
「でも、追試が一人じゃないだけ良いよね」
「？」

男子軽音部
そこでも、やはりテストの話題で盛り上がっていた。
軽い感じで、テストを見せ合いっこしているところ、

「はぁ！？　追試！！」

輝彦は大声をあげた。
信じられない、と言いたげな顔で連太郎を見る。
輝彦だけではない。
薫も舜も驚いて体を硬直させている。

「て、ことは赤点取ったのか？」

「まぁ、その、ねぇー」

皆の顔を直視出来ない。
まさかこんな事になるなんて自分でも思わなかった。
連太郎は視線を明後日の方向へと向ける。

「僕の中では、レンて勉強出来るイメージがあったんだけど……
…意外と頭悪かったんだね」

「いきなりコメントが痛いよ、薫くん」

確かに連太郎自身、勉強出来るイメージを持たれることが多い。
だが、事実はとても平均的で平凡な頭でしかない。
いわば普通だ。
それでも赤点を取ることなんて今までなかった事なのだが……
…。

「いいからさっさとそのテスト見せてみろよ？」

「はぁ！？　嫌に決まってるだろ！　こんなテストを人に見せたら、
俺は世間的に死んでしまう！」

それにお前は確実に笑うだろ！

「バカ野郎！　笑うか笑わないかは見てからキメる！！」

「だから見せねぇんだよ！」

輝彦は人の不幸を好む習性がある。

このテストを見たら、まるで水を得た魚のように喜ぶことだろう。
いや、絶対。
死んでもこのテストは墓場まで持っていかないと。

「これか」

舜くーん！
こんな動くタイプじゃなかったよね！
部室に顔を出してない間に、何の心境の変化があったのー！

「見せて見せて」

薫が興味深々で催促する。
その隣に輝彦もいる。
このままでは……。
瞬時に連太郎は行動を起こした。
舜の持つテストを奪うため、一気に手を伸ばす。
が、ひょいと舜は腕を上にあげた。

「なっ……」

連太郎と舜には１０ｃｍほどの身長差がある。
そのため腕を上に上げられただけで連太郎の手は届かなくなるのだ。

「くそっ、返せ！　このっ！」

「ああいうところ可愛いよね、レンて」

「薫、お前はどういう視点でアイツを見てんだ？」

「楽しい」

なんとか答案を取り返したものの……。

「結局、原因はなんなんだ？」

「うんうん」

「勉強不足か？」

三人の追求は続く。

平静を保っているものの、いつでも笑う準備をしている輝彦。

おもちゃを見つけた子供のように目を輝かせる薫。

無表情で何を考えているのかわからないけど、恐らく？　楽しんでいる様子の舜。

ヤバい。

この状況下で話したくない。

「……」

ここは無言を貫き通す。

「おい。黙ってないでなんか言えよ」

「……」

「ほぅー。そうかそうか。そんなに話したくないか？」

「……」

輝彦の言うことなんか無視無視。

「唯に電話で聞いてみよー」

「それだけは止めて下さい！　お願いします！！」

平沢さんもすでに知ってる事だけど、それでも彼女の口から言わせたくない！

「じゃあ言え」

「……わかったよ」

観念して正直に話すことにした。

「見てくれ」

連太郎は赤点の答案を机に広げる。

「これはヒドいねー」

薫の言う通りこの答案はヒドい。

解答欄の全てにバツがつけられていて、終いには０の文字がくっきり見える。

「これ社会科のテストだろ？　なんで0点なんか……」

さすがに笑えないと思ったのか、輝彦は微妙な表情をつくる。

が、

「うん？」

何やら首を傾げる輝彦。

「レン……まさか……」

どうやら答案の違和感に気づいたようだ。

頷いて返すと、瞬時に輝彦は笑顔を作り、

「あはははははは！」

外にも聞こえるような大きな声で笑った。

この野郎……だから言いたくなかったのに……。

「なるほどな」

舜も気づいたようだ。

ふっ、と笑みを作り、背中を向けて小刻みに震え始めた。

あっ、絶対笑ってる。

気を使っての行動のようだが、いっそのこと輝彦のように笑ってくれたほうがまだマシだ。

「えっ、二人共わかったの？」

一方まだわかっていない薫。
腕を組み、う～んと答案を見返している。
やがて、

「な～んだ。そういうことか～」

納得して、うんうんと首を縦に振る。

「ズバリ。解答欄の書き間違いだね」

「……当たり」

そう、連太郎はなにも勉強不足で０点を取ったわけではない。
ただ、ほんのちょっとのミスが原因だ。
今一度、答案に目を向ける。
連太郎の答案は、

「……ズレてる」

最初から最後まで、解答欄が一つずつズレていたのだった。

「あはははははは！　ヤベぇ、笑いが止まんねぇ！」

「ちょっ……ふふふ……笑いすぎだよぅ～」

「そ、そうだぞ……」

く、くそー。
だから話したくなかったのに。
数分の間、部室では笑い声が絶えなかった。

別の日

「はぁ」

廊下をため息混じりに歩いているのは、藤澤連太郎だ。
彼はこの度中間テストで赤点、しかも0点を取ってしまい、先ほどまで先生に呼び出されていた。
どうやら0点を取った生徒は桜が丘高校で初めてのことらしく、先生方も対応に難儀していたようだ。
そして教員会議で出された案が、

「追試で満点を取ることなんて」

しかもそれまで部活動禁止令を出されてしまった。

「はぁ」

なんか色々重い。

「どうしたんだ？　レン」

「秋山さん」

とぼとぼ歩いている連太郎に女子軽音部の秋山澪が話しかけてきた。

「大丈夫か？　ふらふらしてるし、保健室まで付き添おうか？」

澪は心配そうに見つめる。

秋山さんは優しいなぁ。

どこかのバカに爪を煎じて飲ませたいくらいだ。

「大丈夫。ちょっと精神的にやられただけだから」

「いや、それはちょっととは言わないんじゃ……」

そうなのか？

結構連太郎は精神が強い奴なのである。

「唯から聞いたぞ。テスト残念だったな」

多分、澪は連太郎が0点を取った理由を知っているのだろうが、そこについて言わないかぎり、気を使ってくれているようだ。

「まぁね。さっきもその事で職員室に呼び出されて、追試で満点取らないといけなくなっちゃって」

「えっ、追試ってもう三日後じゃないか！　なんで今になって？それも満点なんて、大丈夫なのか？　確か追試に受からないと部活動も出来ない筈じゃ……」

それとなく言ったつもりだったが、予想外にも澪は大きく反応した。

女子軽音部でも唯が同じように追試を受けるので、他人事ではないと感じているのだろう。

なんで今になって？　というのに正直に答えると教員会議が長引いたからである。

言わないけど。

「大丈夫。俺のは社会科だし、中間テストとほぼ同じ内容みたいだから」

「そうならいいんだが……」

連太郎は心配してくれる澪の言葉が仄かに嬉しかった。

そして二日後の追試前日。

「はぁー。終わったー」

図書館で最後の追い込みが終わり、連太郎は思いっ切り伸びをした。

社会科は基本的に暗記が出来さえすれば大体点数が取れる。しか

も今回は中間テストとほぼ同じ問題が出るので簡単だった。
連太郎は机の上に置いた教科書やノートをバッグに入れ、図書館を出た。
いつもの帰り道に入ったところで、ふと男子軽音部のことを考える。
輝彦達はちゃんと練習しているだろうか？
一応、練習しておくように伝えたけど……もの凄く不安だ。
それに薫くんと相談していた、みんなでどこかへ遊びに行こうって計画も、結局うやむやになっちゃったんだよなー。

「おーい。れんくーん」

どうにかしないと。

「れ、レーン」

「おーい、レーン」

「レンくーん」

？

自分の呼ぶ声が聞こえ、連太郎は辺りを見回す。

「あっ、平沢さん！」

連太郎は即座に好きな女性の名前を口にした。
反対側の道からこちらに手を振っている。
1人で帰っているのかな？
手を振り返すと、唯の隣にいる人も手を振っている。

「うん？」

よく見ると唯を含む、女子軽音部全員がいた。

「じゃあ、みんなで平沢さん家で勉強する事になったんだ？」

「そうなんだよ。私は忙しいんだけど、唯があんまりにもしつこく頼むからさぁ」

「別に律には頼んでなかったぞ」

「そうですね」

「ええーっ！」

連太郎は女子軽音部と合流した。

楽しそうに話している四人の中に入るのは些か抵抗があったが、すんなりと溶け込むことが出来た。

「大丈夫。りっちゃんは私の仲間だから」

「それは一体どういう意味！？」

恐らく、この四人が作り出す不思議な空気のおかげかもしれない。

「良かったね、平沢さん」

朝は真鍋さんに勉強を教えてー、と言いながら、終始泣きそうな顔していたけど、秋山さん達が見てくれるなら安心だな。

ほっ、と胸をなで下ろす連太郎。

「……」

「平沢さん？」

「えっ、うん。ありがとうれんくん」

「？」

大きな交差点に差しかかったところで、

「俺はこっちの道だから。じゃあね」

連太郎は右の道を示し、離れようとすると、

「あっ、待って！」

急に唯は連太郎の制服を掴んだ。

えっ、ちょっ……。

連太郎は固まった。

ひ、平沢さんの手がおっ、俺のＹシャツを触ってるー！

一気に動悸が激しくなる連太郎。

好きな子に服を掴まれるという行為は、最早、連太郎にまともな思考を許さなかった。

最近こそ、クラスが同じになり、お昼ご飯も一緒に食べる仲になって、多少の緊張はなくなったが、今のような不意打ちには即座に対応出来なかった。

「え……あ……う……」

言葉が出ない。

それだけ服を掴まれる行為は連太郎にとって、ストライクゾーンど真ん中ということはお察し下さい。

「ねぇ……」

「ひゃい！」

「れんくんも一緒に勉強しようよ」

第19話『あかてん』（後書き）

やっとアニメ3話の半分ほどきました。
原作に沿ってやってもこれだけ遅いと、自分の文才の無さが恨めしいです。

今回は連太郎をクローズアップして書きました。
主人公の癖に影が薄すぎて、どうにか主人公らしいことをさせたいと、願ってやりました。
あと、今回の話で連太郎をバカだのアホだのと評価をする人がいるかもしれませんが、それは間違いです。

彼はただ『ドジ』なだけです！

さてさて次回は連太郎が唯の家に初めて訪れますが果たしてどうなるやら……。

第２０話『できたこ』（前書き）

今回はついに連太郎が唯の家に！

第２０話『できたこ』

「ここが私の家だよ」

連太郎に緊張が走った。
体が硬直し、喉が震える。
気づくと心臓は鼓動を早めており、手には汗が巻き付いているのがわかった。
夢かと思い、ついつい何度も目の前の家と表札を見比べた。

「れんくん、どうかした？」

ハッ、と気づくと、すぐにそれが夢ではないことを覚る。
そして、

うおぉぉおおおおおおおお！？
ひっ、平沢さんの家だ！
夢じゃない、これは夢じゃないぞーー！！
って、落ち着け俺！？
とにかく一度深呼吸して、気持ちを落ち着かせなければ……。

「すぅーーーー……うおぉおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおお！！！！」

「びっ、ビックリしたぁ……。本当にどうしたの、れんくん？」

「うるさいぞー、レン」

「あらあら」

「そういえばレンて唯のこと……」

連太郎が気分を落ち着かせたところで、唯は玄関のドアを開いた。

「みんな、上がって上がって」

「「「おじゃましまーす」」」

女子たちは口を揃えて中に入る。

「お、おじゃま……します？」

続いて連太郎は硬直した体に鞭を打ち、躊躇しながらも足を踏み入れた。

瞬間、連太郎の鼻にほのかな香りが匂う。

な、なんだ、この甘い匂いは？

女の子の家って、どこもこんなに良い匂いがするものなのか？

実際は玄関先に飾ってある花の匂いなのだが、興奮している彼には見えていないようである。

「ハッ、玄関を閉めないと」

匂いに酔いながらも玄関をきちんと閉めるところはさすがにきっちりしている連太郎。

かわって女子たちも初めて唯の家に訪れたようで、特に律と紬は興味津々だ。

「ほー」

「はー」

すると、

「あっ、お姉ちゃん。おかえりー」

玄関のすぐ側にある階段から見た目中学生くらいの少女が歩いてくる。

き、綺麗だ……。

連太郎は一瞬で目を奪われた。

可愛いらしいつぶらな瞳、柔らかそうな頬、ポニーテールで纏めた美しい髪、触れただけで壊れてしまいそうな体が特徴的な……

……あれ？

どこかで見た事のある容姿に首を曲げる連太郎。

う～ん……どこだったけ？

「あれ？　お友達？」

少女は連太郎、律、澪、紬の四人に気づいたようで、

「はじめまして。妹の憂です。姉がお世話になってまーす」

ぺこりと頭を下げる。

「い、イモウトっ！？」

連太郎は思わず声をあげた。

そっ、そうか！

連太郎は唯を見る。

どこかで見た事があると思ったら、平沢さんにそっくりだったんだ！

中学の時、確か平沢さんには妹がいるって情報があった。

それがこの子だったとは！

「れんくん驚きすぎだよ」

「ご、ごめんなさい平沢さん」

「近くにいる人の事をもっと考えてな」

「ごめんなさい秋山さん」

いかん。

感情のコントロールが全然出来てない。

連太郎は感情が高ぶったり、唐突な出来事が起こると大声をあげてしまう癖があるのだ。

「ふふふ」

憂はそのやり取りが面白かったのか、小さく笑みをつくる。

「相変わらず面白いですね、先輩」

「えっ？」

や、ヤバい……。

顔がそっくりだから、平沢さんに『先輩』って呼ばれているようで、なんかドキドキするぅー。

胸を抑えて、連太郎は二、三度呼吸を繰り返す。

その姿にまたも憂は笑みをつくる。

よくよく見ると平沢さんの妹はどこか落ち着いた雰囲気があるな。

それに、

「スリッパをどうぞ」

出来た子だーー！！

この時、連太郎を含め全員の気持ちが一つになった。

ゆいのへや。

そう書かれた部屋に入る。

見ると、勉強用であろう机に、漫画や小説などが置かれた本棚、奥の方には一人用のベッドがある。一人で使うには充分すぎる広さの部屋だ。

これが平沢さんの部屋……かっ、感動だな！

連太郎は心の中で喜びにあえぐ。

女子たちは部屋の中心に置かれたテーブルを囲うように座る。

連太郎も座ろうとするが、

だ、誰の隣に行けばいいんだ？

本命を言えば唯の隣だが、そんな事をすれば確実に連太郎の体は保たない。

ただでさえ平沢さんの部屋に入ってドキドキしているのに。

「なーにやってんだ？　早くこっちに座れよ、レン」

連太郎に救いの手を差し伸べたのは律だ。

床を叩いて、場所を示してくれている。

おかげで連太郎は自然な形で律と澪の間隣に座る。
はぁ、と連太郎はやっと全身から息を吐き出した。
座るだけでもかなり緊張がほぐれた。

「それにしても、姉妹でこうも違うもんかねー」

「なにが？」

律の思わせぶりな態度にバッグを探っていた唯が反応する。

「妹さんに唯の良いところ全部吸い取られたんじゃないのー？」

「ひどーい！？」

唯は涙目になる。
その反応にいたずらっぽい笑みを浮かべる律。どうやら楽しんでいるようだ。
平沢憂。
確かに平沢さんよりもしっかりしている印象を受ける。

おまけに綺麗で可愛いくて……あれ？
連太郎が考えていると、見計らったように部屋のドアの叩かれる。
ガチャリと音がし、ある人物が顔を出す。

「あのー」

件の平沢憂だった。
ちょっと困った様子で、

「みなさん良かったら、お茶どうぞ？　買い置きのお菓子で、申し

訳ないんですけど……」

本当に出来た子だーー！！

再び気持ちを揃える一同。

憂はお盆に乗せたお茶とお菓子をテーブルの上に並べる。

置き方が手慣れているところを見ると、普段からお客さんの接客をやっているようだ。

「憂ちゃんは今、何年生？」

律は憂を眺めながら言った。

「中三です」

憂は答えると、一歩後ろに引いた場所に座る。

「一つ違いじゃん」

年がそう変わらない事を知ると律は嬉しそうに笑う。

「受験生ですね」

「はい」

紬の言いにもはっきりと答える。

「どこ受けるか、もう決めてる？」

澪の問いに「うぅーん」と下を向き、

「出来れば桜が丘に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか……」

受験生の典型的な悩みだ。
経験がある五人にはそれがよくわかる。

「お姉ちゃんでも受かったんだから、大丈夫だよ」

気づかって言う律。
視線を唯に向ける。
合わせて憂も見ると、「おいでおいで～」と唯は両手でピースをつくっている。
でも、平沢さん推薦で合格したんだよね。
あえて言わないのは連太郎の優しさである。

「お姉ちゃんに勉強を教えてもらえばいいんじゃない？」

「えっ？」

突然の澪の言葉に憂は驚いた表情を見せ、

「それは……自分で出来るから……」

「ははははは、断られたぞー」

律は笑う。

「えー、なんでなんで？」

一方、何故断られたのか唯はまったくわかっていない。
そんな姉を見て妹は、

「でっ、でもお姉ちゃんはやる時はやる人です！」

やっぱり出来た子だーー！！

みんなの気持ちがまたまた一つになった。

「それがさー、聞いてくれよ。この前の休日にデパートに買い物に行ったら、安売りしている服があってさ。ついつい四着も買っちゃって、せっかく貯めたお金が全部無くなったちゃったんだよ」

「律はムダ使いが多いんだ」

澪は冷静にツッコミを入れる。

「わかる、わかるよりっちゃん。気に入ったものを見つけると、ついついい買っちゃう気持ち。私もこの前、ゲームセンターで二千円も使っちゃったんだ」

「二千円……ですか……」

苦笑する紬。

「わかってくれるか、唯？」

「うん。私たちの財布の中身がゼロだってことも」

「ゆい！」

「りっちゃん！」

二人は合わせたように握手をする。
お互い何かをかせねたようだ。

「おーい。帰ってこーい」

「ははははは」

笑う憂。
その様子を見て、連太郎もつられて笑顔になる。
こんな風に毎日女子軽音部は過ごしているんだなー。
軽音部での唯の姿が垣間見えて、連太郎は少し嬉しくなる。
すると急に、

「レンくん。先ほどから黙ったままですが、どうしたんですか？」

「へっ？」

紬の指摘に連太郎は間の抜けた声を出す。

「言われると喋ってないな」

「そっ、そんなことないですよ。田井中さん」

と、言いつつも心の中では、

いや、普通に無理だろ。
このガールズトークの中に男子が加わるのは。

まぁ、こればっかりは仕方ないと言えよう。
異性の壁はエベレスト山よりも高いのである。

「れんくんてさぁ」

「なに、平沢さん？」

連太郎は耳を傾ける。

「やっぱりそうだ！」

何を確信したか、唯は頬を膨らませ、連太郎を睨む。
えー、何か悪いことしたかなー？
連太郎は記憶を探るが一向に睨まれている理由が分からない。
うー、と唯はさらに睨みをきかし、

「れんくんて私たちのこと名前で呼ばないよね？」

えっ

第２０話『できたこ』（後書き）

いやー。

今回も私の独自設定を加えての話ですが、みなさんから見てどうだったでしょうか？

いつも私ごときの汚い文章で申し訳ないです。

指摘された場所はなるべく直すようにしているので、どんどん感想お願いします。

さてさて今回は初めて憂がみんなの前に初めて登場しました。

そして連太郎の暴走は書いてて結構面白かったです。

次回はシリアスというか、今回最後に言った唯の言葉が主軸になると思います。

なるべく早めに投稿予定ですので、よろしくお願いします！

第２１話『なまえ』（前書き）

お久しぶりです！
約１ヶ月ぶりです！
上手く話がまとめられず、色々やることもあったので投稿出来ませんでした。
それと話の都合上、ちょっと前から２０話の唯の一言を変えています。
今回いきなり読むとはわからなくなるかもしれないので、先に２０話を読んでから見て下さい。
お願いします！

では、２１話を楽しんで下さい！

第２１話『なまえ』

名前。
つまりはファーストネーム。
つまりはその人の真名。
つまりは親密な間柄になった証。
でも、男子と女子の間ではその意味合いがちょっと違うように思う。特に俺は今まで女子を名前で呼んだことが一切ない。別に恥ずかしいからとか、気を使っているとかではない。ただ機会があまりなかった、だけだ。
いや、そういえば経った一時期だけあったっけ。何も気にせずに名前を呼んでいた頃が……。

「聞いてるれんくん？」

唯の一言で連太郎は我に帰った。

「どうした？」

「な、なんでもないよ。田井中さん」

危ない危ない。

ついつい昔の事を思い出してぼっーとしてしまった。

「田井中さん、か……確かにレンて、私たちの事は名字で呼ぶよな」

納得とした表情をする律。

「それに最初の頃は敬語を使っていました。今も何故か敬語ですけど」

紬は付け加えるように言う。

「言われてみればそうだな」

澪も同調する。

「よっ、呼び方なんて別にいいんじゃないか？」

「あっ、急に敬語が無くなった」

うっ。

連太郎はどうしていいかわからなくなった。女子軽音部の面々は唯の言葉で完全に標的を連太郎に決めたようだ。これでは連太郎が

何を言っても話を変えるのは不可能だ。
ど、どうすれば……。
すると連太郎の隣に勉強道具を発見する。
「そっ、そうだ！　勉強しよう勉強！　明日は追試なんだし早くやらないと」
連太郎は無理矢理にでも話を変えることにした。
他はともかく唯なら避けられない筈だ。
「私は……」
「とりあえず俺は一人で勉強するよ。わからないことがあったらみんなに聞くから」
「私はね……」
唯はテーブルから身を乗り出し、
「さぁ、勉強勉強！」
すっ、と連太郎の手を取った。
「れんくんと友達になりたいよ」
「なっ、なななななななな？！」
唯は連太郎を見つめ、

「遠慮……しなくていいんだよ」

そ、そんなことより手が！　平沢さんの手がーーー！！

「そうだぞー。ここにも約一名未だに男子と話すのが苦手な奴いるから安心しろ」

「い、今私は関係ないだろ！　……だけど律の言う通りか」

いや、だからそんなことよりも平沢さんの手の温もりがーーーー！！！

「私も気にしませんよ」

だから平沢さんの細い指先がーーーーーーー！！　平沢さんのくりんくりんの可愛い目がーーーーーーーー！！　平沢さんの穢れのない綺麗な顔がーーーーーーーーーー！！

唯はさらに握る力を強くし、連太郎の顔を覗き込む。

「男の子でも女の子でも関係ないよ。じゃないと……」

だから平沢さんの――――

「寂しいよ」

「あっ」

そうか。

何故平沢さんがいきなりあんな事を言ったのか、連太郎は理解した。そして何故俺を女子だらけの勉強会に誘ったのかも。

俺はどこか怖かったのだ。

女子と話す事が、女子と接するって事が。

だから、自分でも気づかない間に名字で呼んで、他人行儀に『〜さん』なんてつけて、気づかない間に壁を作ろうとしてた。毎日、好きな人と一緒にいても、ただ良い顔をして、ただ話をしていれば良いって思ってた。少しでも近づこうと敬語を使わないようにしたりもした。

でも、違った。

平沢さんはずっと感じていたんだ。

俺が何も自分のことを話さないことに。

だから——

「おっ、おい……」

だから——

「どうしたんですか？」

だから——

「レン……」

だから——俺は、

「れん……くん？」

気付くと目から涙が出ていた。

なんでだ？

なんで涙が？

「ハハ」

これが俺の本心てことか。

「わかった」

「え？」

唯はきょとんと惚けた顔をした。

彼女は自分が何をしたかわからないんだろうか？

でも、だからこそなのかな？

「みんなのこと……名前で呼んでもいいかな？」

言うと、唯はいつも以上の笑顔で、

「うん！？」

続いて、

律も、

「ああ。もちろんだ」

澪も、

「友達なんだから良いに決まってんじゃん」

「はい」

紬も、笑顔で言った。

連太郎は自分の中にある『何か』がどんどん消えていくように感じた。

女子軽音部の四人は本当に本当に素敵な人たちだ。

「じゃあ、早速名前で呼んでみよう！　まず私からな！」

「えっ？」

と、自分の中で整理がついたとは言え、いきなりそう簡単に切り替えるのは難しい訳で。

「えっ、じゃないって。名前で呼んでごらん。ほらほら」

「うぅ……」

口が開かない。

「簡単だって。律って二文字だし。言いにくかったら、『りっちゃん』でもＯＫだぞ」

『ＯＫだぞ』のとこだけ声を可愛くする律。

正直痛々しい。見ていられない。てか似合わない。しかも自分で『りっちゃん』言ってるし。

「え～と……り、りつ」

くぅ～あああああ！　なっ、なんだこのムズがゆさは！　胸の辺りが変にキュンキュンするぅううう！

「はーい」

連太郎の気も知れず名前を呼ばれて律は手を挙げる。

「では次は私でお願いします」

次に紬が言った。

「……」

言いづらい。

律とは違って琴吹さんはお嬢様イメージが強いから尚言いづらい。

連太郎が紬を見ると『早く言ってください』と目で語っている。

「つ……ムギ」

「はい！」

ぬわぁあああああ！！　心拍数がぁーーーー！！

紬の嬉しそうな表情がさらに連太郎を悶えさせた。

「つっ、次は私で」

と、言ったのは澪。

少し俯いているが、よく見ると顔が赤い。

や、ヤメて！　そんな顔しないで！　コッチが言い難くなる！

「……みっ、みお」

やば、声が裏返った。

「はっ、はい」

澪も同じように声が裏返った。
やっぱり変に胸の辺りが。

「お見合いじゃないんだから、そんな固くなるなって」

「わっ、わかってるよ」

律は連太郎と澪を見ながらニヤニヤと笑みを浮かべる。
そういうとこは本当に似てるね、アンタ。

「私も……お願い出来ますか？」

そう言って手を挙げたのは女子軽音部の四人ではない。
今まで沈黙を保っていた唯の妹の憂だ。

「えっ、いや、あの～」

連太郎は戸惑った。
が、すぐに、誰にでも言えるように練習はしておいた方がいいと考え直す。

「うっ、憂……ちゃん」

さすがにさっき知り合ったばかりの人を呼び捨てに出来ない。
あっ、でもさすがに『ちゃん』付けは無かったかな～。

「はい！」

笑顔で言う憂。
別に『ちゃん』付けでも構わないようだ。
ほっ、と胸をなで下ろす。

「私は私は！」

一人呼ばれてないのに機嫌を損ねた唯が頬を膨らませる。
ここが連太郎には最大の壁だ。
連太郎は唯の事が好きである。
好きな人の名前を呼ぶ、その行為は先の四人とは比べものにならないほど連太郎には重い。
心臓が鼓動を早め、言ってもいないのに胸の辺りがキュンキュンし、ムズがゆさが増してくる。

「れんくんはやく」

はっ、何やってるんだ俺はついさっき平沢さんに気づかされただろ。
だから大丈夫だ。
落ち着いて。

「ゆっ、」

言え！

「ゆゆゆ

「それは貧血を起こした時の対象法じゃないぞ、唯！」

第２１話『なまえ』（後書き）

どうだっでしょうか？

連太郎くんがやっと主人公主人公したんじゃないでしょうか？

彼はちょっと人に気を使い過ぎな、いわゆるどんな人にでも良い子良い子しちゃう子なんです。主に女子に。

だから、唯の指摘はある意味的を得たように感じますね。

次の投稿は早めにします！

第２２話『はじめて』（前書き）

今回は3日で投稿出来ました！

人間やる気になればなんとかなるものですね。

と、いうことで第２２話は短めなのですがお楽しみ下さい

第２２話『はじめて』

「う、うぅ～ん」

連太郎は暗い部屋で目を覚ました。
いつの間に寝てたんだ、俺？
カーテン越しに指す光が眩しく、ゴシゴシと目をかく。
体を起こすと、

「いっ！？」

足に痛みを感じた。
触ると一層痛む。
よく見ると膝の辺りに痣が出来ていた。
こんなとこ怪我したかな～。
覚えのない怪我に首を傾げる連太郎。

「気がついたんですか？」

連太郎は声を掛けられた。
暗がりで相手の顔がよく見えない。
だが、大体誰かは予想がつく。

「あぁ、お母さんか。今日の朝ご飯はなに？」

朝早くに声をかけてくるなんて人なんて母親だけだ。

「えっ、今日ですか？　今日はほうれん草のおひたしにお芋の煮っ転がし、鹿尾菜、嫌でなければ昨日の残り物の鮭があります」

「珍しいね。いつもは炒飯か、冷凍食品ばかりなのに。どういう風の吹き回し？」

「えっと、私の家だといつも通りですけど……そうだ先輩、納豆は食べられますか？」

「何言ってるのお母さん？　食べられるに決まってる……？」

連太郎は気付いた。

会話をしている相手が母親ではない事に。

と、いうか話し方が全く違う。

一体誰だ？

連太郎は相手を睨みつけた。

だが、暗がりでシルエットでしか認識出来ない。

「どうしたんですか？」

「いや、その、ちょっと暗くて……」

「あっ、ごめんなさい！　今、明かりつけますね」

言うと、部屋の明かりがつけられた。

ようやく話していた相手の姿がはっきり見えた。

その相手は、

「うっ、憂ちゃん!?」

唯の妹の憂だった。

「はい……どうしたんですか？　顔を伏せて」

はっ、恥ずかしいーー！

母親と間違えて話していたなんて顔から火が出るほど恥ずかしいーー!!

「大丈夫ですか？」

「あっ、うん、大丈夫。ちょっと自分を省みてるだけだから」

「ふふ」

憂は連太郎の顔を見ると笑みを作った。

「その様子なら大丈夫そうですね。昨日、急に倒れたからビックリしたんですよ」

急に倒れた？

「俺が？」

「はい」

「？」

「覚えてないんですか？」

「覚えてないって、何のこ……」

「先輩？」

「ぎゃぁあああああああああああああああああああ！！」

「きゃあああああああああああああああ！！」

ぜっ、全部思い出したーーー！！

確か初めて平沢さんの家で勉強をしようって誘われて、初めて平沢さんの部屋に入って、初めて平沢さんに手を握られて、初めて平沢さんの名前を呼ぼうとしたら、その後からの記憶が……。

憂の言い方から察するに恐らく気絶をしていたらしい。

「ハッ、てことはココはもしかして？」

「はっ、はい。私たちの家です」

俺は一晩中平沢家にいたのかよーー！

なんたる失態！

平沢家の初めての夜がこんなことになろうとは！！

連太郎は悔しい気持ちで一杯だった。

その様子に憂は、

「とにかく一旦落ち着いて、朝ご飯でも食べませんか？　お姉ちゃんももう少しで降りてくると思うので」

「……いただきます」

こうして連太郎は平沢家で初めての朝ご飯をいただく事になった。

第２２話『はじめて』（後書き）

いやー連太郎が段々壊れてきたような気がしますねー。もちろん良い意味で、ですが（笑）

やっぱり男子高校生ならこれぐらい本能むき出しでないとね。多分普段は輝彦を叱ってバランスを取ってるんだろうなー、と書いている時に思いました。

次も早く投稿出来るように頑張ります！

第２３話『ちきん』（前書き）

今回でやっと原作第３話が終わったー！
嬉しすぎる（泣）

自分の執筆スピードだと絶対終わらないとか思ってたのに。

と、いう訳ですでにバラしちゃいましたが、今回で原作３話が終わりです。

何故、後書きに書かないかというと後書きは『番外編』を載せているからです。

一応番外編の枠として第２３話の後に入れようとしたんですが、あまりにも内容が薄いため後書きに載せました。

いつもは後書きを読まない人も今回は後書きも読んでいって下さい！

では、どうぞ！

第２３話『ちきん』

連太郎は平沢家で食事を済ますとダッシュで家に帰った。
目的はもちろん着替え。
一晩中寝ていたせいで、Ｙシャツが汗でぐっしょりだったのだ。
着替えてる途中で母親が『昨日女の子の家に泊まったんだって？
ついにあんたにも春が来たのね～。今、夏だけど』と横で何やら言っていたが、無視して家を出た。
そして学校の校門前ににつくと、

「はぁ」

ようやくマトモに息がつけた。

「よっ、早いなレン」

声を掛けられドキッとする連太郎。
女子軽音部の誰かだったら恥ずかしくて顔を見れない。
恐る恐る見る。

「なんだ輝彦か」

「その言い方はねぇだろ？」

連太郎は安堵する。

例え輝彦でも、女子軽音部の面々と顔を合わすよりかずっといい。

「すまん。ちょっと考えごとしててな」

連太郎は謝る。

「どうした？　今日はやけに素直な対応……まさか！？　朝帰りでもしてきたのか？」

「ヤメて！　今の俺にはそれ全く冗談に聞こえないから！！」

微妙に当たってるから余計にたちが悪い。

「何があったか知らないけど、そんな調子で大丈夫かよ、今日の追試？」

「……え？」

気絶していた連太郎には『追試験』なんて言葉は頭の中から綺麗さっぱり忘れさられていた。

「えっ、てお前忘れてたのかよ」

呆れ顔の輝彦。

「忘れてたというか、考えるひまがなかったというか……」

でもさぁ、誰だってあんな状況に追い込まれたら『追試験』なんて普通覚えてないって。

と、言い訳を自分の中に並べる連太郎。

人はミスを犯すと何かにつけて言い訳をする生き物なのだ。

だが連太郎に焦りはない。

なぜなら、

「まぁ、試験内容は中間テストの時と同じみたいだし、名前を書き忘れなければ多分大丈夫だ」

名前さえ書いてればあのテストも８３は取れてたしな。

「本当か？　高校教師って結構えげつないらしいからな。内容同じとか言っておきながら微妙に変えられてるパターンとかあるらしいぜ」

「えっ、逆に本当かよ、それ？」

輝彦の予想だにしない返しに連太郎の顔は引きつる。

「姉に聞いた話だが、古文教師の堀込が何度かそういう風に問題を変えた事があるらしいぞ」

堀込は桜が丘高校の教師の一人で、古文を担当している。教師の中での地位は高いらしく、校長、教頭についで発言権を持っている人格者だ。だが生徒受け、特に男子の中では最も嫌われている教師ナンバーワンでもある。

「堀込か。でも俺の追試は社会だから全然関係ないし。ところで輝彦、お前に姉なんかいたのか？」

「はぁ、何言ってんだ？　俺に姉なんかいるわけないだろ。俺は生まれてこの方純粋無垢な生っ粋の一人っ子だ」

純粋無垢な生っ粋の一人っ子ってなんだよ！　それただの一人っ子なだけだからな！

「じゃあ一体誰だ？」

「俺だ」

頭上から聞こえる声。

連太郎はまさか、と思い振り返ると、

「しゅっ、舜くん！？」

高身長の曽我部舜が見下ろすように立っていた。

「おう、舜。おはよ」

「ああ。おはよ」

連太郎が驚いている隙に挨拶をすませる二人。

やっぱり舜くん変わったなぁ。

今までだと話し掛けても挨拶なんてしなかったのに。薫くんが何か知ってるぽいから今度聞いてみよう。

「でもそうなるとやっぱり放課後までに勉強しといたほうがいいよな？」

「ああ。そのほうがいい」

「なんだったら俺が勉強見てやろうか？」

「輝彦に期待はしていない」

「おい！　少しくらいありがとうの一言があってもいいだろ！」

「それは賢明な判断だな」

「舜、それはどういう意味だ！？」

放課後

追試験会場教室

試験が終わるとすぐに答案が返された。教師たちもあまり長引かせたくないのだろう。その場で名前が呼ばれ、連太郎は用紙を貰う。

「よしっ」

連太郎は小さくガッツポーズした。

追試は連太郎の考え過ぎであった。内容は前回と完全に同じ。つまりは余裕で８３点を取った。

でも綺麗に前回と同じ点数を取るなんて、

「進歩がないな」

一応勉強したんだけど。

「次、平沢唯」

「はっ、はい」

名前を呼ばれて唯は立ち上がる。

何故教科の違う唯がいるのかというと、追試験は人数が少ないため、例え教科が違っても同じ教室で行われるからである。

唯は不安の表れなのか妙に足取りが悪い。

それを見て連太郎は不安になった。

勉強をしたとはいえ、一回12点を取っている唯だ。しかも前日までマトモに勉強もしていなかったらしい唯だ。本人よりも周りの方が気が気でない。

唯は用紙を返される。

「？」

唯の体が震えているのが連太郎には見てとれた。

どうしたんだ？　もしかしてまたダメだったんじゃ？

そのまま唯は連太郎に近づく。

「どうしようれんくん？」

「だっ、ダメだったの？」

それだとまた追試験を受けるはめに……。

「１００点取っちゃった」

「スゲェーーーー！」

見たの小学校以来だよ。

「ど、どうしよう～」

唯の声が震えている。

「まっ、まずは一旦落ち着こう。しっ、深呼吸、深呼吸をしよう」

マズい。

連太郎も思いのほか、気持ちが高ぶっていた。

これが１００点の力なのかもしれない。

「うっ、うん」

「すって」

「スーーー」

「はいて」

「ハーーー」

「すって」

「スーーー」

「はいて」

「ハーーー」

「すって」

「スーーー」

「はいて」

「ハーーー」

「もう一度すってーーー」

「そこの二人静かにしろ！！」

「「はっ、ハイ！？」」

教室を出ると、唯はまだ震えていた。

「だっ、大丈夫？」

連太郎が心配して聞く。

「まっ、まだ震えが止まらないよ」

でもテストで１００点を取るなんてそうそう出来るものじゃない。

これは彼女の努力――ではなく、周りの人たちのおかげだな。女子軽音部の皆様ご苦労さまです。

「とりあえず良かったね。二人共無事に追試が終わって」

これで一段落だ。

今日からは部活に専念出来る。

「むっ～」

「どっ、どうしたの？　急に睨んで？」

「れんくん言おう言おうと思ってたんだけど――」

唯は真剣な顔で、

「今日一日、まだ私の名前呼んでないよ」

「えっ、えっと、それは、その……なんというか」

「私言ったよね。友達になりたいって、寂しいよって」

「……」

「ねっ」

「……」

……

……

……

……

……ゆい」

「うん！？　ってれんくん！　そんな全速力でどこに行くの！？
れんくんれんくーん！！」

「俺の、俺の、俺のバカぁあああああああああああああああああ！」

「やっ、止めなよ！　どうしたの、レン？　部室に入ってくるなり、床に頭を打ちつけて！？」

「薫くん、俺は、俺は、俺はとんだチキン野郎だぁあああああああああああああああああああああああああ！！」

「落ち着きなよ！　何があったの？」

「……」

「……」

「い、言えない」

「えっ？」

「うおぉおおおおおおおおおおお！！」

「テル～、どうしよう？　このままじゃ、レンが死んじゃうよ！？」

「いや、そんな簡単に死なんから」

「でもでも～」

「ほっとけほっとけ。そいつは嬉しいことがあると感情の歯止めが効かなくなるんだ。だから、ほっとけばその内静かになるよ」

「そんな～……そうだっ！　舜は何か良いアイデアない？」

「ねじ伏せる」

「ちょっと言ってることがリアルに怖いよ！　何故か冗談に聞こえないよ！！」

「冗談じゃない。……本気だ」

「こっ、怖すぎるよ～」

「舜のやり方も有りっちゃあ有りだな」

「有りなんだ！」

「でもまぁ……」

「うぉおおお

「？」

「ムギ、どうした？」

「りっちゃん何か聞こえない？」

「？　私は聞こえないないけど、澪は何か聞こえるか？」

「き、聞こえないぞ！　わっ、私は何も聞いてないからなっ！？」

「……さいですかー」

「本当に聞いてないからなー！！」

「～♪」

「唯はなんか嬉しそうだな？」

「えへへ～、わかる～りっちゃん？」

「追試験で１００点取ったんですもの。嬉しくなるのも無理ないわ」

「ふふふふふふ♪」

「それはそうだけど……なんかそれだけじゃない気が……

……」

「ところで、ムギちゃんが聞いた音って何なの？」

「今さら聞くんかいっ！」

「音、というか、叫びみたいな感じなのですけど……」

「はいはい、ムギそこまで。無駄話は終わりにして練習するぞ。唯に早くコードを覚え直させないと」

「ええー」

「ええーじゃない！」

「……」

「なんだ、律？　私の顔をじろじろ見て？」

「もうっ、澪ちゃんたら急に話を変えてっ！　怖いなら怖いってはっきり言えばいいのに。全くいつまで経っても子供なんだから――イテッ！？」

「誰が子供だ、誰が！」

「ぼっ、暴力はんたーい？！」

「大丈夫、りっちゃん？」

「うん、大丈夫」

「はぁ、それでよく夢は武道館ライブなんて言えた……」

【おおおおおおおおおおおお！】

「ひっ！？」

「澪ちゃん？」

「むっ、ムギ、いっ、今何か聞こえなかったか？」

「いえ。私はもう何も聞こえてませんけど……どうしました？」

「私は何も聞いてないぞ！？」

「？」

第２３話『ちきん』（後書き）

ちょこっと番外編『はじめて』

「いたたたたた～。膝に痣が出来るなんて初めてだ」

「右足痛そうね」

「和さんにもそう見える？」

「ええ。かなりね」

「やっぱりそうか～。保健室にでも行ってみようかな？」

「……」

「和さん？」

「……」

「あっ、あの～、そんなに足を見られるとはっ、恥ずかしいんですが……」

「……藤澤くんちょっとごめんね？」

「へっ？」

むぎゅ！

「ぎゃあああああああああああああああ！！」

「膝を中心に痣が出来てる。やっぱりあの時落としたのが原因みたいね」

「いつーーー、それってどういう意味？」

「あら？　女子軽音部の人に聞いてないの？」

「？」

「追試験の前日に藤澤くん唯の家で倒れたわよね」

「なっ、なんで和さんがそれを？」

「あの日私は唯が心配になって様子を見に行ってたのよ。そこで倒れている藤澤くんがいて、みんなで一階まで運んだのよ」

「しっ、知らなかった」

「まぁ、あえて言う必要もないしね。それで運んでる途中に一度、藤澤くんを落としてしまったのよ」

「俺を運んだまではよくわかったけど、だったらなんで誰も教えてくれなかったんだろう？」

「多分気を使ったのね」

「それは断じて違う！」

ちょこっと番外編『なまえ』

「そういえばテル」

「なんだ、秋山？」

「テルも私のこと名字で呼ぶよな？　他の女子は名前で呼ぶのに…
…何でだ？」

「『も』？」

「きっ、気にしなくていいから！　答えて」

「……だってお前男子苦手じゃん」

「えっ？」

「あれっ、違ったか？　初めて話した時に変に体を震わせてたからさ。苦手なんじゃないかと思ってたんだが」

「……」

「秋山？」

「……でいい」

「え？」

「……おでいい」

「なに？　聞こえない」

「だから……おでいい」

「はぁ？」

「だから澪でいいって言ってるだろ！」

「……」

「……」

「へぇ～」

「なっ、なんだ？」

「いや、あきや……じゃなかった、澪って結構大きな声出せるのな。ちょっと驚いた」

「……」

「澪？　どした～？　お～い澪さ～ん？」

「こっ、コッチを見るなっ！」

第２４話『さっきょく』（前書き）

半月ぶりです。
時が過ぎるのは実に早い。
この小説を見ている方々も徐々に増えつつあるようで、嬉しい限りです。
では、第２４話をどうぞ！

第２４話『さっきょく』

あるところに稲木薫という人物がいる。
温厚で優しく、ちょっと怖がり、成績は良いほうで、教師からの信頼も厚い。と、ここまで聞けば普通のどこにでもいる男の子だ。この後が重要である。彼の見た目に注目をしていただきたい。
あどげなさを残した顔、つぶらな瞳、後ろに束ねた長髪、低身長。

わかっただろうか？

どこからどうみても彼は女の子にしか見えない。いや、逆に女の子と見ないほうが難しいくらいである。さらに付け加えると、ぬいぐるみが好きだったり、歩く姿が内股だったりと男の子を連想させる行動が皆無なのだ。下手をしたら女の子よりも女の子らしい。だが男の子である。この事実にどれだけの人が悲しみ、嘆いたことか。
『神様って残酷なことするな』とは彼の中学の同級生の一言である。

テストから数日、いや連太郎と唯の追試から数日、男子軽音部では陽気な歌が響いていた。歌っているのは、稲木薫。部室には他の

面々の姿はない。まぁ、だからこそ彼も歌っているのだろうが。
そして、
「♪～～～～～」
キーボードを弾き鳴らしながら、歌っている彼の姿は妙に惹きつけられる。
可愛いとか綺麗とか、そういった次元ではない。様になっているというのだろうか。残念ながら、形容する言葉が見つからない。
「「「……」」」
それは男子軽音部の三人も同じのようだ。
今日、連太郎、輝彦、舜の三人は掃除当番の日で、そのため、いつもよりも遅くれて部室に訪れた。すると部室から何やら歌が聞こえるではないか！　思わずドアを少しだけ開けて中を覗くと、薫が陽気に歌っている姿を発見したのだった。
「しかし綺麗な声だなー、おい。男子高校生が出せる声じゃねぇぞ、あれ」
「確かに」
「薫くん。前々から思ってたけど、そこまでか……」
洗練されたような透き通った声は耳にとても心地よかった。
ずっと聞いていたい。
不思議と三人はそんな気持ちになる。
「改めて見ても薫くんは男子に見えないね」

「言ってやるな。……悲しくなってくる」

窓から差し込む夕陽が彼の美しさを十二分に強くしていた。

「うっ、かわぇえ」

「泣くほどかよ！」

輝彦の気持ちは分からないでもないけどさ！

どうやったって薫くんが男の子である事実は変わらないんだから。

一方、同じ時、女子軽音部はいつものようにお菓子に舌鼓を打っていた。

「う～ん、美味ぃ」

律はほっぺたが落ちそうな気分だった。

口に広がる程よい甘さ、もちもちした食感、中に入っているいちごはとっても美味しい。

本日のお菓子はいちご大福である。

「本当美味しいね」

唯も笑顔で、頬を抑えている。幸せそうだ。

ふふっ、と紬は笑い、

「唯ちゃん、あんこが口についてるわよ」

唯の口についたあんこをハンカチで拭き取る。

「ありがとう、ムギちゃん」

「どういたしまして」

なんと微笑ましい光景だろうか。お茶がすすむ。ズズー、と律はお茶を流し込む。ちなみに澪は用事があって今日は欠席している。

「あっ、今おかわり淹れますね」

お茶はいつも紬が淹れてくれる。律には詳しい種類や味がわかるわけではないが、確実に言えることがある。紬の淹れるお茶は美味い。お店で出してもいいくらいだ。律は一度、興味本位で淹れたことがあるが、紬ほど美味しくはならなかった。何かコツでもあるのだろうか？　見たところ特別な事はしてないのに。

「りっちゃん、私の顔に何かついてますか？」

「あっ、いや、なんでもないなんでもない。ちょっとぼっ～として」

律は我に帰る。

どうやら知らず知らず紬の顔を見ていたようだ。様子の怪しさか

ら、紬は首を捻る。
やっぱ、今の反応はさすがにおかしいよな。
話を逸らすことにした。

「そういえばムギ」

「はい？」

「作曲は進んでる？」

作曲、とは文字通り曲を作ることである。
女子軽音部は来たるべき桜高祭に向けて、自分達のオリジナルの曲を作ることにした。発案者は律。最初はそれぞれで曲を作ったが、律、唯、澪には作曲の才能がなかった。一方、紬にはあった。曲らしい曲が出来ており、初めに聞かされた時には、ほぼ曲が完成していたのだ。すげー。律を含め、全員関心した。だが本人は納得しておらず、未だに試行錯誤している。
律はもうそろそろ出来ているのではないか、と思い言ったのだ。
すると紬はにんまりと笑みを作り、バッグの中から何やら取り出した。

「実は昨日の夜に完成したんです！」

バッ、と楽譜を見せられる。

「マジか！　見せて見せて」

楽譜を取り、机に広げる律。

「私も見たーい！」

唯も楽譜に興味津々だ。

「ふむふむ」

見たところ、最初の時と殆ど変わっていない。でも所々に修正している箇所が見受けられる。苦労したんだろうな。

「ありがとー、ムギ！　これで桜高祭もバッチリ！」

「りっちゃん、大袈裟よ」

「そんなことないよ！　ムギちゃんやっぱりすごいよ！　私なんか全然ダメだったのに」

「もう、唯ちゃんまで」

紬は大袈裟と言うが、実際すごい。わかる人ならわかるが、曲を作るのは本当に大変なのだ。それをこの数日でやってのける紬は賞賛に値する。

「あっ、そーだ」

「……？　りっちゃん、どこに電話してるの？」

「ふっふ～ん。私達のて・き・だ、っと」

ようやく部室に入った連太郎達は、机を囲んで談笑していた。その日に起こったこと、最近のマイブームなど話題は様々だ。おかげで毎日話していても飽きない。連太郎はたびたび思う。練習しなくていいのか、と。だが、それもみんなと話すうちに頭の隅に行ってしまうのは何故だろうか？

今日もいつものように話をして終わりか、と活動停止時刻に差し掛かる時計を見る。

すると、今まで電話をしていた輝彦が部室に戻ってくる。

「ふ、ふふっ」

妙な笑みを浮かべ、輝彦は椅子に座る。

そして、

「作曲するぞ」

「急に何言ってんだ、お前？」

輝彦の突然の発言に、連太郎は冷淡に返した。

「何かあったの？」

様子のおかしい輝彦に薫が言った。

「実はかくかくしかじかでな……」

「通じるかっ！」

漫画じゃねぇんだよ！

ツッコミを入れつつ、連太郎はどうして作曲をしたいのかを聞いた。だが、本当に聞くと長くなりそうなので、要約して以下の通りに並べることにした。

・女子軽音部が作曲をした
・それで律さんに挑発された
・輝彦は対抗心むき出し
・だったらこっちも作ってやる！

一言、言わせてもらおう。

「子供かっ！」

いい加減止めろよ！　恥ずかしい！

「負けるのは嫌いなんだ！」

「なんだよ、その理由」

ここ数日は騒がしいこともなく安定してると思ったのに……。律さんも余計な電話をしてくれた。水と油のような二人の関係はもう少しどうにかならないものか。

「それよりどうするんだ？」

舜が言った。

「もちろん曲を作る！　そして桜高祭に向けて練習をする！」

「ちょっと待て！」

「なんだよ、レン？　まさか俺達には難しくて出来ませんなんて言うんじゃないだろうな？」

「そうは言わないけど……」

だが、難しいことは確かだ。それなりの才能も必要だし、何よりも、

「作り方知ってんのか？」

「知らん！」

速攻だった。

無責任な輝彦に頭を抱える連太郎。輝彦は決めたことは、即、実行に移す。例えそれが自分の知らないことで、無茶なことであろうとも。

そして、

「でも一人だけ知っている奴を知っている」

「誰だよ？」

「ふっふっふ。しかもそいつは恐ろしい才能を持っていて、作曲なんかちょいちょいのちょいで出来てしまう」

「？」

「なんだなんだ？　舜もわからないのかよ」

「いやいやお前の意図を察せる奴こそ少ないからな」

「そう言うわけで」

「どういうことなんだ？」

「薫に作曲を任せる！」

「えっ？」

他人に迷惑をかける点では、コイツに適う奴はいない。
そしてもう一つ、

「これは部長命令だぞ」

「えっ～～～～～～～～～～！　ぼっ、僕がやるの！？」

薫くん頑張って下さい。

第２４話『さっきょく』（後書き）

今回は完全オリジナル回
何故すぐ合宿編に入らないのかというと、自分的にこういう話を入れないと何だか変だな～、と悩んだ結果です。
そして入れた理由はもう一つあるのですが、それは次の話で明かします。

感想、意見を待ってます！

第２５話『ようがあって』（前書き）

メリークリスマス！

てか、聖なる夜に何してんだ私は！

一言添えておくと、別に暇とかそういう訳で本日投稿したわけじゃありませんよ。

決して！

ただ、たまたま書き上がったから投稿しただけです。

嘘じゃないですよ。

とまぁ、全部言い訳ですね、コレ。

では、２５話の始まりです。

第２５話『ようがあって』

次の日、連太郎はちょっとした後悔の念を抱いていた。昨日の時点では、輝彦の勢いどつい薫に任せてしまったが、さすがに良心が痛んだ。

連太郎はいち早く部室に顔を出すと、ある物を取り出した。それは一冊の本だ。タイトルはこううたれている。

『サルでもわかる曲の作り方』

昨日、連太郎が本屋で悩んでいる際に、唯に勧められたシリーズの本だ。『サルでもわかる』シリーズは、唯曰わく、とてもわかりやすいんだとか。実際読んで見ると、初心者でもわかりやすい解説が載っている。可愛くイラストされたサルがページごとに漫画風に教えてくれたりするので、尚のこと読みやすかった。

が、当然のごとく、作曲は本を読んだからといって、ポンと出来るものではない。それは連太郎も重々承知だったのだが、

「何も考えつかないなんて」

そして作曲を手掛けている人は本当にすごいと思う。ドレミファソラシドの八つの音に加え、音のキーなども考えなくてはならないのだから。

「大変だよなー」

呟きが小さく響くと、連太郎は何故だかむなしさを感じた。

「連太郎一人か？」

すると、舜が部室に現れた。

「ああ、舜くんか……」

舜は覇気のない顔で周りを見渡した後、静かに、自分の指定席に座った。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

静かっ！？

えっ、何コレ？　別にいいんだけどさ。普通一人から二人になったら少しは会話とかあってもいいと思うのだが。

連太郎は舜とあまり会話したことがない。いや、結構あるのだが、ないのだ。普段は輝彦や薫がいるため、話す内容などは大丈夫だが、今のように一対一の状態は実は初めてだったりする。だから、どの切り口から攻めていいかまったくわからないのだ。

「……」

「……」

いや、待て。

尻込みしてても何も変わらない。この前、唯さんに言われたばかりじゃないか。恐れてないで踏み込まなくては。

よし、言うぞ。

話題は『今日一日どうだった』だ。

自分の考えた中で、一番差し障りのない言葉だ、と第一声に連太郎は決め、本にあった視点を舜に向け、

「しゅんくんきょう『疲れているのか？』った」

言葉被ったー！

タイミングが合ったのか、合わなかったのか、どちらにしても舜の通りの良い声に連太郎の言葉はかき消されたのだった。

「なにか言ったか？」

「いや、なにも」

こうなるともう一度言うのは少し恥ずかしいので、なかったことにした。

ならいい、と舜は言って、

「で？」

「あ……ああ、別に疲れてないよ。ただこの本を読みながら、作曲って難しいなー、ってさ。……少しでも薫くんの手助けしたいし」

舜は連太郎の持つ本を一瞬、視点で捉え、

「……そうか」

と、だけ言った。

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙に逆戻りになった。

連太郎はまた言葉が被ったらどうしようと、考えてしまい、何も言えなくなってしまった。一方、舜はただただ連太郎をジッと見てるだけ。

誰でもいい、誰か来てくれ！

「待ったかー、お前ら！　悪りいな。ハヤセンからかってたら遅れちまってよ。あの反応、思い出しただけで笑い止まんねえ。見せたかったなー」

勢いよくドアを蹴破り、豪快に登場をキメた輝彦に連太郎は心の底から安堵の息を漏らした。

「それ本当かよ?!」

連太郎は驚いた。

「あれっ、お前は知らなかったんだっけ?」

「連太郎は追試でいなかった」

「ああ、それでかー。通りで」

実は連太郎が追試の勉強のため、唯の家を訪れていた頃、輝彦と舜は薫の家に訪れていた。何でも、当日、急に薫が提案してきたらしい。

「あん時、薫はちょっと怒っててよ。『レンが赤点取るから、みんなで遊べなかったー』とか言って。こーんなふうに頬膨らませてな」

そういえばそんな約束してたなー、と連太郎は思い出す。

「……ツッコンでくれないのか。『頬を膨らませた顔はキモイから止めろ』とか言ってくれると信じてたのに」

「えっ、なんか言った?」

「ひどいな」

「？　なんで舜くん？」

連太郎は舜の言っていることが、よくわからず首を傾げた。

「だからよう……」

なんでちょっと涙目なんだ、コイツ？

「俺たちも初めて知ったんだ。薫の母親がピアノの先生をしているなんてな」

同じ頃、紬はルンルン気分でお茶の準備をしていた。どのハーブにしようか、どのタイミングで淹れるか、考えるだけでニコニコが止まらない。何故こうも彼女が嬉しがっているのか。それは、本日、部室にお客様が訪れているからである。

「お待たせしましたー」

お茶がカップに注ぎ終わると、紬はそれぞれの席に置いていく。一つは唯、二つ目は律、三つ目は澪、四つ目を自分の席に、とした

所で紬は気づき、すぐにお客様――――薫に座っている席にカップを置いた。

「珍しいね、かおちゃんが女子軽音部に来るなんて」

本日のお菓子のみたらし団子を口に運びながら、唯は言った。

「珍しい、というか今日初めてだね」

と、薫は周りを見ながら言った。

「こんな風になってるなんて知らなかったよ」

「やっぱり、ちょっと散らかってるかな？」

紬が見たところ散らかってるように見受けられないが、澪には思うところがあるのだろう。少しそわそわしている。

「そんなことないよ。僕たちの部室に比べたら、よく整頓されてるし、聞いてたとおり、物も結構揃ってるね」

「ティーセットは私の家から持ってきたんですよ」

紬は言った。

「へぇー、そうなんだ」

薫は続けて、

「僕も家にティーセットがあるんだけど、一度も使ったことないん

だよね」

「良ければ私が教えましょうか？」

「本当、ムギ？」

「はい！」

紬は嬉しくなり、思わず声が上擦った。
教えるのが好きな性分なのだ。

「それで薫は何しに来たんだ？」

串を口にくわえながら、律は言った。見ると、律のお皿はすでに空。全てたいらげたようだ。
一人三本ずつ置いたんですけど……。
さらに、カップのお茶までもが空になっていて、紬はすぐお代わりを注いだ。

「なーなー」

律が追求すると、

「ごめん」

薫の表情は一瞬で暗い重たいものに変化する。

「おい、律！」

「えっ、私？　なんか私マズいこと言った？　べっ、別に用がない

と来てはいけないって言ってないぞ。ただ、薫がコッチの部室来るなんて初めてだから、ちょっとなんかあったかなー、なんて思ってさ。例えばテルの奴に殴られたり、テルの奴に水をぶっかけられたり、いろいろさ」

「そうなの、かおちゃん？」

「唯、それは律の妄想だから。律もいちいちテルを悪者にするのは止めろ。薫はただ遊びに来ただけだろ。なっ、薫？」

「実は用があって」

「「あるのかっ！」」

第２５話『ようがあって』（後書き）

毎度毎度こんなにも駄文な小説を読んでいただきありがとうございます。

そして私、前回のお話の後書きに今回のオリジナル回を入れた理由を明かすとか、書いてしまいましたが、

すいません！

明かせなくなってしまいました！

実は今回でオリジナル回を終わらせて、夏合宿編に入りたいな、と思っていました。でも、何故か終わりませんでした。

一応、ちゃんとこう始まってこう終わるという筋道は立ててあるんですけど。文章を書いているときに、ああしようこうしようという気持ちが強くなって、何故だがいつも余計に引き延ばしてしまうんですよ。

だから毎回歯切れが悪い！

と、自分で思ってしまいます。

でも前回と今回でなんでこういう話を入れたのかは、多分みなさんわかると思います。

なのでもう少しだけ待って下さい。

あともう少しで、夏合宿が目の前に！

第２６話『かんがえすぎ』

「それで僕が作曲を任されたんだ」

薫が昨日の男子軽音部での出来事を話した。

何故か話しているその顔は悲しげで、しんみりとした空気が部室に流れた。どうやら何か悩んでいるようだが、紬は何をどう言っていいか全くわからなくなかった。見ると唯も澪も同じだった。

その中、律はお茶をすすり、カップを置くと、勢いよく立ち上がって、

「テルの野郎！　よくも薫に押しつけやがって！！　大丈夫だ薫。私があいつに一言物申して――――イタい！？」

「空気……読め」

「そんなに……強く鳩尾に……やら……なく……て、も……」

澪に粉砕された。

復活するには少し時間が掛かるだろう。

だが、これが彼女なりの気づかいなのだ、とその場にいる全員はうなだれている律に笑みの視線を向けた。

空気が少し明るさを取り戻した。

「作曲のやり方を聞きにきたなら、ムギに聞けばいいと思うよ。実

際、女子軽音部の作曲が出来たのもムギのおかげだし」

なぁ、と澪は言った。

「そうだよ。ムギちゃんはあ～っという間に作っちゃうんだ～」

唯が褒めると、紬は「褒め過ぎよ」と控えめに返す。

「だからムギちゃんに聞けば大丈夫！」

唯は言った。

「違うんだ」

「へっ？」

予想外の返し驚いた様子の唯。

それはその場にいた他の三人も同じで、てっきり作曲のやり方を聞きにきたのだと思っていた。

「僕がここに来たのはちょっと違う理由なんだ」

「違う理由？」

「うん」

薫は小さく頷くと、自分のバッグから数枚の紙を取り出した。

「これ、一応僕が作曲した曲なんだ」

そう言い、楽譜を机の上に置く。

「み、見てもいい？」

言ったのは紬だ。

作曲を経験したからか、彼女は誰よりもその楽譜に興味津々だった。自分以外の学生が書いた曲とは一体どういうものなのか、と。

「……うん」

紬は楽譜を手に持ち、目を凝らして見始めた。他の三人も気になったのか、紬の横に立ち、楽譜を見る。

無言で一枚、また一枚とめくり、確認する。

その間、紬は自分の心臓が脈打っているのがわかった。まるで、おもちゃを初めて与えられた子供のように。

見終わると、紬は思った。

スゴイ！

自分では思いつかないコード進行、自分では考えられないアレンジ。

ぐっと手に力が入る。

横で「私達も見たいよ、ムギちゃん」と言うので、紬はすぐに渡してあげると、薫に向いて、

「スゴイです。こんな曲が作れるなんて。才能がありますよ、薫くん」

正直な気持ちを言った。

「……そう、かな」

だが、薫は元気のない返事だった。
こんなにも素晴らしい曲が作れているのに。
あっ、と紬は一つの事を思いついた。

「もしかして、あの曲に納得がいっていないの？」

紬は作曲をしている時に、納得がいかない事があった。何度も何度も書き直し、何度も何度も考えて、やっと完成させたのだ。だから、恐らく薫も薫なりの『こだわり』があるのだと紬は考えたのだ。

「……違う」

「違うの？」

「……怖いんだ」

「怖い？」

「本当にこれで良いのか、本当にこれであっていいのか、って」

「？　曲に納得がいっていないってことじゃないの？」

薫は首を振った。

「僕が怖いのはね」

「はい」

「テル達なんだ」

「来ねぇ」

「来ないな」

「来ない」

はぁ、と三人はため息をついた。

もうそろそろ部活動終了時刻になる。それなのに薫が一向に部室に現れない。

「薫がいねぇとよー。この部室、男達の臭い絵図らにしかならないんだよなー」

「お前、薫くんをそんな風に見てたのか！？」

「だけど、実際そうだろう？　見てみろ。この華もない空間を」

連太郎はぐるっと周りを確認する。

古くさい部室。

常に無表情の男、曽我部舜。

ムカつく笑みをたたえ問題事を持ってくる男、富永輝彦。

そして自分。

「確かに……な」

連太郎も認めざるを得なかった。

紬は頭を捻った。

何故、薫が輝彦達を怖いと思っているか全く分からない。いや、例え輝彦達を怖かったとしても、それと作曲がどう関係しているというのだろうか。

「どうしてテルくん達が怖いの？」

紬は聞いた。

「……僕さ。小さい時からこんな感じなんだよね」

「？」

「怖がりで泣き虫。それで親からは考え過ぎ、ってさ」

「……」

「自分でもわかってるんだけど、どうしてもダメな方向へ考えちゃうんだ」

「……ダメな方向って？」

「僕、女の子みたいな容姿をしてるでしょ」

「はい！」

「……す、少しは否定してくれても」

「ご、ごめんなさい」

紬は深呼吸をして、興奮を抑える。

「どうぞ、続けてください」

「……そのせいで、中学では男子からも女子からも、誰からも男の子としては見てくれなかったんだ」

「……」

「だから友達なんか出来なくて。給食の時、一人で食べてるなんて珍しくなかった」

「……」

「それで、高校では自分を変えようと思って、積極的に友達を作ろうとしたんだ」

「友達……テルくん達ですね」

「うん」

と薫は頷く。

「？　それと作曲の関係は？」

「あっ、ごめん。ここからが本題なんだ」

紬は身構える。

「作曲を頼まれた時、言われたんだ」

『薫に作曲を任せる』

「僕は嬉しかった。初めて友達に何かを頼まれた。これは絶対にやり遂げなきゃ、って思った」

「……」

「でもね。それと同時に不安な気持ちが僕の中に生まれたんだ」

「不安な……気持ち……」

「失敗しないか。僕でいいのか。別の人に頼んだほうがいいのではないか。考えた」

「でも薫くんは曲を作りました」

「だとしても、みんなの期待に応えられてるかどうか不安で怖いんだ。もし、納得がいかないものだったら、みんな愛想をつかせて、僕から離れていくかもしれない。そう考えたら、部室に行きづらくなっちゃって。ははははは。逃げてきちゃった」

薫が無理をして笑っているのが、わかる。

「ごめんね。こんな話して」

紬は何となく薫の気持ちがわかる気がした。

小さい頃。

ピアノコンクールでのことだ。

自分も期待に応えられているか不安で、押し潰されそうになった。

でも、あることがきっかけで、立ち直れた。

薫くんにも必要なんでしょう。立ち直るきっかけが。

「薫くん」

「うん？」

「私も不安でしょうがない時期がありました」

「……ムギも」

薫が言った。

「不安で不安で、怖くて怖くて、逃げ出したくなりました。ですけ

ど、その時、私のしつ――――ではなく友人が言ったんです」

紬は一呼吸置いて、

「『確かに誰かの期待に応えるのは不安。もしかしたら、普通に悪口を言われるよりも、怖くて痛いことかもしれない。でも、自分らしくいてさえいれば、きっと気持ちは伝わるはず』と」

「気持ちが……伝わる？」

「『気持ちが伝われば、何も怖くはない』そう言っていました」

「何も……怖くない……気持ちが伝われば……何も……怖く……」

薫は紬の言葉を復唱する。

深く噛み締めるように。

「僕の……気持ちも伝わる……かな？」

「大丈夫。だんおん部の方達は良い人ばかりだから」

紬が笑顔を向ける。

と、その時だった。

「うおおおー」と声がしたかと思うと、突如として部室の扉が開いた。

今まで楽譜に釘つげだった三人も含め、全員が扉の方を向いた。

入ってきたのは、輝彦だった。

輝彦は睨みをきかせると、

「ようやく見つけたぞ」

強く気合いの入った声で言った。

何やら怒っている様子だ。

薫もそれがわかったのか、少し泣きそうな表情になっている。怒られると思っているようだ。

「ったく。いいかげんにしろよ」

呆れたように吐き捨て、

「律！」

その視線は何故か律の方へと向いた。

「お前よくもウチの薫をさらったな！　もう許せん。決闘だあー！！」

「はぁ、いきなり来て何言ってんだよ。喧嘩売ってんのか?!」

言いつつ律は気づいていない。自分がすでに買っていることに。

あえて周りは何も言わないが。

「ここにいたのか、薫」

次いで、部室に入ってきたのは舜だ。

「……」

彼は彼で輝彦のように騒ぎ立てはしないが、元来の体格の良さの

せいである種の存在感が出ている。

「えっと……お邪魔します」

最後は当然、連太郎だ。

「いらっしゃーい」

唯は自分の家であるように言った。

「初めて来たけど部屋の感じは男子軽音部の部室と変わらないんだね」

まじまじと連太郎は部屋を観察する。

「他の男子もそうだったけど、最初にここに来ると必ず比較するのな」

澪が言うと、

「第一と第二で同じ音楽室だから、ついね。でも澪さん達がコッチの部室に来たら多分、同じ反応すると思うよ」

連太郎の言いに、澪は少し考えて、

「そうだな」

笑って言った。

「ねぇねぇ。それよりもみんなでお茶しようよ。お団子もあるし」
「おっ、おちゃぁ！？　唯さんと！」
「声が上擦ってんぞ、レン」
「こらぁ、無視すんな、テル！」
「ご馳走になる」
「待て。もう下校時間になるぞ。ゆっくりお茶してる暇ないだろ」
一気に騒がしくなる部室。
紬はその光景に笑みを浮かべ、横目で薫を見る。
「……」
呆気にとられたような顔をしていた。突然で頭が働いていないのかもしれない。
「律さん、その手に持ってるのなに？」
「これか？　これは薫が作った曲――――ってテル、勝手にとるなよ！」
「マジかよ！　出来たのか、薫？！　さすがだぜ！」
「俺にも見せろ」
「舜くん、落ち着いて。そして輝彦、俺にも見せろ」

連太郎、輝彦、舜の三人は楽譜を見る。
しばらくして、

「ここまで形にしてるなんて。薫くんスゴイよ！」

連太郎が最初に誉め、

「すっげえ！　薫、お前やっぱすげぇぜ！！　俺の目にくるいはなかった！」

次に輝彦が大袈裟に、

「スゴイ」

舜が小さく感想を言った。
三人の反応を見て、薫の顔が徐々に明るくなる。

「薫、サンキュー」

「ありがとう、薫くん」

「ありがとう」

薫の顔が赤くなり、照れているのがわかる。
可愛い。
と、紬は薫の顔を覗き込んだ。
笑顔を向けると、薫も笑顔を返した。いつものような明るい笑顔で。
そして紬は言った。

「やっぱり、薫くんの考え過ぎでしたね」

第２６話『かんがえすぎ』（後書き）

オリジナル回終わったーー。
まぁ、計三話を使った回でしたが、どうでした？
読んでいただけたらわかるでしょうが、このお話は薫の為に作った話です。
何故そんなことを？
と、問われる方もいると思います。

私の中で、薫ってよくわからない奴なんです。
男だけど女のように見える、俗に言う『男の娘』な訳ですが、言ってしまえばそれだけでキャラクターが弱いのではないか、と考えたんです。
だから薫の内面を掘り下げようと試みたわけです。
書いてる途中でもしかしたら皆さんは望んでいない展開かもしれないなんて考えましたが、今ではやって良かったと思っています。
これで薫を連太郎と輝彦と同じ位置に立たせられたんですから。

後はアイツですね。
一貫無口男だけです。
果たしてどうするか……。

次回ついに私が待ち望んだ、海合宿編です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3287r/

だんおん！

2011年12月29日02時53分発行